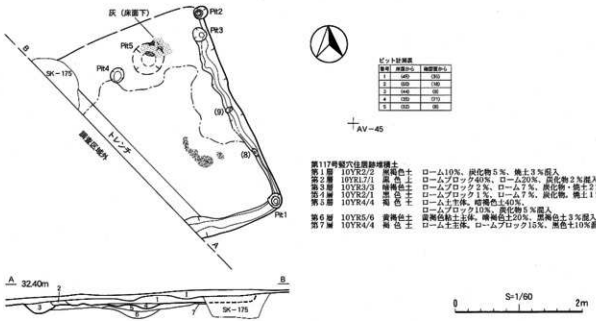


図35　第117号竪穴住居跡

［土坑］カマドの東脇に位置するピット３が住居内土坑と考えられる。94×56cm、深さ16cmの楕円形を呈する。ピット中から白頭山火山灰が検出されていることから、住居跡廃絶時には窪みの状態であったことがわかる。

［風倒木痕］住居跡北側から、平安時代のものと考えられる風倒木痕が検出された。当初、本住居跡に切られる住居跡と考えていたが、トレンチ調査の結果、風倒木痕であることが判明した。風倒木痕の堆積土上位に、十和田ａ火山灰及び黒褐色土が水平堆積しており、火山灰上からは土師器甕片４点、鉄滓１点、自然礫１点などが出土している。

［出土遺物］床面から土師器甕片４点、須恵器大甕片１点、焼成粘土塊１点、敲石１点、カマドから土師器甕片２点、周溝から土師器鉢片１点、砥石１点、堆積土中から土師器甕片６点、須恵器大甕片３点・壷片１点、板状鉄製品１点、皿状土製品１点が出土した。図34－６は何らかの金具の先端部とみられ、厚さ２～３㎜で先端は丸く加工されている。

［小結］十和田ａ火山灰を切って構築していること、本住居廃絶後、床面近くからブロック状の白頭山火山灰が堆積していることから、本住居跡は十和田ａ火山灰降下後から白頭山火山灰降下前までの間に機能していたと考えられる。（水谷）

第117号竪穴住居跡（図35）

［位置・確認］AU－44・45グリッドに位置し、標高は約32mである。第Ⅶ層上面で確認した。調査区際に位置するため、北東側半分のみ調査をおこなった。削平を受けているため、表土上から床面までの深さは約20cmで、辛うじて床面と周溝が残されているのみであった。

［重複］第175号土坑と重複し、本住居跡が古い。

［平面形・規模］壁長は北東壁3.4m、残存する北西壁2.4m、南東壁1.4mである。北東壁及び南東壁は

周溝で、北西壁は掘り方で計測した。壁高は南東壁のみ0～10cmで開きながら立ち上がる。平面形は不明である。軸方向は、N－23°－Wである。

[堆積土] 7層に分層された。第1・2層は住居跡堆積土、第3層は周溝堆積土、第4～6層は掘り方の埋土である。

[床面] 床面は堅くしまっている。調査区際付近で最も高く、北東方向へ向かって緩やかに傾斜し、レベル差は約10cmである。

[カマド] カマドは検出されなかった。

[柱穴] ピット1・2が主柱穴と考えられる。規模はピット1が径22cmの円形、ピット2が22×20cmの円形を呈する。2基とも径10～14cmの柱痕が確認され、床面からの深さは45～50cmを測る。このほか、ピット1・2と同規模のピット3・4も柱穴の可能性がある。ピット3は径22cmの円形、ピット4は22×20cmの円形で、推定される床面からの深さは約35～44cmである。

[周溝] 南東壁から北東壁のピット3にかけて幅7～40cm、深さ2～17cmの周溝が検出された。南東壁の調査区際が最も深く広くなっている。

[ピット] ピットは1基検出された（ピット5）。掘り方の埋土の除去中に、40×30cmの不整形の炭化物混じりの灰の範囲が確認され、それらの下から、32×30cm、確認面からの深さ8cmの円形のピットを確認した。床面上からは確認できなかったことから、本住居跡に伴わない可能性がある。

[出土遺物] 掘り方の埋土から土師器甕片2点、須恵器大甕片1点が出土したが、小片のため図示できなかった。

[小結] 本住居跡の年代は平安時代と考えられる。（水谷）

第118号竪穴住居跡（図36・37）

[位置・確認] AT・AU－42・43グリッドに位置し、標高約32.5mである。第Ⅶ層上面で周溝を確認した。

[重複] 第119号竪穴住居跡、第145・148・149号土坑と重複し、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 西壁と南壁の一部が検出され、西壁は4.3mである。柱穴の位置から東壁3.9m、南壁5.1m、北壁4.5mと推定され、平面形は東西に長い歪んだ長方形を呈すると考えられる。推定床面積は17.5㎡である。住居跡の軸方向はN－2°－Wである。

[堆積土] 確認できたのは周溝堆積土とピット堆積土のみである。

[床面] 削平により検出されなかった。

[カマド] 検出されなかった。

[柱穴] 10基検出された(ピット1～10)。ピット1・5・9・10は四隅に、ピット2～4・6は周溝内、ピット7・8は壁際に位置すると考えられる。西壁と南壁に検出されたピット1～6は60～90cmの間隔で並んでいる。

[周溝] 幅12～27cm、深さ1～10cmの周溝が西壁及び南壁の一部を巡る。

[ピット] 4基検出された(ピット11～14)。ピット11・12は第119号竪穴住居跡に伴う可能性がある。

[土坑] 位置的に第148・149号土坑が本住居跡の住居内土坑の可能性がある。

[出土遺物] 床面が削平されており、出土遺物はほとんどない。周溝堆積土から須恵器壺片が1点出土

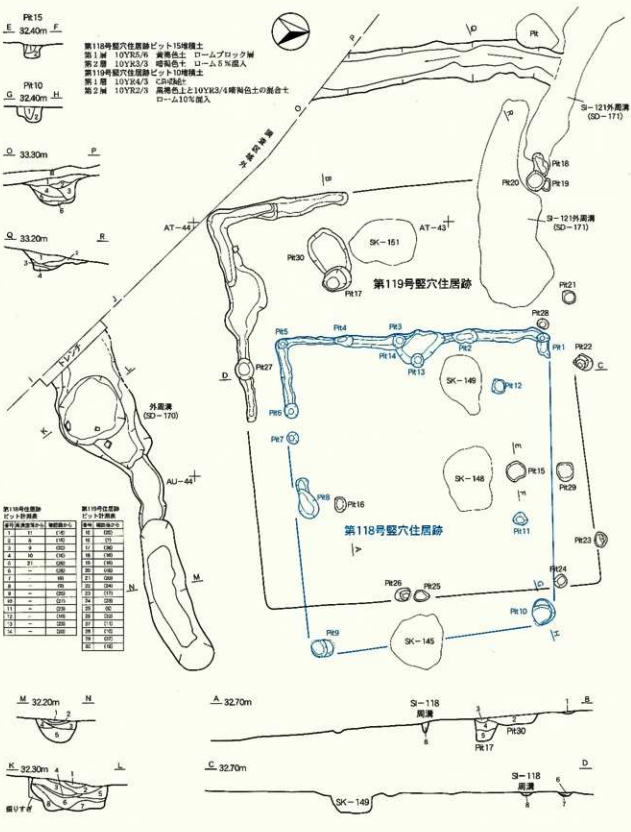


図36　第118・119号竪穴住居跡（1）

第119号竪穴住居跡外周溝(第120号溝跡)堆積土
（I－J・K－L）

第1層	10YR2/3	黒褐色土 ローム10%、炭化物2%、焼土1%混入
第2層	10YR2/3	黒褐色土 ローム10%、ロームブロック3%、炭化物7%、焼土3%混入
第3層	10YR2/3	黒褐色土 ローム20%、ロームブロック7%、炭化物7%、焼土2%混入
第4層	10YR2/2	黒褐色土 炭化物30%、褐色土3%混入
第5層	10YR3/1	黒褐色土 ローム3%、炭化粒3%混入
第6層	10YR2/2	黒褐色土 ローム7%、ロームブロック3%、炭化物7%、焼土3%混入
第7層	10YR2/2	黒褐色土 ローム2%、炭化物3%、焼土1%混入
第8層	10YR3/2	黒褐色土 ローム7%、炭化物3%混入
第9層	10YR2/2	黒褐色土 ローム20%、炭化物2%混入
第10層	10YR2/2	黒褐色土 ローム10%、炭化物1%混入
第11層	10YR2/2	黒褐色土と10YR3/3 暗褐色土の混合土
第12層	10YR1.7/1	黒色土 ローム5%、ロームブロック25%、炭化物2%混入

(M－N)

第1層	10YR2/3	黒褐色土 ローム10%、炭化物2%、焼土1%混入
第2層	10YR2/1	黒色土と10YR2/2 黒褐色土の混合土 ローム5%、炭化物5%、焼土1%混入
第3層	10YR2/2	黒褐色土 ローム7%、ロームブロック3%、炭化物7%、粘土30%混入
第4層	10YR3/3	暗褐色土 ローム10%、ロームブロック3%、炭化物3%混入
第5層	10YR2/3	黒褐色土 ローム10%、ロームブロック3%、炭化物10%、焼土3%混入

(O－P)

第1層	10YR2/2	黒褐色土 ローム7%、炭化物2%混入
第2層	10YR3/3	暗褐色土 ローム25%、ロームブロック2%、炭化物1%混入
第3層	10YR2/3	黒褐色土 ローム7%、ロームブロック3%、炭化物2%混入
第4層	10YR3/3	暗褐色土 ローム10%、炭化物3%混入
第5層	10YR3/3	暗褐色土 ローム5%、炭化物2%混入
第6層	10YR4/4	褐色土 ローム質土層

(Q－R)

第1層	10YR3/4	暗褐色土 ローム3%、炭化物2%混入
第2層	10YR3/4	暗褐色土 ローム3%、炭化物1%、焼土1%混入
第3層	10YR4/4	褐色土 ローム3%、炭化物1%、焼土1%混入
第4層	10YR4/4	褐色土 ローム5%、炭化物2%混入

図37　第118・119号竪穴住居跡（2）

している(図37－8)。

[小結] 削平により不明な部分が多いが、四隅とその中間に柱穴をもつ構造と推測される。出土遺物も少なく、時期は明確ではないが、本住居跡と重複する第119号住居跡との重複関係から、10世紀としておく。（田中）

第119号竪穴住居跡（図36・37）

[位置・確認] AS～AU－42・43グリッドに位置し、標高約32.5mである。第Ⅷ層上面で周溝を確認した。

[重複] 第118号竪穴住居跡、第121号竪穴住居跡外周溝、第148・149・151号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 壁は削平により一部が残存するのみであるが、柱穴の位置から東壁5.3m、西壁5.4m、南壁6.4m、北壁6.6mと推定され、平面形は東西に長い長方形を呈すると考えられる。推定床面積は32.5㎡である。住居跡の軸方向はN－6°－Wである。

[堆積土] 周溝とピットの堆積土のみ確認された。

[床面] 検出されなかった。

［カマド］検出されなかった。
［柱穴］13基検出され(ピット15～27)、ピット15～17が主柱穴と考えられる。いずれも壁から1.0～1.6m離れていると推定される。柱間距離はピット15・16間が2.8m、ピット16・17間が3.5mである。ピット18～20は住居北西隅に位置すると考えられるが、第121号住居跡外周溝の先端部にあたり、3基のピットがすべて本住居跡に伴うかは判断し難い。ピット21～27は壁際に位置すると考えられ、壁際の柱穴は不規則に並び、柱穴間の距離は0.8～2.5mとバラツキがある。ピット25・26は、ほぼ同じ場所に複数の柱穴が位置し、建て替えがおこなわれた可能性が考えられる。
［周溝］幅13～60cm、深さ1～18cmの周溝が南西隅に検出された。
［ピット］3基検出された(ピット28～30)。
［土坑］位置的に第148・149・151号土坑が本住居跡の住居内土坑の可能性がある。
［外周溝］第170号溝跡が外周溝と考えられる。住居の南側から西側にかけて構築されており、平面形はL字状を呈する。住居跡から1.2～1.8m離れている。幅は34～126cmであるが、西側では48～68cmと比較的一定である。深さは4～41cmで、断面形は東端部で浅いU字状を呈するが、ほかは底面に起伏がある逆台形状を呈する。堆積土はローム・ロームブロック・炭化物などが混入する黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。Ⅰ－Jセクションでは埋没過程で新たに浅い溝(第1～5層)が構築されており、外周溝の付け替えがおこなわれたと考えられる。
［出土遺物］床面が削平されており、住居跡からは遺物は出土しなかった。外周溝堆積土から土師器坏1点・甕16点、鉄滓1点が出土している。図37－4はロクロ不使用の坏である。器厚があつく、口縁断面は先細りである。ケズリによって成形され、底部が小さくすぼまる器形である。内面調整はナデである。
［小結］本住居跡は4本の主柱穴と壁際に柱穴を有する構造である。住居部分をL字状に囲む外周溝が伴う。ピット17堆積土最上層に白頭山火山灰が混入するが、床面が削平され、堆積状況が明確ではなく、流れ込みの可能性も考えられる。本住居跡の時期としては10世紀としておく。　（田中）

第121号竪穴住居跡（図38・39）
［位置・確認］AS・AT－40・41グリッドに位置し、標高約33mである。第Ⅶ層上面でロームと炭化物が混入する暗褐色土のプランとして確認された。
［重複］第122号竪穴住居跡、第107号掘立柱建物跡、第187号溝跡、第153～155・167・185号土坑と重複し、本住居跡は第122号住居跡より古いが、掘立柱建物跡・溝跡・土坑との新旧関係は不明である。外周溝が第119号竪穴住居跡外周溝、第138号土坑、第172・174・223・224号溝跡と重複し、第174号溝跡より新しく、第138号土坑・第172号溝跡より古い。第119号住居跡、第223・224号溝跡との新旧関係は不明である。
［平面形・規模］西壁は6.4mで、東壁6.3m、南壁5.3m、北壁5.2mと推定され、平面形は南北に長い長方形と考えられる。推定床面積は31.3㎡である。住居跡の軸方向はN－11°－Eである。
［堆積土］7層に分層された。ロームと炭化物が混入する暗褐色土を主体とする。中央部南寄りに1.5×0.6mの範囲で焼土がひろがっているが、本住居跡に伴うものかどうかは不明である。
［床面］西側の一部が検出され、検出部の中央が約10cm高い。ロームと暗褐色土が混入する褐色土で

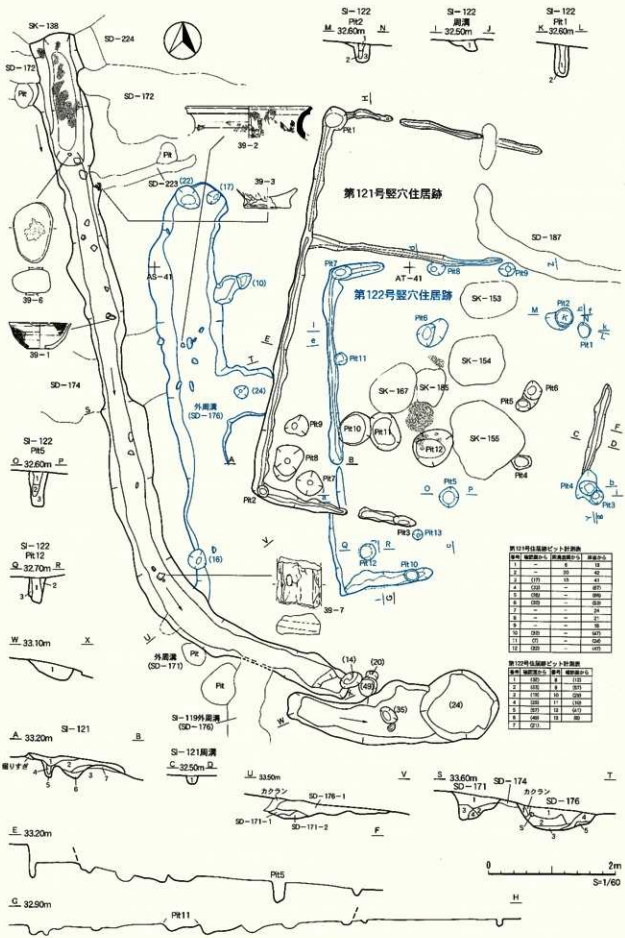
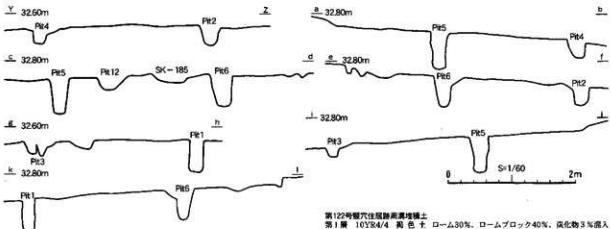


図38　第121・122号竪穴住居跡（1）



第121号竪穴住居跡埋積土
第1層　10YR3/4　暗褐色土　ローム7％、炭化物3％混入
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ローム7％、炭化物2％、焼土1％、黒褐色土混入
第3層　10YR3/3　暗褐色土　ローム3％、炭化物2％混入
第4層　10YR3/4　暗褐色土　ローム2％、炭化物1％、焼土1％混入
第5層　10YR3/4　暗褐色土と10YR6/4　鈍黄土の混合土　ローム7％、炭化物1％、焼土1％混入
第6層　10YR4/4　褐色土　ローム層、炭化物1％、焼土1％混入
第7層　10YR4/6　褐色土　粘土層、ローム3％、暗褐色土10％混入
第121号竪穴住居跡貯蔵穴埋積土
第1層　10YR4/4　褐色土　粘土ブロック40％、ローム20％、炭化物1％、焼土1％混入
第121号竪穴住居跡外周溝(第171号溝跡)埋積土
(S－T)
第1層　10YR3/2　黒褐色土　ローム5％、炭化物1％、焼土1％混入
第2層　10YR3/3　暗褐色土　ローム7％、炭化物3％混入
第3層　10YR3/2　黒褐色土と粘土の混合土　ローム5％、炭化物1％混入
第4層　ロームブロックと粘土ブロックの混合土　黒褐色土15％混入
(U－V)
第1層　10YR4/4　褐色土　ローム7％、炭化物3％、粘土2％混入
第2層　10YR4/4　褐色土　ローム5％、炭化物2％、焼土1％、粘土2％混入
(W－X)
第1層　10YR4/4　褐色土　ローム5％、炭化物2％混入

第122号竪穴住居跡周溝埋積土
第1層　10YR4/4　褐色土　ローム30％、ロームブロック40％、炭化物3％混入
第122号竪穴住居跡ピット1埋積土
第1層　10YR3/2　黒褐色土　ローム7％、ロームブロック2％混入
第2層　10YR3/4　暗褐色土と粘土の混合土　ロームブロック3％、炭化物3％混入
第122号竪穴住居跡ピット2埋積土
第1層　10YR3/2　黒褐色土　ローム7％混入
第2層　10YR3/3　暗褐色土　ローム3％混入
第3層　10YR4/4　褐色土と粘土の混合土　ロームブロック10％、炭化物2％混入
第122号竪穴住居跡ピット3埋積土
第1層　10YR3/3　暗褐色土　ローム3％、炭化物1％、焼土2％混入
第2層　10YR4/4　褐　色　土　粘土質土層
第3層　10YR5/6　黄褐色土　ローム30％、ロームブロック5％、粘土40％混入
第122号竪穴住居跡ピット4埋積土
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム7％、炭化物2％混入
第2層　10YR5/6　黄褐色土　ロームブロック層、暗褐色土20％混入
第3層　10YR3/4　暗褐色土　ローム30％、ロームブロック30％、黒褐色土30％混入
第122号竪穴住居跡外周溝(第176号溝跡)埋積土
(S－T)
第1層　10YR3/3　暗褐色土　ローム5％、炭化物1％、焼土2％混入
第2層　10YR3/3　暗褐色土　ロームブロック20％、ローム20％、炭化物1％混入
第3層　10YR3/3　暗褐色土　ローム5％、炭化物1％混入
第4層　10YR3/2　黒褐色土　ローム10％、炭化物1％混入
第5層　ロームブロック層
(U－V)
第1層　10YR4/4　褐色土　ローム5％、炭化物2％混入

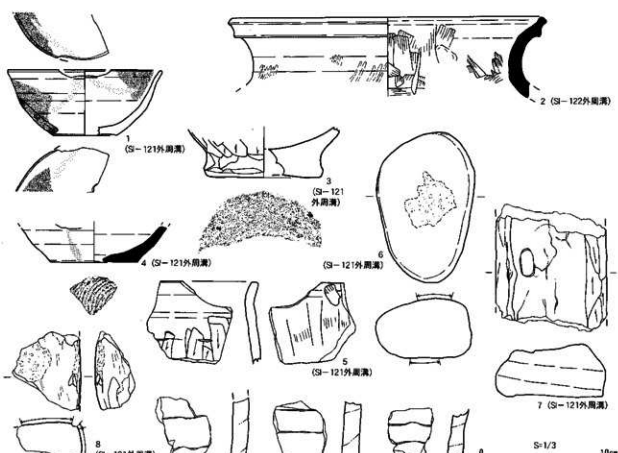


図39　第121・122号竪穴住居跡（2）

構築されている。
［カマド］検出されなかった。
［柱穴］３基検出され(ピット１～３)、いずれも周溝内に位置し、ピット１・２は住居隅に位置する。
［ピット］９基検出された(ピット４～12)。ピット10～12は径56～66cmの円形を呈し、検出面からの深さは７～32cmである。重複する第122号住居跡に伴う可能性もある。
［土坑］第153～155・167・185号土坑は位置的に本住居跡の住居内土坑の可能性がある。
［周溝］幅６～24cm、深さ１～18cmの周溝が断片的に巡る。北壁から2.3m南に住居を横切る溝跡が検出された。幅８～24cm、深さ２～10cmである。本住居跡の拡張前の住居に伴う周溝の可能性と間仕切り溝の可能性が考えられるが、床面が残存しないため不明である。
［外周溝］第171号溝跡が外周溝と考えられる。西側から南側にかけて構築され、平面形はＪ字状を呈し、幅35～80cm、深さ１～51cmである。南端部は一旦途切れ、若干外側に幅38～108cm、深さ７～21cmの溝を構築している。断面形は逆台形状を呈する。先端部には径123cm・深さ24cmの土坑が付属する。堆積土は黒褐色土と褐色土が混在し、一部埋め戻しや斜面からの流れ込みによる埋没と考えられる。外周溝と住居の距離は南～南西側では1.8～2.4mであるが、北西隅では4.0mで、北に向かい距離は開く。外周溝の向きが本住居跡の軸方向と異なり、本住居跡と重複する第122号住居跡の軸方向に近いことから、第122号住居跡に伴う可能性も考えられる。しかし、本外周溝と第122号住居跡の距離は南側では1.6mであるが、西側では3.0mで、本住居跡と比較して特に近いわけではなく、外周溝が住居の規模に比べて長いことから本住居跡に伴うものと考えた。本住居廃絶後、第122号住居構築後も本外周溝を使用していたが、住居から離れすぎているなどの不都合が生じ、内側に新たな外周溝(第176号溝跡)を構築したと考えられ、第122号住居跡を構築する際には本外周溝の向きを意識していた可能性も考えられる。
［出土遺物］堆積土から土師器甕が４点、床構築土から須恵器壺が１点出土している。外周溝堆積土から土師器坏７点・甕45点・製塩土器19点、須恵器坏２点・大甕９点、礫石器１点、鉄滓２点が出土している。図示できた遺物は外周溝出土のものである。図39－１の土師器坏の口縁部には外面から内面にかけて帯状の被熱痕がみとめられた。図39－５は口縁部にロクロ調整がみられる土師器甕片である。図39－７の焼成粘土版の断面には成形時に粘土を折り畳んだ痕跡が見られる。
［小結］本住居跡は周溝と四隅に柱穴をもつ構造と推測され、Ｊ字状の外周溝が伴うと考えられる。本住居跡の時期は床面が残存しないため、遺物も少なく、明確ではないが、外周溝が重複する第119号住居跡の時期と考え合わせて、10世紀としておく。（田中）

第122号竪穴住居跡（図38・39）

［位置・確認］AS・AT－41・42グリッドに位置し、標高約32.5mである。第Ⅶ層上面で周溝が確認された。
［重複］第121号竪穴住居跡、第107号掘立柱建物跡、第187号溝跡、第153～155・167・185号土坑と重複し、第121号住居跡より新しいが、掘立柱建物跡・溝跡・土坑との新旧関係は不明である。外周溝(第176号溝跡)が第121号竪穴住居跡外周溝・第174号溝跡と重複し、本外周溝が新しい。
［平面形・規模］西壁は5.2mで、平面形は方形を呈すると考えられる。住居跡の軸方向はN－3°－W

である。
[堆積土] 周溝とピットの堆積土のみが確認された。
[床面] 削平により検出されなかった。
[カマド] 検出されなかった。
[柱穴] 12基検出され(ピット1～12)、ピット1～6が主柱穴と考えられる。ピット1・3・5・6を主柱穴とする段階と、ピット5・6を継続使用し、ピット2・4・5・6を主柱穴とする段階があると考えられる。柱間距離はピット1・3間が2.6m、ピット3・5間が2.2m、ピット5・6間が2.6m、ピット2・4間が2.7m、ピット4・5間が2.2m、ピット2・6間が2.2mである。ピット2・4を用いる段階よりピット1・3を用いる段階の方が柱間距離が長く、ピット2からピット1へ、ピット4から3への南方向への建て替えがおこなわれたと考えられる。ピット1・3・5は径23～30cmの円形、ピット2・4・6は長軸42～53cmの楕円形を呈する。検出面からの深さはピット5が57cm、ピット6が49cmと深く、ピット3が19cmと浅いが、ほかは30cm前後である。ピット7～11は壁際に位置すると推測される。周溝よりやや内側に位置するピット8・9・11は新段階に伴うと考えられ、主柱穴の作り替えに伴い、位置をずらしたと考えられる。ピット2は第107号掘立柱建物跡のピットとしても使われていると考えられる。
[周溝] 幅7～25cm、深さ1～19cmの周溝がほぼ一巡する。
[ピット] 1基検出された(ピット13)。
[土坑] 位置的に第153～155・167・185号土坑は本住居跡に伴う住居内土坑の可能性がある。
[外周溝] 第176号溝跡が外周溝と考えられる。住居の西側に西壁とほぼ平行して構築されており、平面形は直線状である。北側は平面形が明瞭であるが、南側では不明瞭である。住居から1.6m離れている。幅70～103cm、深さ4～37cmで、断面形は半円状を呈する。堆積土は黒褐色土を主体とするが、一部人為堆積の様相を呈する。本外周溝のほぼ中央から斜面に対して直交する溝が分岐する。外周溝内にたまった雨水がこの部分から住居内に流れ込むと考えられるが、調査時に溝跡の重複を見落とした可能性もある。
[出土遺物] 外周溝堆積土から、土師器坏2点・甕11点・製塩土器1点、須恵器大甕5点・鉢1点が出土している。須恵器大甕(図39－2)は第121号住居跡外周溝(第171号溝跡)堆積土出土の破片と接合している。頸部にはタタキの痕跡がみられる。
[小結] 本住居跡は4本の主柱穴と壁際に柱穴をもつ構造と考えられる。主柱穴のうち2本は建て替えが行われている。直線状にのびる外周溝が付属する。床面が残存しないため、遺物も少なく、時期は明確ではない。第121号住居跡との関連性を考えて、10世紀としておく。　(田中)

第123号竪穴住居跡（図40）

[位置・確認] AW－46グリッドに位置し、標高は約32mである。基本層序第Ⅶ層上面で確認された。調査区際に位置するため、北側のコーナーを調査したのみである。
[平面形・規模] 残存する北東壁は1.6m、北西壁は2.2mで垂直に立ち上がる。平面形は不明である。軸方向はN－37°－Eである。
[堆積土] 平安時代の生活面より下位まで削平されているため、耕作土である第Ⅰ層を除去したところ

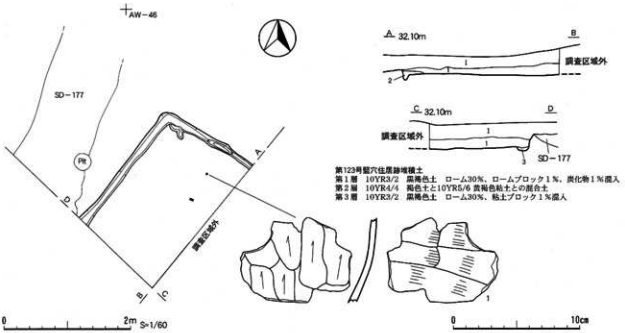


図40　第123号竪穴住居跡

から床面までの厚さは10～20cmであった。堆積土は３層に分層された。黒褐色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。第２・３層は周溝堆積土である。

［床面］第Ⅷ層床面としている。床面は概ね平坦で、やや堅くしまりがみられる。

［カマド］検出されなかった。

［柱穴］検出されなかった

［周溝］幅10～14cm、深さ６～14cmの周溝が検出された。北東壁の西寄りに長さ44cm、幅10cm、床面からの深さ15cm、周溝底面からの深さ６cmの溝状の落ち込みが検出された。

［ピット］検出されなかった。

［出土遺物］堆積土中から、接合しない土師器甕片14点が出土し、このうち１点を図示した。

［小結］出土遺物から、本住居跡の年代は平安時代と考えられる。　（水谷）

第124号竪穴住居跡

［位置・確認］AU～AX－39～42グリッドに位置し、標高は31～32mである。第Ⅷ層上面で確認された。西から東へ向かう緩斜面にあり、床面近くまで削平を受けているため、住居跡の東側半分は床面を検出することができなかった。調査の結果、外周溝・排水溝をもつ住居跡から、外周溝・排水溝・掘立柱建物跡の施設をもつ住居跡へと建て替えられ、それぞれの住居跡や外周溝にも掘り直しや付け替えがあり、居住年数の長い住居跡であることが判明した。堆積土の状況から、住居廃絶時に焼失したと考えられる。本稿では、拡張後を第124Ⅰ号竪穴住居跡、拡張前を第124Ⅱ号竪穴住居跡とし、それぞれについて記載する。なお、床面の削平によりどちらの住居跡に伴うか明確でないピットについてはそれぞれの平面図に入れた。

［重複］第124Ⅰ・Ⅱ号竪穴住居跡と重複する遺構との新旧関係は下表の通りである。

住居跡と重複	第１６４号土坑	住居跡より新
	第１７８号土坑（第１２４Ⅰ号のみと重複）	新旧不明
	第１８８号溝跡	住居跡より旧
	第２１３号溝跡	新旧不明
外周溝と重複	第１６５号土坑（第１２４Ⅰ号のみと重複）	外周溝より新
	第１８３号土坑	新旧不明
	第１７７号溝跡	外周溝より新
	第１８７号溝跡（第１２４Ⅰ号のみと重複）	外周溝より新
	第２００号溝跡	外周溝より新
	第２０５号溝跡（第１２４Ⅰ号のみと重複）	新旧不明

第124Ⅰ号竪穴住居跡（図41・42）

［平面形・規模］削平により、住居跡の東側半分の床面及び周溝は残存しない。壁長は西壁８m、残存する南壁4.5m、北壁5.4mで壁は開き気味に立ち上がる。主柱穴ピット９・10の位置から東壁は第124Ⅱ号竪穴住居跡東壁と共有していた可能性が高く、西・南・北方向へ拡張をおこなったと思われる。従って平面形は東西壁８m、南北壁約７mの長方形と推定される。推定される住居跡部分の床面積は50㎡、住居跡の軸方向はN－4°－Eである。

［堆積土］15層に分層された。第１～３層には焼土・炭化物・炭化材・ロームブロックが多く含まれ、住居廃絶時に焼失したと考えられる。炭化材は残存状態が良くなく、そのほとんどは長さ20cm、幅10cm程度の小さな炭片である。比較的大きいものは板材で、最大で長さ75cm、幅40cmのものがみられる。柱と考えられる炭化材はみられない。腰板状の炭化材１点、板状炭化材５点、樹皮状炭化材１点について樹種同定をおこなったところ、腰板・樹皮・板状炭化材３点はアスナロ、床面上の薄板２点はカツラ、厚さ５cmの板材がクリという結果であった（第３章第４節）。このことから、部材によって樹種を選択していたと考えられる。第６・７層はピット１堆積土、第９層はピット２堆積土で、ともに柱の抜き取り後に粘土ブロックで埋め戻しがおこなわれている。第10～12層は床構築土と考えられ、暗褐色土や黒褐色土に多量のロームブロックを混入した土壌でつくられており、堅くしまっている。このうち、第10・12層部分は第124Ⅱ号竪穴住居跡の外周溝を埋めた部分である。第４・５層と第13～15層は周溝堆積土である。第13～15層では、周溝に掘り直しの痕跡が確認され、第15層を堆積土とする周溝から、外側の第14層を堆積土とする周溝へ掘り直し、第13層のロームで埋め戻している。第14層からは白頭山火山灰の小ブロックが検出されている。

［床面］床面の残存範囲は住居跡西側の約半分である。残存する床面は概ね平坦で、西から東に向かって10cm程度傾斜している。第Ⅶ層を直接床面としており、第124Ⅱ号竪穴住居跡床面と重複する部分には床構築土を貼り、堅くふみしめている。

［カマド］検出されなかったが、外周溝の開口する東壁沿いにつくられていたと考えられる。

［柱穴］ピット１・２・７～19が柱穴と考えられる。このうち、主柱穴と考えられるのはピット１・２・９・10である。ピット９・10は幅の狭い長方形・長楕円形を呈し、ピット１・２は幅広の長方

形・楕円形を呈する。柱間距離はピット1・2間、ピット9・10間で4.9m、ピット1・9間、ピット2・10間で4.4mである。深さは確認面から約20～30cmである。ピット7・8はそれぞれピット1・2の外側に位置し、これらより浅いことから、ピット1・2の支柱穴とみられる。ピット7は40×36cmの方形、ピット8は70×42cmの不整楕円形である。ピット11・12は径20～30cmの小柱穴で、ピット1・2間を三等分する位置にある。ピット13もピット9・10を結ぶ線上の、ピット12に対応する位置にあるため、同様の小柱穴とみられる。周溝内部には周溝底面より6cm程度深く掘り込まれている箇所があり、規模は30～60×10cmの楕円形状を呈する（ピット14～19）。ピット16と19は住居跡隅、ピット15・17はピット1近く、ピット18はピット2近くに位置し、腰板設置のための掘り方というよりは、板状の柱を建てた柱穴と思われる。ピット14は周溝を掘り直す際にロームで埋められていることから、内側の周溝に伴う柱穴と考えられる。

[周溝] 西・南・北壁から幅10～24cm、深さ3～17cmの周溝が検出された。南北壁の東寄りと東側からは検出されていないものの、削平によるものかどうかは不明である。第191号溝跡として調査した長さ140cm、幅20cm、確認面からの深さ12cmの溝が東壁沿いの周溝の可能性もある。周溝は南壁では30～42cmと幅がほぼ倍になっているが、これは周溝が2本に分かれているためで、内側が古く外側が新しい。外側の周溝を掘り直し腰板を設置する際に、掘り方及び内側の周溝をロームブロックで埋めている。

[ピット] ピットは12基検出された（ピット21～32）。ピット21は南西隅から検出された浅いピットで、堆積土中から炭化物が検出された。ピット22は南側の周溝上に位置する。内側の周溝を埋めたロームを切って掘られたピットである。外側の周溝より内側に位置し、本住居跡に伴うかどうか判断しがたい。ピット23～32も本住居跡内及び掘立柱建物跡付近にはあるものの規則性がなく、床面が残存しない範囲にあるため本住居跡との関係も不明である。ここでは図示するに留めた。

[土坑] 南壁近くから、90×60cm、確認面からの深さ17cmの長方形の土坑が検出された（ピット20）。第161号土坑として調査したものである。堆積土は7層に分層され、主に焼土層と炭化した板材が多量に混入する炭化物層で構成される。板材は本住居跡の中でも残存状態が良い方で、幅30～40cm、厚さ6cmの板が炭化して土坑内に落ち込んだ状態で検出された。住居の機能時には土坑を板材で塞いでいたと思われる。板材は一部を放射性炭素年代測定したところ、1220±40B.P.（A.D.870年）という結果が得られた（第3章第1節参照）。

[掘立柱建物跡] ピット3～6が本住居跡に伴う掘立柱建物跡と考えられる。1間×1間、桁行4.7～4.8m、梁行2.2～2.4mで住居跡主柱穴の東西ラインのほぼ延長上に位置し、平面形態は台形気味の長方形である。柱穴掘り方の平面形はピット3が長方形、ピット4は方形、ピット5は楕円形、ピット6は菱形を呈し、確認面からの深さはピット3・4が42・45cmと深く、ピット5・6は19cmと浅い。ピット5・6が傾斜下位に位置するためとみられる。ピット4・5の堆積土はそれぞれ3層に分層され、上層に暗褐色土、下層に黒褐色土が堆積する。ピット3の第3層中からは土器片と鉄滓2点が出土した。また、ピット3の西側には抜き取り痕とみられる、確認面からの深さ27cmのピットが検出された。ピット4の第1層は幅10cm程度の柱痕とみられ、上位には焼土が多く混入し、柱が抜き取られたすぐ後に上部構造の焼失に伴う焼土が堆積したとみられる。第3層中からは土師器甕片2点が出土した。このほか、ピット5の底面付近からは径10cmの粘土塊が出土している。

［排水溝］第185号溝跡が本住居跡の排水溝と考えられる。ピット9・10をほぼ2分する位置から南東方向へ向かい、第177号溝跡と重複してこれに切られている。確認できた長さは6.2mで、幅16～42cm・深さ4cmの細く浅い先端部から、約40cm下位で段を有して幅30cm・深さ5～22cmへ広がる。途中で本住居跡の東側の周溝の可能性があると述べた第191号溝跡コーナー部分と重複する。深さは南東方向へ向かうにつれ深くなる傾向がある。住居跡内の先端部から南東部端までの比高差は34cmである。

［外周溝］第183号溝跡が本住居跡の外周溝にあたり、第128号竪穴住居跡外周溝（第200号溝跡）、第177・187・205号溝跡、第165号土坑と重複している。住居跡の西側から南側をほぼL字状に囲んでつくられ、総延長は34.8mを測る。住居跡西壁沿いの第165号土坑付近が分水嶺となり、比高差25cmで北端に、比高差120cmで東端に至る。北端から南西側コーナー付近までは幅30～50cm、深さ6～20cmの狭く浅い溝で、北端は幅180cm、深さ25cmの土坑状に広がる。北端の土坑は住居跡北壁より4.4m北側に位置し、そこから溢れた水が住居跡側へ流れずに北東方向へ向かうよう、頭を北東寄りにもたげた形で閉じている。住居跡南側では南西側コーナー近くで24cmの段を有して幅100cm、深さ60cmの断面形がU字状を呈し、住居跡南壁中央付近で最も広がって幅154cmを測る。斜面下方へ向かうにつれて浅く狭くなり、第177号溝跡との重複以東では幅26～34cm、深さ3cmとなる。東端は掘立柱建物跡をカバーする位置まで伸び、第128号竪穴住居跡外周溝と重複している。外周溝は住居跡の壁と平行につくられ、西側は住居跡壁から約140cm、南側は約240cmの間隔が保たれている。西壁の北寄りには溝が分岐する部分が確認され、途切れる内側が古く、溝を延長するべく掘り直されたことが観察できる。また、南西側コーナー部分、南側東寄り部分の溝底面にそれぞれ段があり、土層観察から外側から内側へ掘り直されたとみられる。堆積土は数箇所の土層観察により、5～9層に分層された。共通して観察されるのは最終的に黒褐色土の自然堆積で埋没していることと、黒褐色土の上位には流れ込みとみられる白頭山火山灰が検出されることである。下層は部分によって様相が異なり、北端の土坑部分（G－Hセクション）は黒褐色土で構成され、底面に粘土範囲が残されていた。I－Jセクションは白頭山火山灰の混入する黒褐色土の上層と、掘り直しの際に埋め戻されたとみられる褐色土主体の下層とで構成される。M－Nセクションでは第1～7層までは黒褐色土を主体とし、第8層以下では暗褐色土や掘り直しの際に埋められたと思われる褐色土がみられる。E－Fセクションでは第1～3層が最終段階の黒褐色土とみられ、第4～7層からの掘り直しが確認できる。第4層が白頭山火山灰を主体とする層であることから、掘り直されたのは火山灰降下後と考えられる。下流は特に泥や土が溜まりやすかったために部分的に掘り直しがおこなわれたものとみられる。

［出土遺物］土師器甕片が床面より4点、堆積土中より4点、掘立柱建物跡のピット中より2点、先端の扁平な棒状鉄製品が床面より1点、羽口が堆積土中より1点、鉄滓が掘立柱建物跡の堆積土中より2点出土した。その他、外周溝堆積土中からは土師器甕片16点、坏片2点、須恵器壺片1点、坏片1点、自然礫4点、鉄滓2点が出土した。図42－4の土師器甕の口縁部は雑なつくりで、外反させた親指の痕跡が明瞭に残っている。図42－7の土師器甕の底部は底径が大きく、木葉痕がみられる。

［小結］本住居跡は掘立柱建物跡・排水溝・外周溝を伴う住居跡である。炭化材の中に柱材が残されていないこと、主柱穴が埋め戻されていること、床面上の遺物が少ないことから、廃絶に際し主柱の抜き取りや必要な道具の片付けをおこなった後、残骸を燃やしたと考えられる。その時期は掘り直し前

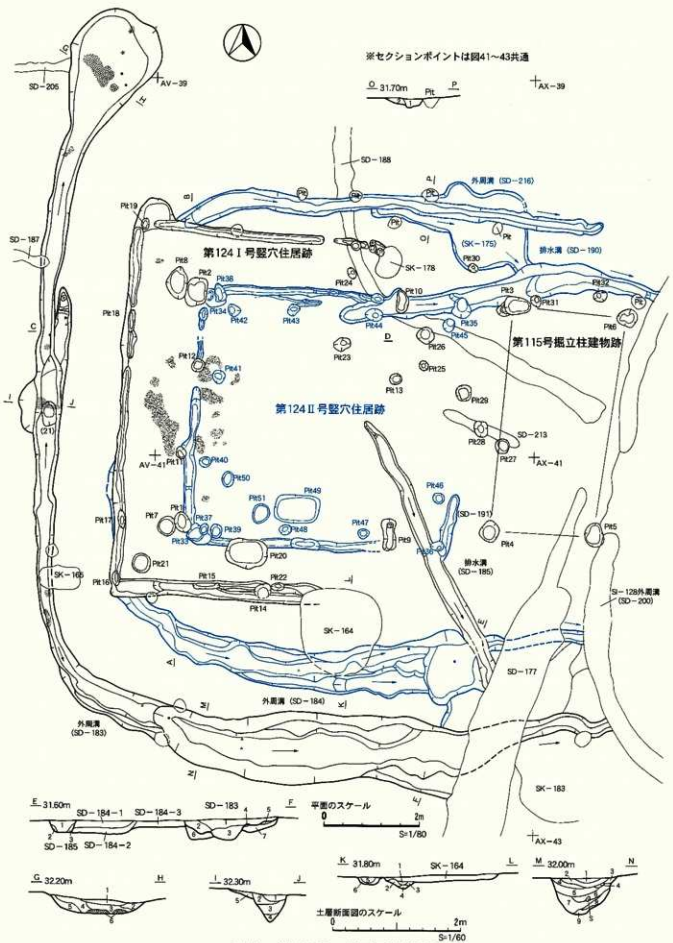
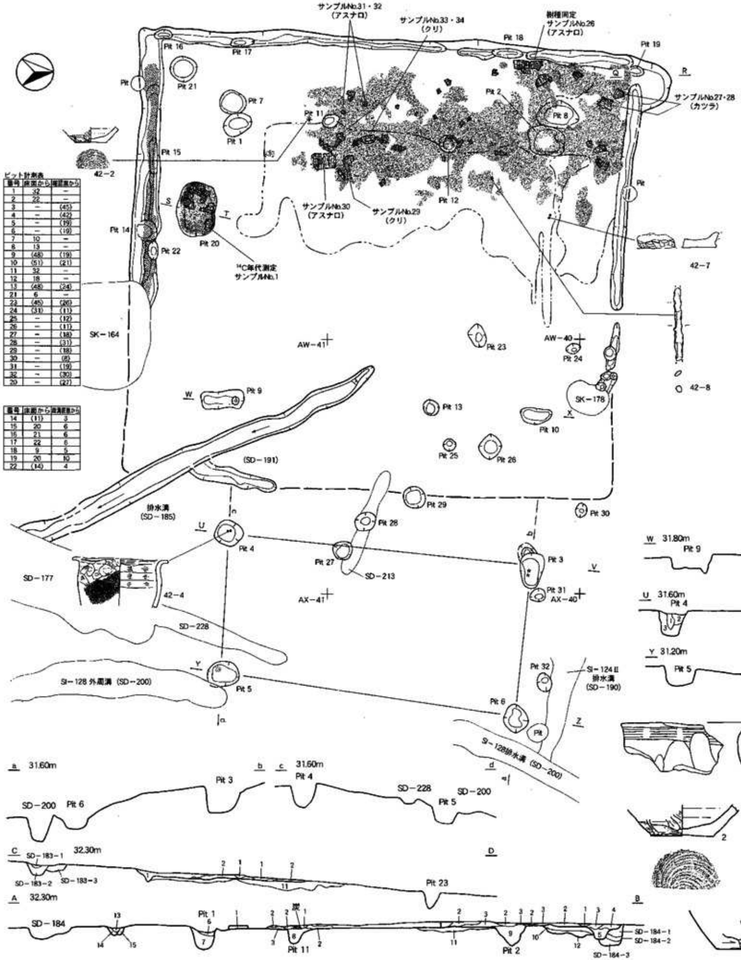


図41　第124Ⅰ・Ⅱ号竪穴住居跡



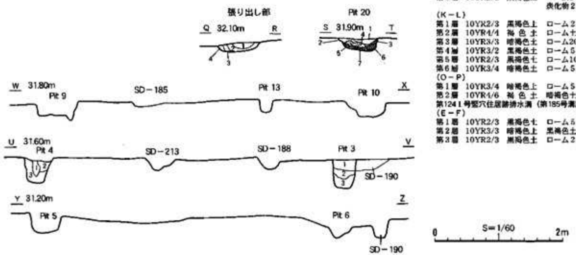
ピット計測表

番号	床面から	確認面から
1	32	−
2	22	−
3	−	(45)
4	−	(42)
5	−	(19)
6	−	(19)
7	10	−
8	13	−
9	(48)	(19)
10	(51)	(21)
11	32	−
12	18	−
13	(48)	(24)
21	6	−
23	(45)	(20)
24	(31)	(11)
25	−	(12)
26	−	(11)
27	−	(18)
28	−	(31)
29	−	(18)
30	−	(8)
31	−	(19)
32	−	(30)
20	−	(27)

番号	床面から	確認面から
14	(11)	3
15	20	6
16	21	6
17	22	6
18	9	5
19	20	10
22	(14)	4

第124号竪穴住居跡堆積土
第1層 10YR3/4 暗褐色土 焼土10%、ローム7%、炭化物7%混入
第2層 5YR4/6 赤褐色土 焼土主体、焼土ブロック12%、炭化物10%、炭化材10%混入
第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム10%、炭化物7%、炭化材7%混入
第4層 10YR2/3 黒褐色土 ローム7%混入
第5層 10YR2/3 黒褐色土 ローム10%、炭化物3%混入
第6層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%、炭化物5%混入
第7層 10YR4/4 褐色土 粘土ブロック主体で崩れやすい
第8層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5%、しまりあり
第9層 10YR4/4 褐色土 粘土ブロック主体、しまりややあり
第10層 10YR3/1 黒褐色土 ローム15%、ロームブロック5%、炭化物3%、堅くしまる
第11層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック20%、黒褐色土7%、堅くしまる
第12層 10YR3/2 黒褐色土 ローム15%、黒褐色土10%混入
第13層 10YR5/6 黄褐色土 ロームブロック主体、堅くしまる
第14層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%、白頭山火山灰5%混入
第15層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%混入
第124Ⅰ号竪穴住居跡ピット3堆積土
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム10%、ロームブロック5%、炭化物5%混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%、炭化物3%混入
第3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%、炭化物3%混入
第124Ⅰ号竪穴住居跡ピット4堆積土
第1層 5YR4/4 にぶい赤褐色土と10YR2/1黒色土との混合土 上位に焼土多い
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%、炭化物1%混入、柱痕
第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム2%、炭化物1%混入
第124Ⅰ号竪穴住居跡ピット20堆積土
第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ローム10%、炭化物7%、焼土7%
第2層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物12%、焼土10%、ローム7%
第3層 7.5YR2/1 黒色土 炭化物主体、焼土20%
第4層 7.5YR4/6 赤褐色土 焼土主体、黒褐色土10%、炭化物2%
第5層 10YR1.7/1 黒色土 炭化物主体、黒褐色土10%、焼土ブロック3%、焼土5%、ローム2%混入
第6層 10YR2/2 黒褐色土と炭化物の混合土 ローム10%混入
第7層 2.5YR4/8 赤褐色土 焼土主体、黒褐色土10%、炭化物5%、ローム2%混入
第124Ⅰ号竪穴住居跡張出し部
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム10%、炭化物1%混入
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ローム10%、粘土1%混入
第3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム10%、炭化物5%混入
第4層 10YR3/2 黒褐色土 ローム15%、焼土1%混入

第124Ⅰ号竪穴住居跡外周溝（第183号溝跡）堆積土
(C−D)
第1層 10YR2/2 黒褐色土 白頭山火山灰15%、炭化物3%混入
第2層 10YR2/2 黒褐色土と10YR2/3黒褐色土との混合土 ローム7%、炭化物5%、白頭山火山灰3%混入
第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム5%混入
(E−F)
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5%、炭化物3%、焼土2%混入
第2層 10YR2/3 黒褐色土 小ロームブロック20%、黒色土5%、炭化物2%混入
第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム10%、炭化物3%、焼土1%混入
第4層 5Y6/3 オリーブ黄色土 白頭山火山灰主体、ローム5%、炭化物2%混入
第5層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5%、炭化物1%、焼土1%混入
第6層 10YR4/6 褐色土 ロームブロック主体、暗褐色土15%、黒色土5%、炭化物2%混入
第7層 10YR4/6 褐色土と10YR3/4暗褐色土の混合土 炭化物1%、焼土1%混入
(G−H)
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム2%、炭化物1%、焼土1%混入
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック1%、ローム1%混入
第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム5%、ロームブロック1%、炭化物3%混入
第4層 10YR2/2 黒褐色土 ローム2%、焼土1%混入
第5層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5%、焼土1%混入
第6層 10YR4/4 褐色土 粘土主体、黒褐色土5%混入
(I−J)
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム7%混入
第2層 10YR3/2 黒褐色土 白頭山火山灰ブロック7%、ローム2%、焼土1%混入
第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム30%、ロームブロック3%、焼土1%、堅くしまる
第4層 10YR4/6 褐色土 ローム土主体、黒褐色土30%、堅くしまる
第5層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%混入
(M−N)
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%、白頭山火山灰ブロック3%混入
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ローム7%混入
第3層 10YR4/6 褐色土 褐色土20%混入
第4層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5%混入
第5層 10YR3/4 暗褐色土 ローム10%、炭化物3%混入
第6層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物7%、ローム5%混入
第7層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物7%、ローム3%混入
第8層 10YR4/4 褐色土 ローム土主体、暗褐色土10%混入
第9層 10YR3/1 黒褐色土 ローム10%、炭化物5%混入
第124Ⅱ号竪穴住居跡外周溝（第184号溝跡）堆積土
(A−B)
第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土と10YR2/2黒褐色土との混合土 ローム7%混入
第2層 10YR4/4 褐色土 暗褐色土20%混入
第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム3%混入
(E−F)
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム7%、炭化物3%、焼土2%、火山灰？3%混入
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%、炭化物3%、焼土2%、火山灰？2%混入
第3層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック10%、黒褐色土・暗褐色土5%、炭化物2%、焼土1%混入
(K−L)
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム2%、炭化物1%混入
第2層 10YR4/4 褐色土 ローム土主体、黒褐色土10%混入
第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム20%、ロームブロック3%混入
第4層 10YR3/2 黒褐色土 ローム5%、炭化物1%混入
第5層 10YR2/3 黒褐色土 ローム10%、黒色土2%混入
第6層 10YR3/4 暗褐色土 ローム5%、黒褐色土2%混入
(O−P)
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム5%、炭化物3%、しまりあまりなし
第2層 10YR4/6 褐色土 暗褐色土40%混入
第124Ⅰ号竪穴住居跡排水溝（第185号溝跡）堆積土
(E−F)
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5%、炭化物1%、焼土1%混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土 黒褐色土10%、ローム7%、炭化物・焼土1%混入
第3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム2%、焼土1%混入



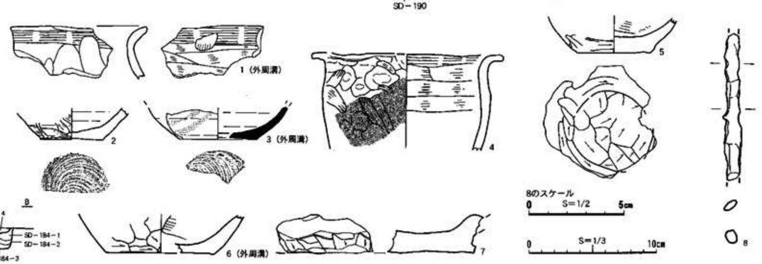


図42 第124Ⅰ号竪穴住居跡

の外周溝に白頭山火山灰が堆積することから、火山灰降下後の10世紀中葉と考えられる。

第124Ⅱ号竪穴住居跡（図41・43）

［確認］第124Ⅰ号竪穴住居跡の床面構築土を除去したところ、本住居跡の周溝及び柱穴を検出した。

［平面形・規模］西壁が5.4m、残存する南壁が3.8m、北壁が3.8mである。東西壁5.4m、南北壁4.5mの東西壁がやや長い方形と推定され、推定床面積は28.4㎡、軸方向はN－4°－Eである。

［堆積土］メインセクションに本住居跡の堆積土はみられない。

［床面］第124Ⅰ号竪穴住居跡の床構築土より下位からは床面は検出されなかった。第124Ⅰ号竪穴住居跡床面と同じレベルだったか、同住居跡床面構築時に壊されたものと思われる。

［カマド］検出されなかったが、外周溝の開口方向である東壁に作られていたと考えられる。

［柱穴］柱穴は16基検出された（ピット33～48）。このうち、ピット33～36が主柱穴と考えられる。ピット33はピット37と、ピット34はピット38とそれぞれ重複しており、それらより新しいことから、部分的な柱の建て替えがおこなわれた可能性がある。ピット33・34・36の南東方向には、確認面からの深さ6～12cmの抜き取り痕が確認される。ピットの形状と深さにはバラツキがあるが、ピット37・38の確認面からの深さは30cmを測り、他のピットよりも深い。ピット37には20×16cmの暗褐色土の柱痕が確認され、堆積土下位から土師器甕片が出土した。ピット39～48は壁際の小柱穴とみられ、東壁の一部、西壁・南壁・北壁の周溝の10～20cm内側から検出され、概ね一辺に4基ずつ、各壁を3等分する位置に配置されている。これらのピットは径20cm台の円形または楕円形を呈し、確認面からの深さは10～27cmである。このうちピット46は東壁の南寄りに位置するが、他の小柱穴より中間距離が狭く、壁際の小柱穴でない可能性もある。以上のことから、周溝上の住居跡四隅と、壁の内側に原則的に各壁4本ずつの小柱穴を持つ柱穴配置が考えられる。東壁にはカマドや出入り口があるために小柱穴を設けなかったか、削平で検出できなかった可能性もある。

［周溝］西壁・南壁・北壁と東壁の一部に断続的に幅8～24cm、確認面からの深さ1～12cmの周溝を検出した。東壁の周溝は南寄りの一部分から検出され、やや南東方向に開いている。調査時には第191号溝跡として調査した溝跡である。北壁の中央付近には周溝の内側に長さ140cm、幅12cm、確認面からの深さ1～3cmの周溝様の溝跡が確認された。確認時には第124Ⅱ号竪穴住居跡周溝と同様、人為的に埋め戻されていたものであるが、用途など詳細は不明である。

［ピット］ピットは6基検出された（ピット23・25・26・29・50・51）。このうちピット50・51は第124Ⅰ号竪穴住居跡床面構築土を除去した後に検出されたもので、ほぼ本住居跡に伴うと考えられるが、ピット23・25・26・29については本住居跡範囲内にあるものの、本住居跡に伴うかどうかについては不明である。

［土坑］南壁近くのやや西寄りから94×60cm、確認面からの深さ12cmの長方形の土坑を検出した（ピット49）。第124Ⅰ号竪穴住居跡からも南壁西寄りからほぼ同規模同形態の土坑が検出されていることから、同様の用途が考えられ、2軒の住居跡内部の配置が良く似ていたと推定される。

［排水溝］本住居跡の排水溝と考えられるのは第190号溝跡である。排水溝は住居跡北壁の周溝より40cm内側を起点とし、北壁の周溝と合流して住居跡北東隅からやや北東方向へ向かった後、緩やかに湾曲して東方向へ向かい、第128号竪穴住居跡外周溝と重複してこれに切られる。この方向はほぼ等

高線に直交するが，最初に北東方向へ向かうことから，住居跡よりも北側へ水を逃がそうとした意図が感じられる。溝底面は緩やかな斜面となっているが，2箇所に20cmの段がみられ，斜面下方へ流れやすくつくられている。そのため確認面からの深さも段を経て深くなるが，第128号竪穴住居跡外周溝と重複する寸前で7cmの段を有して逆に浅くなるため，重複地点付近に末端があったと考えられる。溝の規模は総延長6.8m，幅30～70cm，深さ3～32cm，比高差は86cmである。

[外周溝] 本住居跡の外周溝は第184号溝跡および第216号溝跡である。調査時にはこれらの溝跡を別々に検出したために別の番号を付したが，整理段階で第124Ⅱ号竪穴住居跡に伴う外周溝とした。

外周溝は本住居跡の南～西～北側をコの字状に囲う構造で，住居跡の西側部分は第124Ⅰ号竪穴住居跡構築時に壊されて一部分に痕跡を残すのみとなっている。長さは第184号溝跡部分9m，第216号溝跡部分9mを測り，第124Ⅰ号竪穴住居跡との重複部分を推定すると総延長約25mである。外周溝と住居跡の壁との間隔は，南壁で1.9～2.1m，北壁で1.6～1.8m，西壁で約1mとほぼ一定に保たれており，規則的な形の外周溝といえる。外周溝の溝底面は，確認面のレベルを参考にすると第124Ⅰ号竪穴住居跡外周溝同様住居跡西側の南寄りに分水嶺があったと考えられ，分水嶺以南は第184号溝跡方向へ，分水嶺以北は第216号溝跡方向へむかって傾斜し，第184号溝跡部分の比高差約80cm，第216号溝跡部分の比高差60cmである。両溝跡の東側の末端は，住居跡東壁より約3m東側まで伸びていることから，本住居跡の東側に本住居跡に伴う何らかの施設があった可能性もある。

第184号溝跡部分では底面が階段状に立ち上がり，セクションK－L付近では2条に分れる部分もみられる。土層断面からは，上端幅40～100cm，下端幅14～70cm，確認面からの深さ6～17cmの断面逆台形を呈する溝から，上端幅25～110cm，下端幅10～30cm，確認面からの深さ14～20cmの断面V字状を呈する溝へ掘り直されていると考えられる。第185号溝跡との重複付近では，126×120cm，確認面からの深さ22cmの不整円形の土坑が連結している。セクションE－Fの観察から，土坑は黒褐色土からなる自然堆積で埋没したことがわかる。

第216号溝跡部分では幅25～42cm，確認面からの深さ8～27cmの細い溝状を呈する。断面形はU字状を基調とする。西端付近で最も深く，斜面を下るにつれて溝自体は浅くなってゆく。AW－39グリッド付近以東で溝幅が広がる。この部分の底面は階段状に立ち上がり，セクションO－Pの土層観察から幅40～80cm，深さ11cmの浅い溝を褐色土で埋め，断面U字状の溝へ掘り直していると考えられる。掘り直し前の溝は第175号土坑として調査した160×160cm，深さ2～5cmの浅い不整方形の土坑と連結し，土坑の南西コーナーから排水溝である第190号溝跡と合流する。第184号溝跡は第216号溝跡と比べて溝幅が広く，より深く掘り込まれているが，地形が南西から北東方向へ傾斜しているために，南西方向からより多く流れてくる雨水を受け止めて逃がすための工夫であると思われる。

[出土遺物] 外周溝堆積土から，土師器甕片4点，坏片3点，須恵器大甕片1点，壺片2点が出土した。図43－1は内黒の坏で外面には焼き斑があり，にぶい黄褐色の部分と黒褐色を呈する部分とがみられる。図43－3は五所川原窯群産の須恵器長頸壺で，頸部にはヘラ記号が施されている。

[小結] 本住居跡は住居跡周溝上の四隅に主柱穴と，周溝内側の壁沿いに各壁4基の小柱穴を持つタイプの住居跡である。住居跡の主柱穴には部分的な建て替えがみられる。付属施設としては排水溝と外周溝がある。外周溝は住居跡をコの字状に囲み，幅・形態共に規則的な溝で，南側には部分的に掘り返しの痕跡がみられる。また，北側末端は，土坑状に膨らんで排水溝に連結させる構造から，末端が

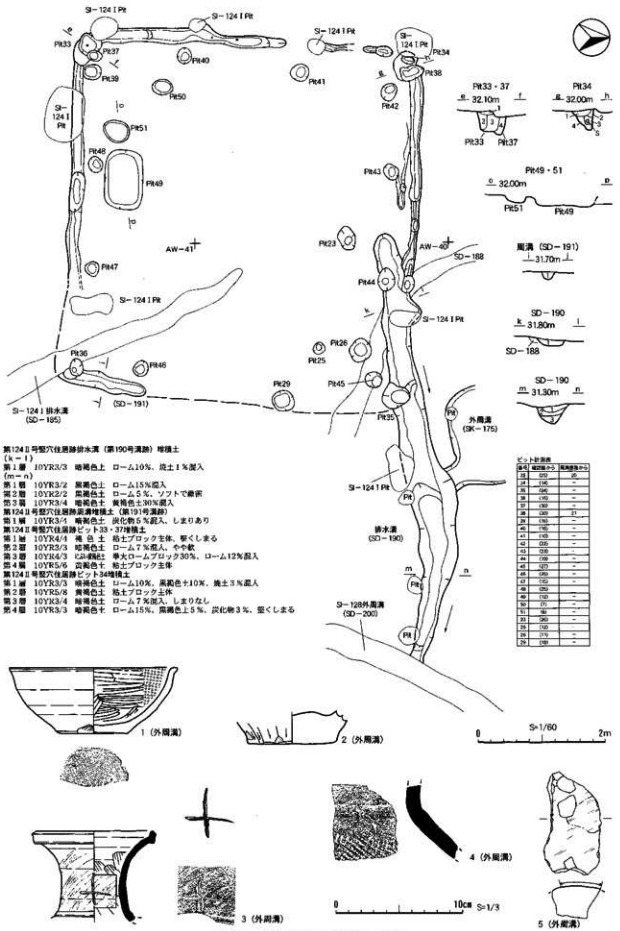


図43　第124Ⅱ号竪穴住居跡

膨らまずそのまま斜面下方に延長する構造へとつくり替えられている。本住居跡は第124Ⅰ号竪穴住居跡の拡張前の住居跡であることから、本住居跡の構築時期は9世紀末～10世紀初頃頃とみられる。

（水谷）

第125号竪穴住居跡(図44・45)

位置・確認　AR・AS－37・38グリッドに位置し、標高約33.5mである。第Ⅷ層上面で暗褐色土のプランを確認した。床構築土を除去したところ、周溝が検出され、拡張がおこなわれたことが判明した。新しい住居跡を第125Ⅰ号住居跡、拡張前の住居跡を第125Ⅱ号住居跡とし、それぞれについて詳細を述べる。

重複　第126号竪穴住居跡及び外周溝と重複し、本住居跡が古い。

第125Ⅰ号竪穴住居跡

［規模・平面形］いずれの壁も重複により一部残存しないが、東壁5.2m、西壁5.5m、南壁4.5m、北壁4.5mで、平面形は南北がやや長い長方形を呈する。推定床面積は21.2㎡である。住居跡の軸方向はN－5°－Eである。

［堆積土］6層に分層された。ローム・ロームブロック・炭化物が混入する暗褐色土を主体とする。

［床面］ほぼ平坦であるが、西から東に約10cm傾斜している。床面はロームブロックが混入する黒褐色土・暗褐色土で構築されている。掘り方底面は起伏が激しい。

［カマド］検出されなかった。第126号竪穴住居跡と重複する東壁南側にあったと推定される。

［柱穴］検出されなかった。ピット3・7・9は配置的に柱穴の可能性があるが、深さや平面形などから断言はできない。

［周溝］幅10～52cm、深さ7～28cmの周溝が西壁・南壁・東壁を巡る。南壁では西壁・北壁に比べて幅が狭く深い。中央部に幅10～34cm・深さ1～5cmのほぼ直線状の溝が検出された。

［ピット］9基検出された(ピット1～9)。ピット5・6のような柱穴状のものと、ピット3・7のように浅いものがある。

［土坑］2基検出された。ピット10は西壁ほぼ中央に位置する。158×95cmの不整楕円形を呈し、深さ25cmである。ピット11は南西隅に位置する。122×83cmの不整楕円形を呈し、深さ25cmである。

第125Ⅱ号竪穴住居跡

［規模・平面形］東壁4.3m、西壁4.2m、南壁3.5m、北壁3.9mで、平面形は南北に長いやや歪んだ長方形を呈する。第125Ⅰ号住居跡は本住居跡を北西方向に拡張したものと考えられる。推定床面積は14.0㎡である。住居跡の軸方向はN－1°－Eである。

［堆積土］ピットの堆積土のみ確認された。

［床面］削平により残存しない。

［カマド］検出されなかった。第125Ⅰ号住居跡同様、第126号住居跡と重複する東壁南側にあったと推定される。

［柱穴］2基検出された(ピット17・18)。このほかに、第125Ⅰ号住居跡床面で検出されたピット4が、本住居跡に伴う柱穴と考えられる。住居隅に位置する柱穴で、径24～29cmの円形または楕円形を呈し、検出面からの深さは12～27cmである。

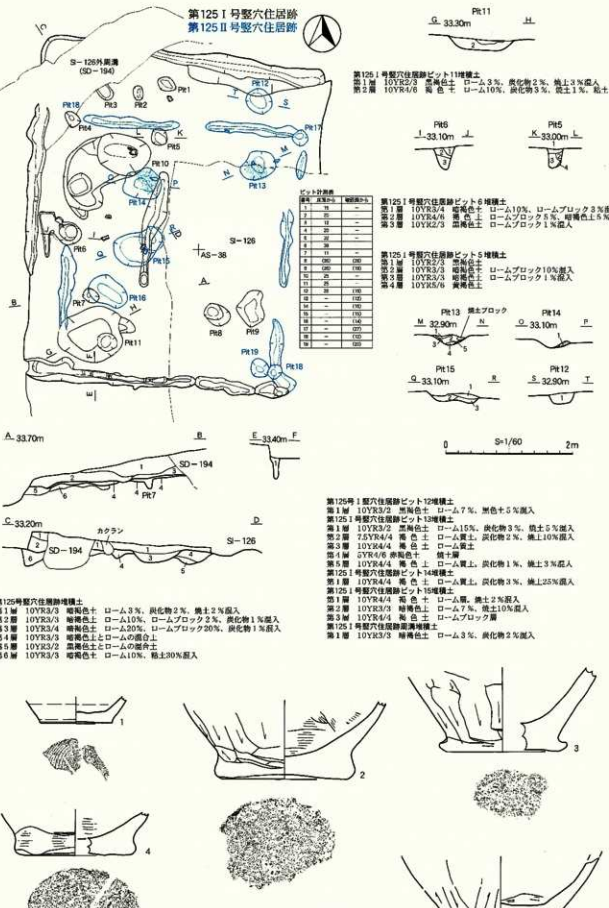


図44　第125号竪穴住居跡（1）

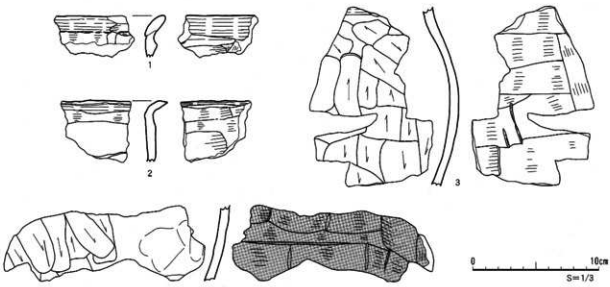


図45　第125号竪穴住居跡（2）

[周溝] 幅10～23cm、深さ１～21cmの周溝が断片的に巡る。

[ピット] ５基検出された(ピット13～16・19)。ピット13は底面に、ピット14は堆積土上層に焼土が堆積していた。ピット15は検出面に硬化面がみとめられた。ピット12は第125Ｉ号住居跡の床下で検出されたが、第125Ｉ号住居跡に伴うと考えられる。

出土遺物　住居跡床面から土師器甕１点、ピット堆積土から土師器甕９点、堆積土から土師器坏３点・甕18点、須恵器大甕３点、床構築土から土師器坏１点・甕11点、須恵器壷２点・大甕１点が出土している。復元できた甕の底部は、図44－５は胴部から底部にかけてすぼまる器形であるが、他は底部が張り出す器形である。図44－４は底辺部に横方向のナデがみられる。図45－４の土師器甕内面は黒色処理が施される。

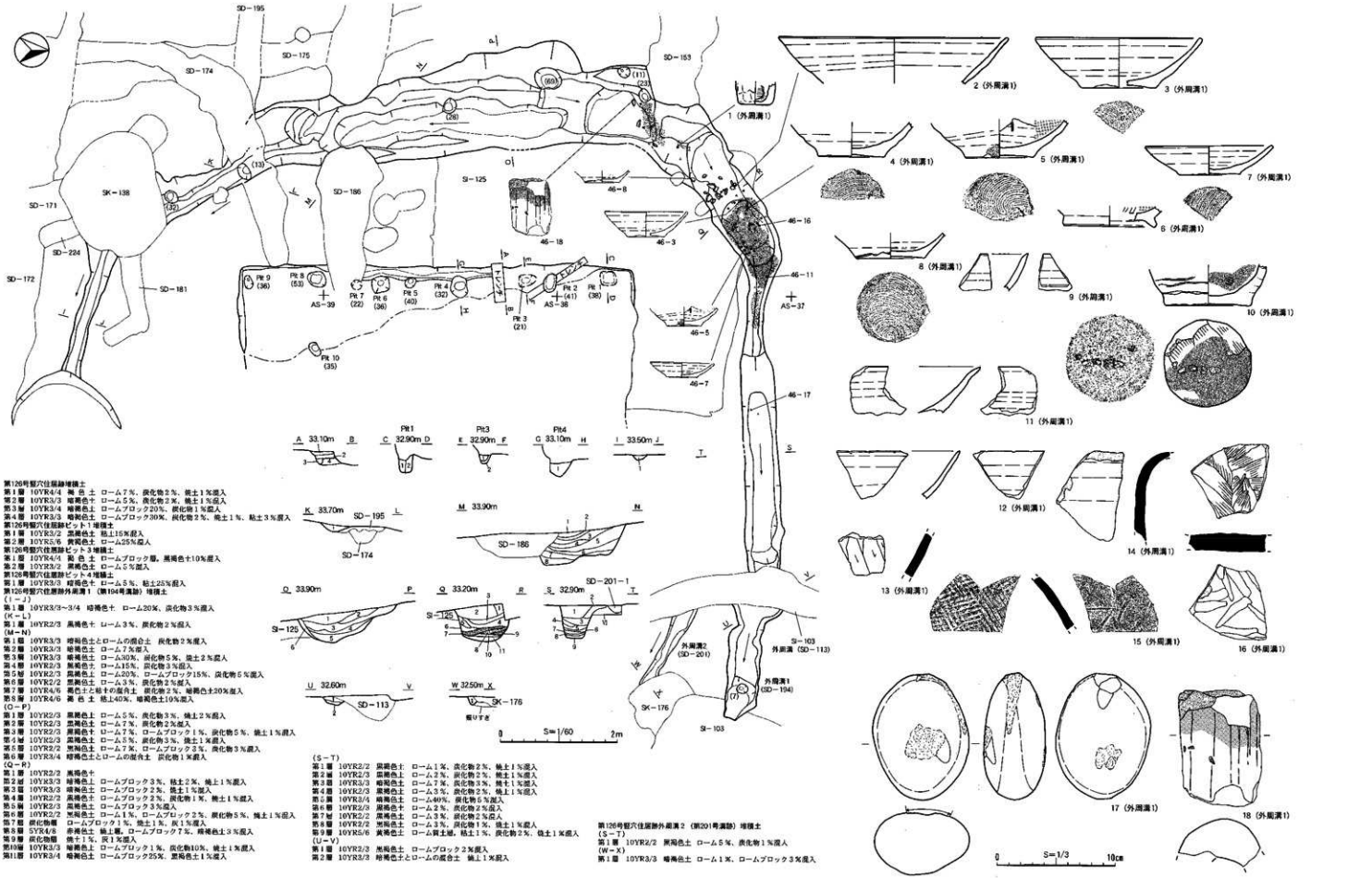
小結　本住居跡では北西方向への拡張がみられ、住居構造も周溝と四隅に柱穴をもつ構造から、周溝のみで柱穴をもたない構造へと変化している。拡張後の第125Ｉ号住居跡は４本の主柱穴をもつ可能性もあるが、前段階の住居構造とは異なっている。本住居跡の時期は、重複する第126号住居跡外周溝やこれと重複する溝跡の時期から、白頭山火山灰降下前後の時期が想定される。　（田中）

第126号竪穴住居跡（図46）

[位置・確認] AR・AS－37～39グリッドに位置し、標高約33mである。第Ⅷ層上面でロームが混入する褐色土の方形のプランとして確認された。

[重複] 第125号竪穴住居跡・第186号溝跡と重複し、住居跡より新しく、溝跡より古い。外周溝１が、第103号竪穴住居跡及びその外周溝、第138号土坑、第153・174・186・195号溝跡と重複し、第153・174・195号溝跡より新しく、他の遺構よりは古い。外周溝２が第103号竪穴住居跡外周溝、第176号土坑と重複し、本外周溝が古い。

[規模・平面形] 削平により西側の一部が残存するのみである。西壁6.8mで、平面形は方形を呈すると考えられる。検出面からの壁高は西壁１～18cm、南壁０～10cm、北壁０～１cmである。壁はや



第126号竪穴住居跡堆積土
第1層 10YR4/4 褐色土 ローム7%、炭化物2%、焼土1%混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%、炭化物2%、焼土1%混入
第3層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック20%、炭化物1%混入
第4層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック30%、炭化物2%、焼土1%、粘土3%混入
第126号竪穴住居跡ピット1堆積土
第1層 10YR3/2 黒褐色土 粘土15%混入
第2層 10YR5/6 黄褐色土 ローム25%混入
第126号竪穴住居跡ピット3堆積土
第1層 10YR4/4 褐色土 ロームブロック層、黒褐色土10%混入
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ローム5%混入
第126号竪穴住居跡ピット4堆積土
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%、粘土25%混入
第126号竪穴住居跡外周溝1（第194号溝跡）堆積土
(I－J)
第1層 10YR3/3～3/4 暗褐色土 ローム20%、炭化物3%混入
(K－L)
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム3%、炭化物2%混入
(M－N)
第1層 10YR3/3 暗褐色土とロームの混合土 炭化物2%混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム7%混入
第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム30%、炭化物5%、焼土2%混入
第4層 10YR2/3 黒褐色土 ローム15%、炭化物3%混入
第5層 10YR2/3 黒褐色土 ローム20%、ロームブロック15%、炭化物5%混入
第6層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3%、炭化物2%混入
第7層 10YR4/6 褐色土と粘土の混合土 炭化物2%、暗褐色土20%混入
第8層 10YR4/6 褐色土 粘土40%、暗褐色土10%混入
(O－P)
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5%、炭化物3%、焼土2%混入
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ローム7%、炭化物2%混入
第3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム7%、ロームブロック1%、炭化物5%、焼土1%混入
第4層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5%、炭化物3%、焼土1%混入
第5層 10YR2/2 黒褐色土 ローム7%、ロームブロック3%、炭化物3%混入
第6層 10YR3/4 暗褐色土とロームの混合土 炭化物1%混入
(Q－R)
第1層 10YR2/2 黒褐色土
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック3%、粘土2%、焼土1%混入
第3層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック2%、焼土1%混入
第4層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック2%、炭化物1%、焼土1%混入
第5層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック3%混入
第6層 10YR2/2 黒褐色土 ローム1%、ロームブロック2%、炭化物5%、焼土1%混入
第7層 炭化物層 ロームブロック1%、焼土1%、炭1%混入
第8層 5YR4/8 赤褐色土 焼土層、ロームブロック7%、暗褐色土3%混入
第9層 炭化物層 焼土1%、炭1%混入
第10層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック1%、炭化物10%、焼土1%混入
第11層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック25%、黒褐色土1%混入
(S－T)
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム1%、炭化物2%、焼土1%混入
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ローム2%、炭化物2%、焼土1%混入
第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム7%、炭化物3%、焼土1%混入
第4層 10YR2/3 黒褐色土 ローム3%、炭化物2%、焼土1%混入
第5層 10YR3/4 暗褐色土 ローム40%、炭化物5%混入
第6層 10YR2/3 黒褐色土 ローム2%、炭化物2%混入
第7層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3%、炭化物2%混入
第8層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3%、炭化物1%、焼土1%混入
第9層 10YR5/6 黄褐色土 ローム質土層、粘土1%、炭化物2%、焼土1%混入
(U－V)
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック2%混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土とロームの混合土 焼土1%混入
第126号竪穴住居跡外周溝2（第201号溝跡）堆積土
(S－T)
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%、炭化物1%混入
(W－X)
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム1%、ロームブロック3%混入

図46 第126号竪穴住居跡

や開きながら立ち上がる。住居跡の軸方向はN－0°－Eである。

［堆積土］４層に分層された。ロームブロックや炭化物が混入する暗褐色土を主体とする。

［床面］西壁際の一部のみ検出された。ほぼ平坦であるが、南西隅が約10cm高い。床面はロームブロックが混入する暗褐色土で構築されている。

［カマド］検出されなかった。

［柱穴］９基検出され(ピット１～９)、いずれも西壁直下に位置する。ピット２・４・６・８・９は床面、ピット１・３・７は床下で検出されたが、配置からは同時に機能した柱穴と考えられる。ピット１・３・４・６・８・９は約80～100cmの間隔で並ぶ。長軸24～30cmの楕円形あるいは隅丸方形を呈し、深さは21～53cmである。ピット５・７はこれらの間に位置し、径約20cmで、隣のピットとの距離は15～25cmと近く、補助的な柱穴と考えられる。ピット２も隣のピット３に10cmと近く、補助的な柱穴の可能性もあるが、ピット５・７に比べると規模が大きく、ピット３のつくり替えと考えられる。

［周溝］幅15～24cm、深さ１～11cmの周溝が西壁直下に検出された。

［ピット］１基検出された(ピット10)。

［外周溝］第194号溝跡と第201号溝跡が外周溝と考えられる。前者を外周溝１、後者を外周溝２として、以下にそれぞれの詳細を述べる。外周溝１は住居の南側から西側・北側にかけて構築され、平面形はコの字状を呈する。住居跡から1.5～2.5m離れている。幅15～177cm、深さ５～76cmである。幅は両端では25～80cmであるが、中央部では1.1～1.8mと広くなり、南端は土坑状に広がる。第174号溝跡を挟んで北側では極端に幅が広がるが、外周溝の西壁には段差がみとめられ、何度か作り直されたと考えられる。深さは両端では10～20cm前後であるのに対し、中央部では60～70cmと極端に深い。堆積土はローム・炭化物の混入する黒褐色土を主体とし、南側・西側では自然堆積の様相を呈する。北西隅では炭化物と焼土が検出され、廃棄と考えられる。この中には土師器・須恵器などが混入している。北側部分も深さは40～50cmで、一段深く掘り込まれている。セクションS－Tの土層断面を観察すると、黒褐色土が３～５cmの厚さでほぼ水平に堆積し、第３層以下の堆積土は全体に締まりが強い。外周溝が埋没する度に、埋没土のみを掘りあげて、底面を踏み固める作業が何度か繰り返された可能性と、最初に深く掘り込んでから、埋め戻しながら底面を踏み固めた可能性が考えられる。第３層上面が平坦で、第１・２層ともしまりが弱い堆積土であることから、最終段階ではこの面が底面だったと推定される。外周溝２は住居北側で検出された。第103号住居跡外周溝東側ではプランを確認できたが、西側では土層断面で確認したのみである。外周溝１の内側を巡り、S－Tセクションでは外周溝１のすぐ内側に位置するが、先端部では1.2m内側に入る。検出できた部分の幅は16～32cm、深さは８～24cmで、断面形はU字状を呈する。２条の外周溝の新旧は土層断面の観察では明らかではないが、外周溝１が外側に構築されていることから、新しい可能性がある。

［掘立柱建物跡］第110号掘立柱建物跡が本住居跡に伴う可能性が考えられる。本住居跡のピット４・８と掘立柱建物跡の桁方向が同一線上に並ぶ(図52)。住居跡と掘立柱建物跡の規模が異なることと、住居跡の東壁が削平され、不明な部分が多いため、ここでは可能性を指摘するに留める。

［出土遺物］堆積土から土師器坏１点・甕３点、須恵器大甕１点が出土している。外周溝堆積土から土師器坏25点・甕59点・台付坏１点・製塩土器１点・ミニチュア土器１点、須恵器坏３点・壷６点・大

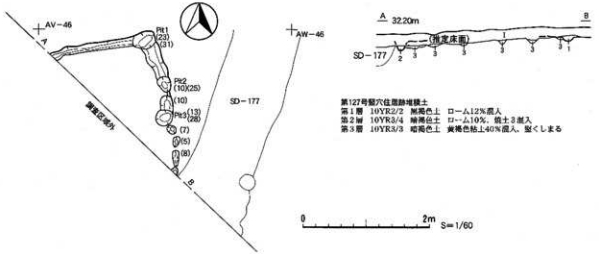


図47　第127号竪穴住居跡

甕11点、礫石器1点、羽口1点、鉄滓1点が出土しているが、このうち、北西隅の廃棄された炭化物層から土師器坏20点・甕24点・ミニチュア土器1点、須恵器坏2点、大甕2点が出土している。図46－1～5・7・8・11・12が外周溝1第7～9層から出土したものであるが、このうち2～5・7は他の土師器に比べ、胎土が緻密で、焼成が良好で硬質である。いずれも底部の回転糸切の痕跡は、回転が緩いため「の」の字状で、底辺部には粘土が乾燥する前の水様状のうちに手を触れた痕跡がみられる。また、ロクロによる器壁の凹凸が顕著である。以上のような共通する特徴がみられ、同一工人によるものと考えられる。

[小結] 本住居跡は壁に柱穴がほぼ等間隔で並ぶ構造で、平面形コの字状を呈する外周溝が伴う。大部分が削平され、不明な部分が多いが、掘立柱建物跡が伴う可能性も考えられる。本住居跡の時期は、重複する第153号溝跡が白頭山火山灰降下以前の年代が考えられることから、白頭山火山灰降下前後または降下後と考えられる。（田中）

第127号竪穴住居跡（図47）

[位置・確認] AV－46グリッドに位置し、標高は32mである。第Ⅶ層上面で確認された。調査区際に位置し、住居跡の北東隅以外は調査区外にあり、全貌を調査することはできなかった。本住居跡付近は整地による削平をうけており、表土直下は既に第Ⅶ層上面で、床面の一部と周溝を確認できたのみである。

[重複] 調査区際で第177号溝跡と接するが、削平のため新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 残存する東壁2.3m、北壁1.7mで、壁高は東壁で最大3cm程度の壁が確認された。平面形は不明である。残存する床面積は2.2㎡で、軸方向はN－10°－Wである。

[堆積土] 3層に分層された。第1・2層は周溝堆積土で、第3層は床面の凹凸を埋めた埋土である。

[床面] 第Ⅶ層を床面とし、住居跡構築時に生じた凹凸を第3層の暗褐色土と粘土ブロックの混合土で埋めて平坦に整えたとみられる。床面が残存するのは調査区際西側の一部のみである。

[カマド] 検出されなかった。

［柱穴］柱穴と思われるピットは１基のみである。ピット１は住居跡北東隅の周溝上にあり、38×28cmの楕円形で、確認面からの深さ23cmを測る。主柱穴と考えられる。
［周溝］幅10～24cm、深さ５～11cmの周溝が断続的に検出された。東側の調査区際は小ピット状に見えるが、削平されて周溝底面の深い部分がピット状に残存するためと思われる。
［ピット］ピットは２基検出された。ピット２は25×20cmの楕円形、ピット３は28×26cmの円形を呈し、２基とも東壁周溝上に位置し、柱穴の可能性があるが、確認面からの深さが浅いことと柱穴配置が不明であるため断定はできない。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］本住居跡の年代は、平安時代と考えられる。（水谷）

第128号竪穴住居跡（図48・49）
［位置・確認］AX～BB－39～43グリッドに位置し、標高は30.5mである。耕作土直下の第Ⅷ層上面で確認された。調査区際に位置するため、全貌を調査することはできなかった。また、東側にいくつかの遺構が重複するため、東壁を検出できなかった。堆積土は床面近くまで、東側では掘り方の一部まで削平されている。
［重複］第124Ⅰ・Ⅱ号竪穴住居跡外周溝・排水溝、第207・211・212・217・227・268～270・273号溝跡、第183・217号土坑、第110号井戸跡と重複し、第211・212・217・273号溝跡、第217号土坑より古く、それ以外より新しい。なお、本住居跡と重複する第217・268～270・273号溝跡、第217号土坑は平成14年度に調査をおこなった遺構とそれに重複する遺構のため、重複を図示するにとどめる。
［平面形・規模］竪穴住居跡の南～西～(北)を外周溝が囲む構造の建物である。壁長は西壁8m、残存する南壁6.5m、北壁2.6m、壁高は西壁２～６cm、南壁２～４cm、北壁１～10cmである。東壁が検出できなかったため平面形は不明であるが、ピット９・10がそれぞれピット５・６に対応する位置にあること、東西セクションの第18層（掘り方の埋土）が撹乱を受ける部分で立ち上がることから、ピット９・10を結ぶ線が東壁である可能性がある。その場合、南北壁の規模は6.5m、平面形は東西壁が長い長方形となり、推定される床面積は約44㎡、軸方向はN－13°－Eである。
［堆積土］19層に分層された。第14層までは床面上もしくは周溝・ピットの堆積土で、黒褐色土を主体としてローム・焼土・炭化物を少量ずつ混入している。第15～19層は掘り方の埋土で、ロームを主体とする土層と黒褐色土を主体とする土層がみられる。東側の傾斜の低い方に黒褐色土を主体とする層が厚く堆積することから、本来はこれらの層上に、床構築土としてロームを主体とする層を貼り付けていたと推定される。第７層及び第15層が井戸跡堆積土に落ち込んでいるのが観察されるが、第110号井戸跡の廃絶後に床構築土として第15層を貼り、住居廃絶後に堆積した第７層が、その後の土圧で井戸跡の堆積土が沈下するのに伴って落ち込んだものと考えられる。
［床面］重複と削平により、西側半分のみ検出された。床面は緩やかに西から東に傾斜し、20cmほどの高低差がある。西壁付近では第Ⅷ層を床面とし、それ以外の場所ではロームを主体とする床構築土が貼られた部分と、堅く踏みしめられた黒褐色土を床面とする部分がある。
［カマド］検出されなかったが、外周溝の開口方向である東壁に構築されていたと考えられる。

［柱穴］本住居跡の柱穴と考えられるピットは16基である（ピット1～16）。住居跡コーナーのピット1・6・10、西壁沿いのピット2～5、東壁沿いのピット9、南壁沿いのピット11、北壁沿いのピット7・8・12の12基は周溝上に位置する。このうちピット1～6は、西壁をほぼ5等分するように配置され、その柱間距離は150～170cmを測る。東・南・北側の壁沿いで同様の柱間距離をもつものは、北壁のピット7・8と東壁のピット9・10である。ピット12はピット7・8の中間に、ピット11はピット14・16の延長線上に位置する。住居跡コーナーのピット1・6は、周溝の幅よりも狭い一辺20～24cmの方形を呈し、掘り方は内傾して外側はややオーバーハングしている。ピット2～5・7～9・12の柱穴の掘り方は30～40×20～30cmの長方形を呈し、住居跡内側に開きながら立ち上がる。ピット3・5・6・7からは、内傾せず直立する黒褐色土の柱痕を確認した。ピット4・9は人為的に埋め戻されており、ピット9の底面からは20×14cm、厚さ10cmの分割礫が出土した。一方住居跡内のピットで、配置から住居跡に伴う可能性があると推定されるのはピット13～16の4基のみであった。4基の形態・深さにはバラツキがみられる。東壁・西壁から約2m、南壁から約1m、北壁から約1.5m内側に位置し、柱間距離はピット13・15間、ピット14・16間で4.5m、ピット13・14間、ピット15・16間で1.9～2mを測り、主柱穴の可能性がある。しかし、ピット13以外は床構築土の除去によって検出されたものであること、ピット13と15、ピット14と16を結ぶ軸方向は本住居跡の軸方向とわずかにずれていることから、これらの柱穴が本住居跡に伴わない可能性もある。

［周溝］西壁・南壁と北壁の一部に幅18～46cm、深さ9～28cmの周溝が検出された。西壁・南壁では、周溝底面が階段状に立ち上がる箇所がみられる。また、長さ26～40cm、幅6～15cm、周溝底面からの深さ5～24cmの長楕円形のピット状の落ち込みがみられる。

［ピット］ピットは20基検出された。（ピット17～36）。このうち床面上で検出されたのはピット17～20の4基のみで、それ以外は床構築土下から検出したものである。ピット18～22・25・29～31は形態から柱穴の可能性があるが、規則性がみられず、本住居跡に伴う柱穴と認定することができなかった。ピット30・31は土層観察から幅10cmの柱痕が検出された。柱痕には暗褐色土が堆積し、同様の特徴をもつピット14と同時期の柱穴の可能性がある。ピット22はピット13の外側に位置し、形態・規模が類似することから関係が示唆される。ピット34はピット9・10の延長線上に位置し、東壁沿いの柱穴となる可能性もある。ピット35・36は住居跡の外側から検出されたが、本住居跡に附属する掘立柱建物跡や、本住居跡の床構築土下から検出されたピットに対応する可能性がある。

［外周溝］調査時には第200号溝跡として調査をおこなったが、平成14年度に調査をおこなった第272号溝跡と連結し、同一の溝跡であることが判明した。総延長26.6mの溝跡が住居跡の南側～西側～北側の一部を囲み、北側は更に調査区外へ伸びる。西側中央付近では、長さ1.7mにわたって溝が途切れて3～5cmの段状を呈する部分がある。この部分がもっとも標高が高く分水嶺となっており、溝に落ちた水はそれぞれ南北方向へ向かって流れるようにつくられている。

分水嶺から北側の溝は長さ7.3m、幅36cm、深さ19～41cmで、調査区際付近で幅92～120cmに広がる。幅の狭い部分の断面形はU字状を呈する。幅広の部分の底面は段状に立ち上がり、2条の溝跡が重複しているように見える。e－fセクションでは、幅が狭いまま北壁に沿って屈曲する溝を埋めて、土坑状に幅が広がり、北西方向へ向かう溝へつくり替えていると考えられ、隣接する第124号竪穴住居跡の外周溝同様、住居跡をコの字に囲む形から住居跡内へ流れ込まないよう北東方向へ水を逃がす

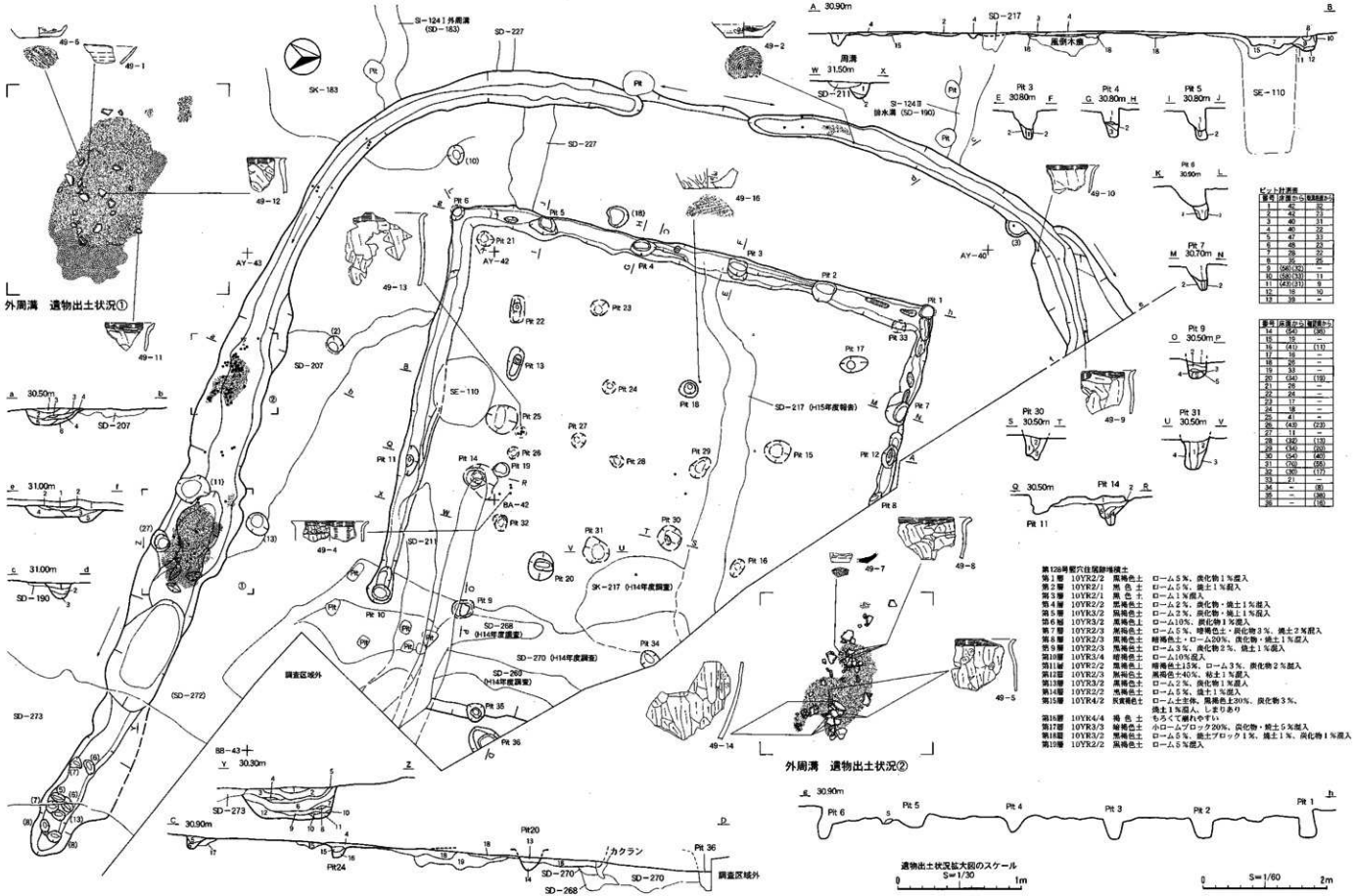


図48　第128号竪穴住居跡（1）

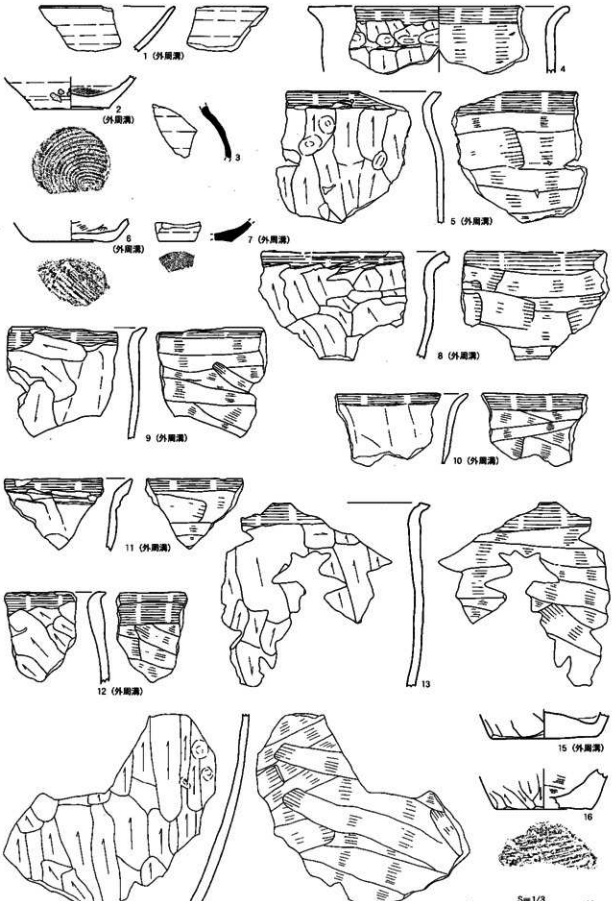


図49　第128号竪穴住居跡（2）

第128号竪穴住居跡ピット3堆積土
第1層 10YR4/6 褐 色 土 黒褐色土20%、暴大ロームブロック20%混入
第2層 10YR4/4 褐 色 土 ロームブロック主体
第128号竪穴住居跡ピット4堆積土
第1層 10YR4/6 褐 色 土 暴大ロームブロック主体
第2層 10YR4/6 褐 色 土 暗褐色土40%混入、しまりなし
第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム15%混入、しまりなし
第128号竪穴住居跡ピット5堆積土
第1層 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土30%混入、しまりなし
第2層 10YR5/6 黄褐色土 ローム土主体、堅くしまる
第128号竪穴住居跡ピット6堆積土
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム7%混入、しまりなし
第2層 10YR5/6 黄褐色土 ロームブロック主体、堅くしまる
第128号竪穴住居跡ピット7堆積土
第1層 10YR2/3 黒褐色土 小ロームブロック20%混入
第2層 10YR5/6 黄褐色土 暴大ロームブロック主体、暗褐色土30%混入、堅くしまる
第128号竪穴住居跡ピット9堆積土
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム20%、炭化物1%混入
第2層 10YR4/4 褐 色 土 暗褐色土30%、炭化物・焼土1%混入
第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%、炭化物・焼土1%混入
第4層 10YR4/4 褐 色 土
第5層 7.5YR5/4 にぶ褐土
第128号竪穴住居跡ピット14堆積土
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム20%、炭化物2%混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム30%、炭化物2%混入、もろくて崩れやすい
第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム40%混入、もろくて崩れやすい
第4層 10YR4/4 褐 色 土 暗褐色土10%混入
第5層 10YR4/4 褐 色 土 暗褐色土20%混入
第128号竪穴住居跡ピット30堆積土
第1層 10YR3/3 暗褐色土 黄色土12%、ローム5%混入、しまりややなし
第2層 10YR4/4 褐 色 土 ローム土主体、暗褐色土7%混入
第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム土主体、崩れやすい
第128号竪穴住居跡ピット31堆積土
第1層 10YR3/2 暗褐色土 ローム7%混入、しまりなし
第2層 10YR3/4 暗褐色土と小ロームブロックとの混合土 堅くしまる
第3層 10YR4/3 にぶ褐色土 ローム土主体、しまりなし
第4層 10YR4/3 にぶ褐色土 ローム土主体、上位はしまりあり

第129号竪穴住居跡外周溝（第200号溝跡）堆積土
（Y－Z）
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%、炭化物2%、焼土1%混入
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ローム7%、炭化物・焼土1%混入
第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム3%、炭化物・焼土1%混入
第4層 10YR2/3 黒褐色土 ローム3%、炭化物1%混入
第5層 10YR3/1 黒褐色土 ローム5%、炭化物・焼土1%混入
第6層 10YR2/3 黒褐色土と10YRZ/1 黒色土との混合土、ローム3%、炭化物2%、焼土1%混入、やや粘着あり
第7層 10YR2/1 黒 色 土 ローム5%、炭化物1%混入、しまりなし
第8層 10YR3/1 黒褐色土 ローム25%、焼土1%混入、粘性ややあり
第9層 10YR2/1 黒 色 土 ローム3%、炭化物1%混入、しまり・粘性あり
第10層 10YR5/6 黄褐色土 黒褐色土15%、炭化物1%混入、粘性あり
第11層 10YR2/1 黒 色 土 ローム5%、やや軟、粘性あり
第12層 10YR3/2 黒褐色土 ローム・炭化物3%、焼土1%混入。しまり・粘性あり
（a－b）
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム7%・焼土・炭化物5%混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%、焼土・炭化物3%混入
第3層 7.5YR2/3 極暗褐色土 焼土12%混入
第4層 10YR2/2 黒褐色土 焼土7%、炭化物5%混入
第5層 10YR2/1 黒 色 土 小ロームブロック10%、土器片混入
第6層 10YR3/1 黒褐色土 ローム3%混入
（c－d）
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%、炭化物・焼土7%混入
第2層 10YR5/6 黄褐色土 ロームブロック主体土、にぶい黄褐色土30%混入
第3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5%混入
（e－f）
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%混入
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ローム10%混入
第3層 10YR2/1 黒 色 土 ローム7%混入
第4層 10YR2/2 黒褐色土 ローム7%混入
第5層 10YR3/4 暗褐色土 ローム7%、焼土5%混入

形へつくり替えられたと考えられる。

分水嶺から南側の溝は長さ17.6m、幅38～118cm、深さ13～44cmで、東側に向かうにつれて幅広くなり、2ヵ所に遺物や焼土が一括して廃棄されている。東端近くには、190×90cm、確認面からの深さ51cm、溝底面からの深さ16cmの楕円形の土坑が連結している。東端は浅く、先細りしている。外周溝と住居跡との距離は西壁で1.7～2.3m、南壁で2～2.3mに保たれ、東端は東壁より5.3m先まで伸びている。このことから、住居跡の東側の調査区域外に掘立柱建物跡などの何らかの施設があった可能性がある。外周溝の堆積土は基本的に黒褐色土と黒色土を主体とする自然堆積で、住居跡西側には黄褐色ロームで埋められた個所がみられる。

[出土遺物] 床面上から土師器甕片5点、堆積土中から土師器甕片20点・坏片2点、須恵器大甕片1点・坏片1点、羽口1点、楕形鉄滓1点、床構築土中から土師器甕片4点・坏片1点、ピット9から分割磨1点、外周溝からは土師器甕片98点・坏片3点、須恵器壷片3点・坏片1点、自然礫10点が出土した。外周溝出土遺物のほとんどは2ヵ所の遺物廃棄地点からまとまって出土した。

図49－13の土師器甕は口縁部が短く外反し、口唇部端面はヘラ状工具で潰して平坦にしたとみられ、内側に小さな段が形成されている。図49－5と14は同一個体とみられ、砂粒を多く含む明赤褐色の土師器甕である。胴部には縦方向にケズリが施され、口縁部は短く外反し、口縁部端は幅4mm程度の棒状工具を当ててロクロで調整されたとみえ、沈線状の稜が形成されている。同様の特徴をもつものは他に図49－8・9のほか、掲載外の土器にも数点みられ、同一の製作者のものの可能性がある。

[小結] 重複関係、柱穴配置から、本住居跡が廃棄されたのは10世紀後葉以降と考えられる。（水谷）

第２節　掘立柱建物跡

検出された掘立柱建物跡は15棟である。このうち第115号掘立柱建物跡は第124Ｉ号竪穴住居跡に付属するため、第１節　竪穴住居跡の項で記述している。掘立柱建物跡の分布状況はグリッドのATライン以東で増加傾向にあり、大半は平安時代に属すると考えられるが、柱穴の規模や堆積土などから中世に属する可能性があるものがある。本文では個別の記述を避け、特記すべき事柄についてのみ記述することとし、個々の遺構の位置・規模等は計測表にまとめた。軸方向については、桁行方向の軸について、北から東西への角度で示した。重複の「→」は「旧→新」を表している。

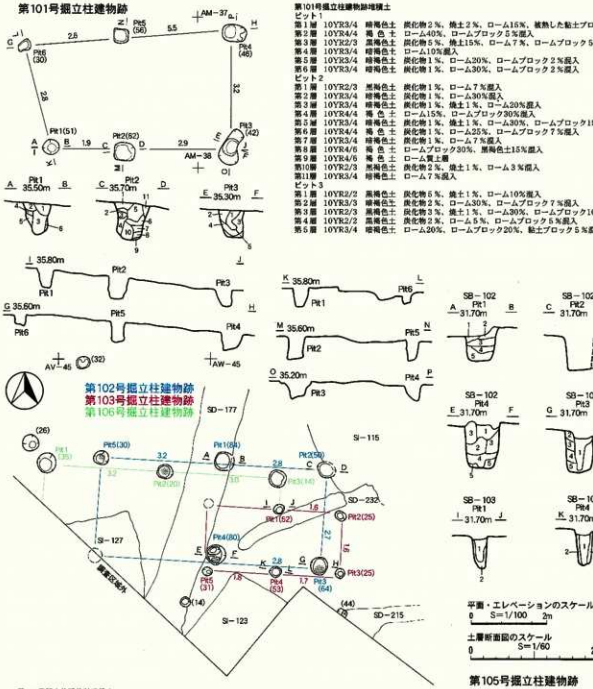
第102号掘立柱建物跡（図50）　確認面からの深さはピット２・３・５では30～64cm、ピット１・４では84・80cmを測り、中央の２基がプランも大きく、深いしっかりとした柱穴である。南西隅の柱穴が１基検出できなかったが、調査区外にあったか、確認不足の可能性がある。ピット１・３・４で堆積土の観察をおこなった。ピット３・４は柱が抜き取られているが、ピット４では柱痕・掘り方の痕跡が残存している。ピット３は黒褐色の柱痕が残り、掘り方はロームブロックを多く混入する埋土で埋められている。

第103号掘立柱建物跡（図50）　確認面からの深さはピット２・３・５では25～31cm、ピット１・４では53cmと中央の２基が規模が大きく深い。ピット１・４は堆積土が２層に分層され、柱痕には黒褐色土が堆積し、掘り方にはロームブロック主体土が堆積し、堅くしまっている。北東隅の柱穴が１基検出できなかったが、第170号溝跡と重複しているため、壊されたと考えられる。

第104号掘立柱建物跡（図51）　２条の外周溝に囲まれた掘立柱建物跡を検出した。本遺構は緩い沢地形上に位置し、沢地形に堆積する第Ⅴ層上面で確認した。２条の外周溝同士は重複しないが、第126号溝跡は人為的に埋め戻された形跡があるため、第127号溝跡が新しい可能性が高い。本稿では新しい方を外周溝１（第127号溝跡）、古い方を外周溝２（第126号溝跡）として報告する。第104号掘立柱建物跡周辺からは、他にも多くの柱穴状のピットが検出されたが、掘立柱建物跡として報告できるものはなかった。付近には柱列状の耕作痕が数多く存在し、その見分けが困難であったこともあり、見逃してしまった柱穴もあると思われる。

[外周溝１（第127号溝跡）] 外周溝２の外側に位置し、掘立柱建物跡をＪ字状に囲む。北西側は掘立柱建物跡の梁行方向に平行である。全長12.6m、幅58～122cm、確認面からの深さは６～35cmで、西側の末端が最も高く、北西側に向かって低くなる。北西側末端との比高差は約80cmである。堆積土は６層に分層された。第１～５層は自然堆積で、黒褐色土を主体とする。第６層はロームブロックと黒褐色土による掘り方の埋土で、厚い部分では20cmに達する。出土遺物は土師器甕片４点、須恵器大甕片１点、砥石１点、自然礫６点である。土器は小片のため、図示することができなかった。図51－11は安山岩製の砥石で、粗砥とみられる。

[外周溝２（第126号溝跡）] 第126号溝跡についてはつくり替えの痕跡が２回確認でき、新しい順から



第101号掘立柱建物跡埋積土

ピット1
第1層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物2％、焼土2％、ローム15％、植物した粘土ブロック5％混入
第2層 10YR2/4 褐 色 土 ローム40％、ロームブロック5％混入
第3層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物5％、焼土15％、ローム7％、ロームブロック5％混入
第4層 10YR3/4 暗褐色土 ローム10％混入
第5層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物1％、ローム20％、ロームブロック2％混入
第6層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物1％、ローム30％、ロームブロック2％混入
ピット2
第1層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物1％、ローム7％混入
第2層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物1％、ローム30％混入
第3層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物1％、焼土1％、ローム20％混入
第4層 10YR4/4 褐 色 土 ローム15％、ロームブロック30％混入
第5層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物1％、焼土1％、ローム30％、ロームブロック15％混入
第6層 10YR4/4 褐 色 土 炭化物1％、ローム25％、ロームブロック7％混入
第7層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物1％、ローム7％混入
第8層 10YR4/6 褐 色 土 ロームブロック30％、黒褐色土15％混入
第9層 10YR4/6 褐 色 土 ローム質土層
第10層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物2％、焼土1％、ローム3％混入
第11層 10YR3/4 暗褐色土 ローム7％混入
ピット3
第1層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物5％、焼土1％、ローム10％混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物2％、ローム30％、ロームブロック7％混入
第3層 10YR2/3 黒褐色土 炭化物2％、焼土1％、ローム30％、ロームブロック10％混入
第4層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物3％、ローム5％、ロームブロック5％混入
第5層 10YR3/4 暗褐色土 ローム20％、ロームブロック20％、粘土ブロック5％混入

第102号掘立柱建物跡埋積土

ピット1
第1層 10YR2/1 黒 色 土 ローム3％、焼土3％混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土30％、黒褐色土2％混入
第3層 10YR2/2 黒褐色土と10YR5/6 黄褐色土（ローム）との混合土 堅くしまる
第4層 10YR5/6 黄褐色土 ロームブロック主体、黒褐色土20％混入、崩れやすい
第5層 10YR3/1 黒褐色土 ローム12％、黒褐色土5％混入
ピット3
第1層 10YR2/2 黒褐色土 小ロームブロック7％混入、しまりあまりなし
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5％混入
第3層 10YR4/6 褐 色 土 暗褐色土10％混入、堅くしまる
第4層 10YR4/3 にぶい褐色土 ローム40％混入、崩れやすい
第5層 10YR4/6 褐 色 土 ロームブロック主体、黒褐色土10％混入、堅くしまる
ピット4
第1層 10YR3/1 黒褐色土 ロームブロック15％混入
第2層 10YR1/1 黒 色 土 ロームブロック5％混入、しまりなし
第3層 10YR5/6 黄褐色土 にぶい黄褐色土20％混入、堅くしまる
第4層 10YR4/3 にぶい褐色土 黒褐色土20％混入
第5層 10YR5/6 黄褐色土 堅くしまる

第103号掘立柱建物跡埋積土

ピット1
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3％、しまりなし
第2層 10YR4/6 暗褐色土と10YR3/3 暗褐色土との混合土 崩れやすい
ピット4
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム10％、しまりあまりなし
第2層 10YR4/3 にぶい褐色土 ローム主体、炭化物5％混入 堅くしまる

図50　第101～103・105・106号掘立柱建物跡

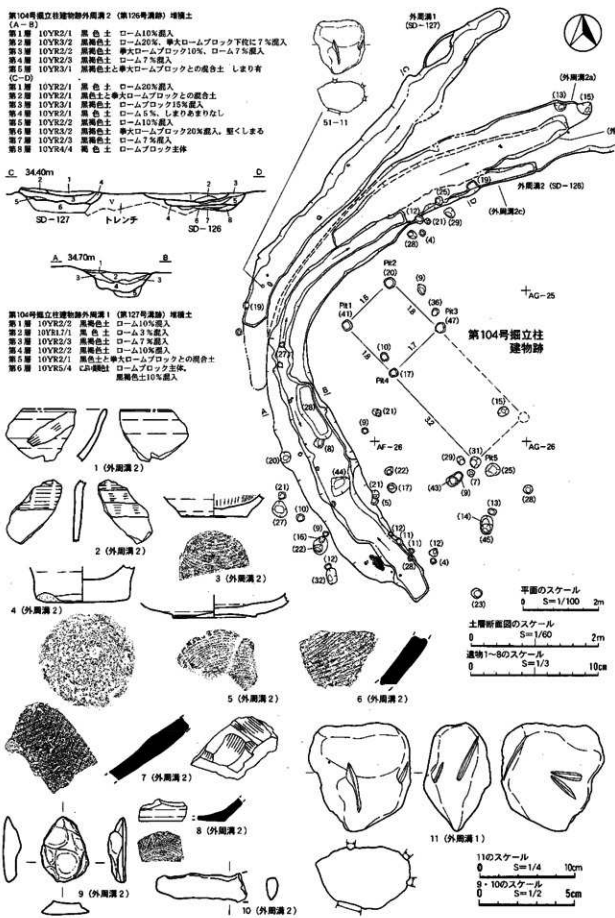


図51　第104号掘立柱建物跡

外周溝2a→外周溝2b→外周溝2cとした。外周溝2は掘立柱建物跡の南西～北西をL字状に囲む形で、南西側は掘立柱建物跡の桁行方向とややずれて、等高線に平行して作られている。北西側は掘立柱建物跡の梁行方向にほぼ平行、等高線にほぼ垂直である。

外周溝2aの規模は長さ18.6m、幅60～170cm、確認面からの深さ5～41cmを測る。南西側は幅150～170cmで、断面形はほぼ平坦な底面からやや開き気味に立ち上がり、両側とも屈曲して皿状に立ち上がる。A－Bセクション付近から、160×45cmの長楕円形で、溝底面からの深さ11cmの土坑状の落ち込みが埋め戻された状態で検出された。南西端は幅60cmに先細りし、なだらかに立ち上がる。溝跡がL字状にカーブする付近では、幅1m、深さ5～11cmと狭く浅くなり、北西側では幅147～170cm、深さ5～12cmと再び溝幅が広がる。溝跡の断面形は、平坦な底面から開きながら立ち上がる浅い逆台形である。北西側の末端は次第に浅くなって消え、立ち上がりを確認できない。全体的に見ると西側から溝跡に流れ込んだ雨水が一旦南西側に溜まり、水位が一定以上になると北西側に流れて排水されるようにつくられている。A－Bセクションの第1～5層、C－Dセクションの第1・2層が本段階の堆積土と考えられ、ローム混じりの黒褐色土で埋められている。

外周溝2bは外周溝2aの内側の深く掘られた部分で、埋め戻されたものとみられる。埋め戻された部分の規模は長さ7.7m、幅50～90cm、確認面からの深さ14～21cmで、C－Dセクション付近で最も深い。C－Dセクションの第3～7層が本段階の堆積土とみられ、このうち第6・7層は掘り方の埋土と考えられる。

外周溝2cは、外周溝2a・2bの底面で確認した。南西側は同一場所を掘り直しているため不明であるが、北西側は幅22～47cm、確認面からの深さ19～25cmの形の細く深い溝跡である。C－Dセクションの第8層が本段階の堆積土と考えられ、ロームブロック主体の褐色土で埋め戻されている。

外周溝2a～2cから出土した遺物は、土師器甕片24点・坏片9点・皿片1点、須恵器大甕片10点、壺片5点・坏片3点、自然礫7点、刀子1点、焼成粘土塊1点である。図51－3は内黒の土師器坏底部片である。外面は摩滅が激しい。図51－5は土師器皿と思われる底部片である。焼成前に上から土器を潰したとみられ、大きく歪んで板状を呈する。図51－9は土師質の焼成粘土塊とみられる。裏面は平滑で、粘土を板などに押し付けて成形したと思われる。表面には粘土を押さえた指痕が明瞭に残っている。

第106号掘立柱建物跡（図50）　第102・103号掘立柱建物跡と軸方向がほぼ一致する。調査区際に位置するため、調査区外である南側に、対応する柱列がある可能性や塀跡となる可能性がある。確認面からの深さは14～35cmで、重複する第102・103号掘立柱建物跡と比べて浅い。

第110号掘立柱建物跡（図52・53）　軸方向が第126号竪穴住居跡と同一なこと、ピット1～4、ピット5～7の列が住居跡のピット4・8に対応することから、ピット1・7が住居跡壁際の壁際の柱穴となり、ピット2～6が住居跡に付属する掘立柱建物跡となる可能性がある。

第112号掘立柱建物跡（図52・53）　南北方向柱列2間・東西方向柱列2間の建物の南側に庇のつく建物とみられる。規模は身舎の桁行3.7～4m、梁行3.4～3.5mで、庇の幅は0.8～1.1mである。

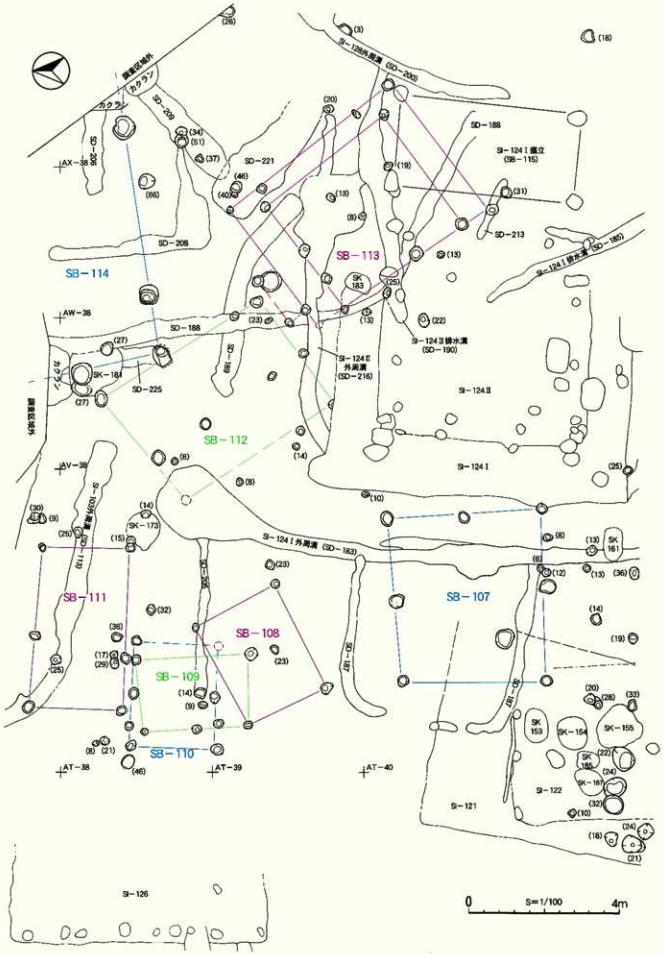
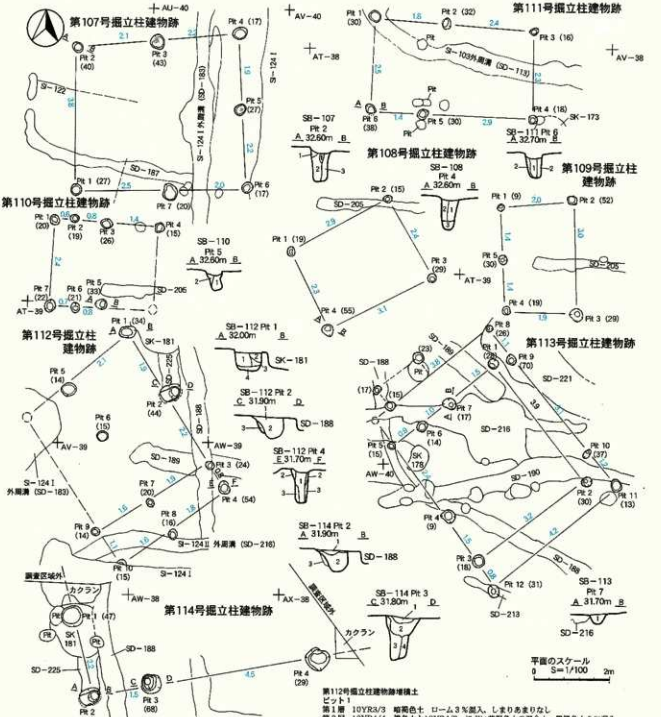


図52　第107～114号掘立柱建物跡（1）



第107号掘立柱建物跡ピット2堆積土
第1層 10YR4/4 褐 色 土 ロームブロック主体で堅くしまる
第2層 10YR3/4 暗褐色土 小ロームブロック10%混入、ややもろい
第3層 10YR3/6 黄褐色土 ロームブロック主体で堅くしまる
第108号掘立柱建物跡ピット4堆積土
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック・炭化物1%混入
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック20%、炭化物1%混入
第3層 10YR2/2 黒褐色土 粘土ブロック40%、炭化物1%混入
第110号掘立柱建物跡ピット5堆積土
第1層 10YR3/3 暗褐色土 焼土・炭化物・焼土1%混入
第2層 10YR4/6 褐 色 土 粘土ブロック30%、炭化物1%混入
第111号掘立柱建物跡ピット6堆積土
第1層 10YR3/2 黒褐色土 粘土2%、炭化物1%混入
第2層 10YR3/4 暗褐色土 粘土ブロック10%、炭化物・焼土1%混入

第112号掘立柱建物跡堆積土
ピット1
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム3%混入、しまりあまりなし
第2層 10YR4/4 褐色土と10YR4/3 にぶい黄褐色土の混合土 黒褐色土5%混入
第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム10%混入
第4層 10YR3/6 黄褐色土 暗褐色土30%混入、堅くしまる
ピット2
第1層 10YR4/6 褐 色 土 ローム土主体、炭化物2%混入
ピット4
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%混入
第2層 10YR2/3 黒褐色土 粘土10%混入
第3層 10YR5/6 黄褐色土 黒褐色土30%混入、粗くしまる
第114号掘立柱建物跡堆積土
ピット2
第1層 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土・褐色土20%、ローム3%、炭化物2%、焼土1%混入
第2層 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土10%、黒褐色土5%、ローム・粘土3%、炭化物2%、焼土1%混入
ピット3
第1層 10YR3/4 暗褐色土と10YR2/3 黒褐色土との混合土 ローム5%、黒褐色土3%、炭化物3%、焼土1%混入
第2層 10YR2/3 黒褐色土と10YR3/4 暗褐色土と10YR4/6 褐色土 との混合土 炭化物3%、焼土・粘土2%混入
第3層 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土5%、ローム・炭化物2%混入
第4層 10YR2/3 黒褐色土と10YR4/6 褐色土との混合土 ローム3%、炭化物2%混入

図53 第107～114号掘立柱建物跡（2）

掘立柱建物跡計測表

遺構名	位　置	桁行(総長m)	梁行(総長m)	形　態	桁行軸方向	掘り方形態	柱痕(cm)	重複	備　考
SB-101	AL·AM-37	東西2間(5.5)	南北1間(3.2)	長方形	N-90°-E	楕円形·方形	−	SK-168不明	
SB-102	AV-AW-45-46	東西2間(6.0)	南北1間(2.6)	長方形	N-88°-W	方形	20~24cm,楕円	SI-115·127, SD-177·232, SB-103·106不明	
SB-103	AW-46	東西2間(3.5)	南北1間(1.6)	長方形	N-90°-E	円形·方形	18cm	SD-177·232,SB-102·106不明	
SB-104	AE~AG23~28	東西2間(5.0)	南北1間(1.7)	長方形	N-44°-W	円形·方形	−		外周溝(2条)が付属
SB-105	AD-AE-22	東西2間(3.7)	南北1間(1.4)	長方形	N-62°-E	円形·楕円形	−	101畠跡→SD-229·231不明	
SB-106	AU~AW-45	東西2間(6.2)	−	直線状	N-90°-E	方形	20cm,円形	SD-177·232,SB-102·103不明	調査区域外へ伸びる？
SB-107	AT-AU-40-41	東西2間(4.4)	南北2間(4.1)	方形	N-89°-E	円形·方形	14~18cm,円形	SI-121·122·124,SD-187不明	SI-122のピットを共有
SB-108	AT-AU 38-39	東西1間(3.1)	南北1間(2.4)	長方形	N-64°-E	円形·楕円形	14cm	SB-109·110,SD-205不明	
SB-109	AT-38·39	南北2間(3.0)	東西1間(2.0)	長方形	N-4°-W	円形·方形	−	SB-108·110,SD-205不明	
SB-110	AT-38	東西3間(7.8)	南北1間(2.4)	長方形	N-88°-W	方形·長方形	−	SB-108·109,SD-205不明	SI-126に付属する掘立柱建物跡の可能性有
SB-111	AT-AU 37-38	東西2間(4.3)	南北1間(2.5)	長方形	N-88°-W	長方形·楕円形	12cm	SI-103外周溝(SD-113)不明	
SB-112	AV-38·39	南北3間(4.9)	東西2間(3.5)	長方形	N-36°-W	円形·楕円形	8~22cm	→SB-114, SI-124,SK-181,SD-188·189不明	南側に庇
SB-113	AW-AX 39-40	南北4間(5.4)	東西2間(4.2)	長方形	N-35°-W	円形·楕円形	−	SI-124·SD-188·189→,SD-221·213不明	北・東・南側に庇
SB-114	AV~AX-38	東西2間(6.0)	南北1間(2.2)	L字状	N-80°-E	方形·不整形	−	SB-112→,SK-181,SD-188·206·208·225不明	調査区域外へ伸びる
SB-115	AW-AX 40-41	南北1間(4.8)	東西1間(2.4)	長方形	N-7°-E	方形·長方形·楕円形	10cm	SI-124Ⅱ排水溝(SD-190),SD-188→	第124Ⅰ号住居跡に付属

第113号掘立柱建物跡（図52・53）　南北方向柱列2間、東西方向柱列3間の身舎の北・東・南側の3面に庇（？）のつく建物跡とみられる。規模は身舎の桁行3.8～3.9m、梁行3.4～3.5mで、庇の幅は北側0.9m、西側0.6m、南側0.8mを測る。庇とした柱穴が極端に少なく、建物の形態に疑問が残る。

第114号掘立柱建物跡（図52・53）　調査区際に位置するため、建物跡は調査区外の北と東方向にそれぞれつづいているものとみられる。柱穴の掘り方の規模、深さ、柱間寸法ともに他の掘立柱建物跡よりも規模が大きいのが特徴である。

［小結］今年度の調査区から検出された掘立柱建物跡にはどちらかの軸方向がN－88～97°－E（第101～103・106・107・109～111号掘立柱建物跡）、N－46～64°－E（第104・105・108・112・113号掘立柱建物跡）の範囲に収まる2つのグループがある。前者は東西棟建物7棟、南北棟建物1棟で、2間・1間の構造のものが主体的である。この中には竪穴住居跡に付属する掘立柱建物跡も含まれており、付近の住居跡の軸方向に一致することから、平安時代の建物跡とみて良さそうである。後者の構造にはバラツキがみられるが、隣接して位置する第112・113号掘立柱建物跡は庇を持つ建物跡で、これらと重複する住居跡の軸方向と全く異なり、平安時代より新しい可能性もある。　（水谷）

第3節　土坑

今年度検出された土坑は73基で、調査区のほぼ全域で検出されている。土坑の立地は散発的であるが、平成13年度調査区北端の第101号畠跡が検出された区域と調査区ほぼ中央部・第101号円形周溝の周辺、調査区南側・第118・119号竪穴住居跡東側で数基まとまる傾向が見受けられる。土坑の時期は堆積土・出土遺物などから大半が平安時代に属すると考えられる。規模が大きいものは少なく、掘り込みの浅いものが多い。検出面は第Ⅶ・Ⅷ層であるが、掘り込み面は第Ⅲ・Ⅳ層と考えられる。

今年度の土坑番号は検出順に101号から付したが、その後の調査において土坑と認定できないもの、他の遺構に変更したものを欠番とした。また、第115・177号土坑は堆積土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定をおこなったところ、新しいものであることが判明したため(第３章第１節参照)、ここでは取り上げないこととした。欠番とした土坑番号は103･104･112～116･152･159･161･169･174･177･180である。また昨年度調査した第31号土坑は溝跡と判明したため、欠番とした。

ここでは、「第324集　朝日山(2)遺跡Ⅳ」に準じ、形態・断面形・規模による分類をおこない、記載も分類ごとにまとめた。個々の土坑の位置・規模・分類等については計測表を参照されたい。表中の「(　)」は残存値を、「－」は不明・あるいは計測不能を表している。重複の「→」は「旧→新」を表し、「→SK－２」は「本土坑は第２号土坑より古い」ことを意味する。出土遺物の「堆」は堆積土から「底」は底面からの出土を表している。

分類は平面形により

ａ類　円形

ｂ類　楕円形

ｃ類　方形

ｄ類　重複などにより、不明のもの

に分類し、断面形・規模により適宜細分をおこなっている。以下、各分類ごとに記述する。

ａ類　円形

本類に分類される土坑は第102・105・108・117・120・123・129・130・134・137・141・143～145・147・172・173・175・186号土坑の19基である。本類の土坑は調査区ほぼ全域に点在し、集中する傾向はみられない。規模は径186cmの第172号土坑が最大、径63cmの第186号土坑が最小である。規模と断面形により次のように四分される。昨年度のi・iii類に分類されるものは検出されず、新たにvi類を加えた。

ii．規模は1.5m以上で、壁がやや開きながら立ち上がるもの

iv．規模は１m以上で壁がほぼ垂直に立ち上がるもの(壁の立ち上がりが急なもの)

v．規模が１m以下の小型のもの

vi．規模は1.5m前後で壁が垂直に立ち上がるもの

ii．規模は1.5m以上で、壁がやや開きながら立ち上がるもの(図54)

第172号土坑が本類に含まれる。今年度調査区の南端に位置し、第202号竪穴住居跡(平成14年度調査)の堆積土を掘り込んで構築されている。規模は186×176cm、深さは33cmを測る。堆積土は７層

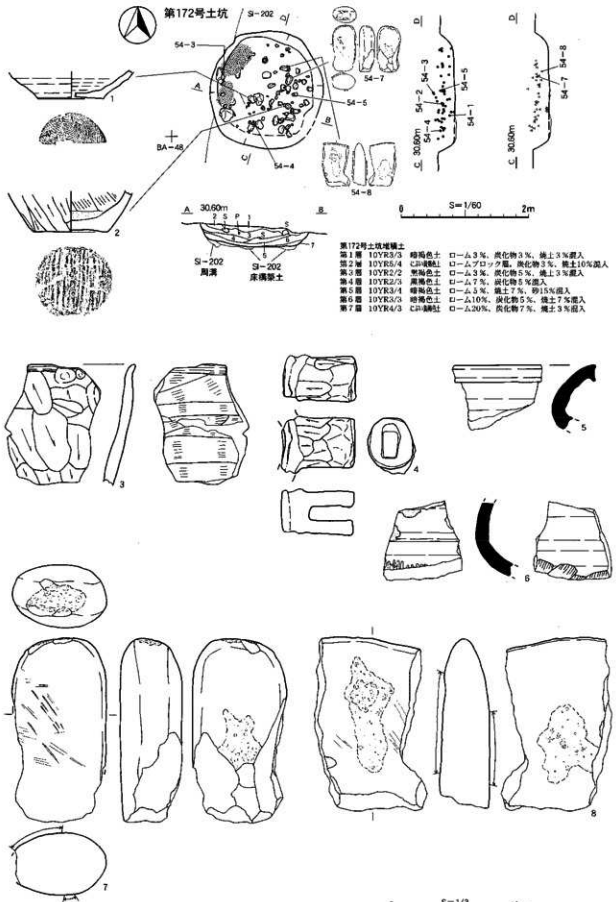
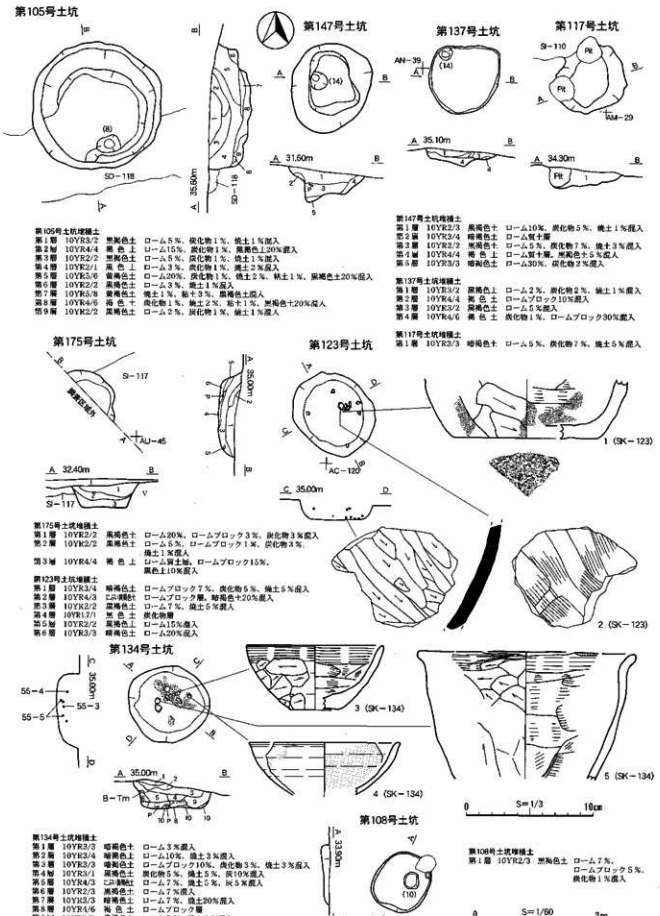

第172号土坑
SI-202
54-3
54-7
54-5
54-4
54-8
BA-48
A
B
C
D
30.60m
S=1/60
2m
SI-202
周溝
SI-202
床構築土
第172号土坑堆積土
第1層　10YR3/3　暗褐色土　ローム3％、炭化物3％、焼土3％混入
第2層　10YR5/4　C2H褐色土　ロームブロック層、炭化物3％、焼土10％混入
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム3％、炭化物5％、焼土3％混入
第4層　10YR2/3　黒褐色土　ローム7％、炭化物5％混入
第5層　10YR3/4　暗褐色土　ローム5％、焼土7％、砂15％混入
第6層　10YR3/3　暗褐色土　ローム10％、炭化物5％、焼土7％混入
第7層　10YR4/3　C2H褐色土　ローム20％、炭化物7％、焼土3％混入
S=1/3
10cm

図54　土坑a類（1）



第105号土坑堆積土
第1層　10YR3/2　黒褐色土　ローム5％、炭化物1％、焼土1％混入
第2層　10YR4/4　褐 色 土　ローム15％、炭化物1％、黒褐色1.20％混入
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム5％、炭化物1％、焼土1％混入
第4層　10YR2/1　黒 色 土　ローム3％、炭化物1％、焼土2％混入
第5層　10YR3/6　黄褐色土　ローム20％、炭化物1％、焼土2％、軟土1％、黒褐色土20％混入
第6層　10YR2/2　黒褐色土　ローム3％、焼土1％混入
第7層　10YR3/3　暗褐色土　焼土1％、粘土3％、黒褐色土混入
第8層　10YR4/6　褐 色 土　炭化物1％、焼土2％、粘土1％、黒褐色土20％混入
第9層　10YR2/2　黒褐色土　ローム2％、炭化物1％、焼土1％混入

第147号土坑堆積土
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム10％、炭化物5％、焼土1％混入
第2層　10YR2/4　暗褐色土　ローム粒十層
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム5％、炭化物7％、焼土3％混入
第4層d　10YR4/4　褐 色 土　ローム粒十層、黒褐色土5％混入
第5層　10YR3/3　暗褐色土　ローム30％、炭化物2％混入

第137号土坑堆積土
第1層　10YR3/2　黒褐色土　ローム2％、炭化物2％、焼土1％混入
第2層　10YR4/4　褐 色 土　ロームブロック10％混入
第3層　10YR3/2　黒褐色土　ローム5％混入
第4層　10YR4/6　褐 色 土　炭化物1％、ロームブロック30％混入

第117号土坑堆積土
第1層　10YR2/3　暗褐色土　ローム5％、炭化物7％、焼土5％混入

第175号土坑堆積土
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム20％、ロームブロック3％、炭化物3％混入
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ローム20％、ロームブロック1％、炭化物3％、焼土1％混入
第3層　10YR4/4　褐 色 土　ローム粒主体、ロームブロック15％、黒色土10％混入

第123号土坑堆積土
第1層　10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック7％、炭化物5％、焼土5％混入
第2層　10YR4/3　にぶい褐色土　ロームブロック層、暗褐色土20％混入
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム7％、焼土5％混入
第4層　10YR1.7/1　黒 色 土　炭化物層
第5層　10YR2/2　黒褐色土　ローム15％混入
第6層　10YR3/3　暗褐色土　ローム20％混入

第134号土坑堆積土
第1層　10YR3/3　暗褐色土　ローム3％混入
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ローム10％、焼土3％混入
第3層　10YR2/3　暗褐色土　ロームブロック10％、炭化物3％、焼土3％混入
第4層d　10YR3/1　黒褐色土　炭化物5％、焼土5％、炭10％混入
第5層　10YR4/3　にぶい褐色土　ローム7％、焼土5％、炭3％混入
第6層　10YR2/3　黒褐色土　ローム7％混入
第7層　10YR3/3　暗褐色土　ローム7％、焼土20％混入
第8層　10YR4/6　褐 色 土　ロームブロック層
第9層　10YR2/3　黒褐色土　ローム7％、焼土3％混入
第10層　10YR4/4　褐 色 土　ローム10％混入

第108号土坑堆積土
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム7％、ロームブロック5％、炭化物1％混入

図55　土坑a類（2）

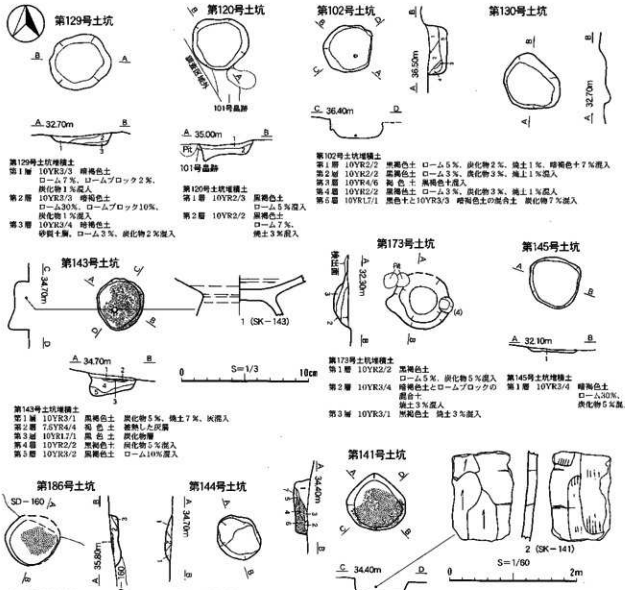


図56　土坑a類 (3)

に分層され、黒褐色土と暗褐色土が混在し、自然堆積の様相を呈する。遺物は土師器・須恵器・礫などが堆積土から出土している。遺物の垂直分布をみてみると、底面からの出土は少なく、土師器・須恵器は堆積土上層から中層にかけて出土するが、礫は上層から集中して出土している。出土遺物は土師器坏４点・甕60点、須恵器坏２点・壷２点・大甕４点で、このほかに土師器把手付土器の把手部が１点出土している。

iv. 規模は１m以上で壁がほぼ垂直に立ち上がるもの(壁の立ち上がりが急なもの)(図55)

第117・123・134・137・147・175号土坑が本類に含まれる。第123・134号土坑は径130cm前後で、深さは37cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、堆積土下位から底面にかけて土師器・須恵器が出土している。第123号土坑は自然堆積の様相を示すのに対して、第134号土坑では人為堆積の様相を呈する。堆積状況は異なるが、規模・遺物出土状況などが類似しており、２基の土坑は５mしか離れていないことから、関連性が窺われる。図55－３の土師器坏はロクロ使用後、口縁部にヨコナデ、胴部外面にケズリ、内面にナデが施される土師器坏で、口径10.9cm・底径(4.0)cmである。図55－４の土師器坏は底部から口縁にかけて内湾しながら立ち上がる器形で、口縁は外側に張り出す。図55－５の土師器甕は底部から口縁にかけて開きながら立ち上がる器形である。

v. 規模が１m以下の小型のもの(図55・56)

第102・108・120・129・130・141・143・144・145・173・186号土坑が本類に含まれる。壁が垂直に立ち上がるもの(第102・108・120・129・141・143号土坑)と壁が開きながら立ち上がるもの(第130・144・145・173・186号土坑)がある。第141・186号土坑では堆積土中に粘土の堆積がみられる。

vi. 規模は1.5m前後で壁が垂直に立ち上がるもの(図55)

第105号土坑が本類に含まれる。底面には15cmの段差を有し、凹凸がみられる。最下層には黒褐色土が堆積するが、この上には黄褐色土や褐色土が堆積し、段差まで埋め戻されたと考えられる。段差より下位の堆積土は掘り方の可能性も考えられるが、埋め戻しの層の上面(第７・８層上面)は平坦ではなく、特に堅く締まってもいないことから、掘り方ではなく、埋め戻し土ととらえておく。

b類　楕円形

本類に分類される土坑は第101・107・109・111・118・119・124・127・128・132・133・138・139・142・146・148～151・153～155・157・158・160・162・163・167・168・170・178・179・182・185号土坑の34基である。本類の土坑は調査区北端の第101号畠跡周辺と調査区南側に多くみられる。規模は長軸216cmの第138号土坑が最大、長軸63cmの第185号土坑が最小である。昨年度は規模にバラツキが多く、断面形のみによって細分したが、今年度は規模と断面形により次のように細分された。

ｉ. 規模は２mを超える大型で、壁がほぼ垂直に立ち上がるもの
ii. 規模は1.5m以上で、壁がほぼ垂直に立ち上がるもの
iii. 規模は1.5m以上で、壁が開きながら立ち上がるもの
iv. 規模は１m以上で壁がほぼ垂直に立ち上がるもの
ｖ. 規模は１m以上で壁が開きながら立ち上がるもの
vi. 規模が１m以下の小型のもの
vii. 規模は1.5m以上で、幅が狭く溝状を呈するもの

i. 規模は２mを超える大型で、壁がほぼ垂直に立ち上がるもの(図57)

第138号土坑が本類に含まれる。住居跡外周溝や溝跡と重複するが、本土坑が新しい。堆積土は７層に分層され、黒褐色土を主体とし、斜面上位からの流れ込みによる埋没と考えられる。堆積土下位からは土師器片・須恵器片が出土している。このほかに焼成粘土版の破片が１点出土している(図57－

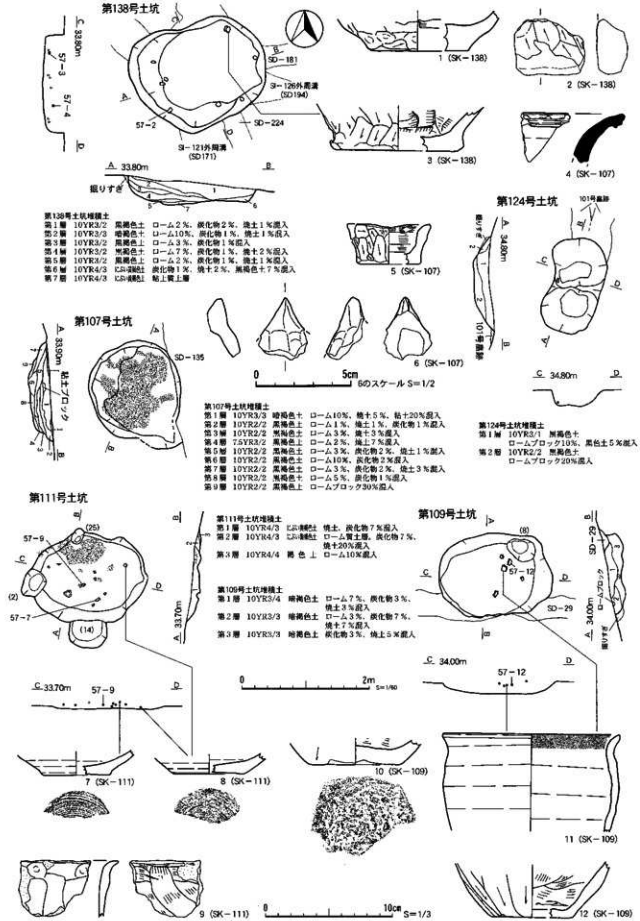
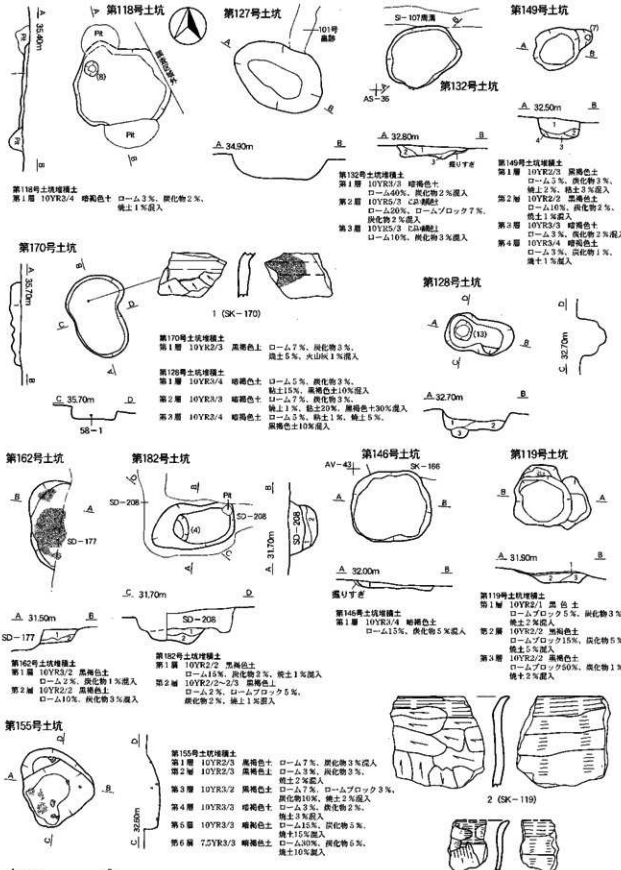

第138号土坑
SD-181
SI-126外周溝
(SD194)
SD-224
SI-121外周溝
(SD171)
1 (SK-138)
2 (SK-138)
3 (SK-138)
4 (SK-107)
5 (SK-107)
6 (SK-107)
第138号土坑堆積土
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム2%、炭化物2%、焼土1%混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%、炭化物1%、焼土1%混入
第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム3%、炭化物1%混入
第4層 10YR3/2 黒褐色土 ローム7%、炭化物1%、焼土2%混入
第5層 10YR3/2 黒褐色土 ローム2%、炭化物1%、焼土1%混入
第6層 10YR4/3 にぶ黄褐色土 炭化物1%、焼土2%、黒褐色土7%混入
第7層 10YR4/3 にぶ黄褐色土 粘土質土層
第124号土坑
101号直線
第107号土坑
SD-135
第107号土坑堆積土
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%、焼土5%、粘土20%混入
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム1%、焼土1%、炭化物1%混入
第3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3%、焼土3%混入
第4層 7.5YR3/2 黒褐色土 ローム2%、焼土7%混入
第5層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3%、炭化物2%、焼土1%混入
第6層 10YR2/2 黒褐色土 ローム10%、炭化物2%混入
第7層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3%、炭化物2%、焼土3%混入
第8層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%、炭化物1%混入
第9層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック30%混入
第124号土坑堆積土
第1層 10YR3/1 黒褐色土 ロームブロック10%、黒色土5%混入
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック20%混入
第111号土坑
第111号土坑堆積土
第1層 10YR4/3 にぶ黄褐色土 焼土、炭化物7%混入
第2層 10YR4/3 にぶ黄褐色土 ローム質土層、炭化物7%、焼土20%混入
第3層 10YR4/4 褐色土 ローム10%混入
第109号土坑
SD-29
第109号土坑堆積土
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム7%、炭化物3%、焼土3%混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム3%、炭化物7%、焼土7%混入
第3層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物3%、焼土5%混入
7 (SK-111)
8 (SK-111)
9 (SK-111)
10 (SK-109)
11 (SK-109)
12 (SK-109)
0 5cm 6のスケール S=1/2
0 2m S=1/60
0 10cm S=1/3

図57　土坑b類（1）



第118号土坑堆積土
第1層 10YR2/4 暗褐色土 ローム3％、炭化物2％、焼土1％混入

第132号土坑堆積土
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム40％、炭化物2％混入
第2層 10YR5/3 にぶい黄褐土 ローム20％、ローム・ブロック7％、炭化物2％混入
第3層 10YR5/3 にぶい黄褐土 ローム10％、炭化物3％混入

第149号土坑堆積土
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム3％、炭化物3％、焼土2％、粘土3％混入
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム10％、炭化物2％、焼土1％混入
第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム3％、炭化物2％混入
第4層 10YR3/4 暗褐色土 ローム3％、炭化物1％、焼土1％混入

第170号土坑堆積土
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム7％、炭化物3％、焼土5％、火山灰1％混入

第128号土坑堆積土
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム5％、炭化物3％、粘土15％、黒褐色土10％混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム7％、炭化物3％、焼土1％、粘土20％、黒褐色土30％混入
第3層 10YR2/4 暗褐色土 ローム5％、粘土1％、焼土5％、黒褐色土10％混入

第162号土坑堆積土
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム2％、炭化物1％混入
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム10％、炭化物3％混入

第182号土坑堆積土
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム15％、炭化物2％、焼土1％混入
第2層 10YR2/2～2/3 黒褐色土 ローム2％、ローム・ブロック5％、炭化物2％、焼土1％混入

第146号土坑堆積土
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム15％、炭化物5％混入

第119号土坑堆積土
第1層 10YR2/1 黒色土 ローム・ブロック5％、炭化物3％、焼土2％混入
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム・ブロック15％、炭化物5％、焼土5％混入
第3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム・ブロック50％、炭化物1％、焼土2％混入

第155号土坑堆積土
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム7％、炭化物3％混入
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ローム3％、炭化物3％、焼土2％混入
第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム7％、ローム・ブロック3％、炭化物10％、焼土2％混入
第4層 10YR3/3 暗褐色土 ローム3％、炭化物2％、焼土3％混入
第5層 10YR3/3 暗褐色土 ローム15％、炭化物3％、焼土15％混入
第6層 7.5YR3/3 暗褐色土 ローム30％、炭化物5％、焼土10％混入

図58　土坑b類（2）

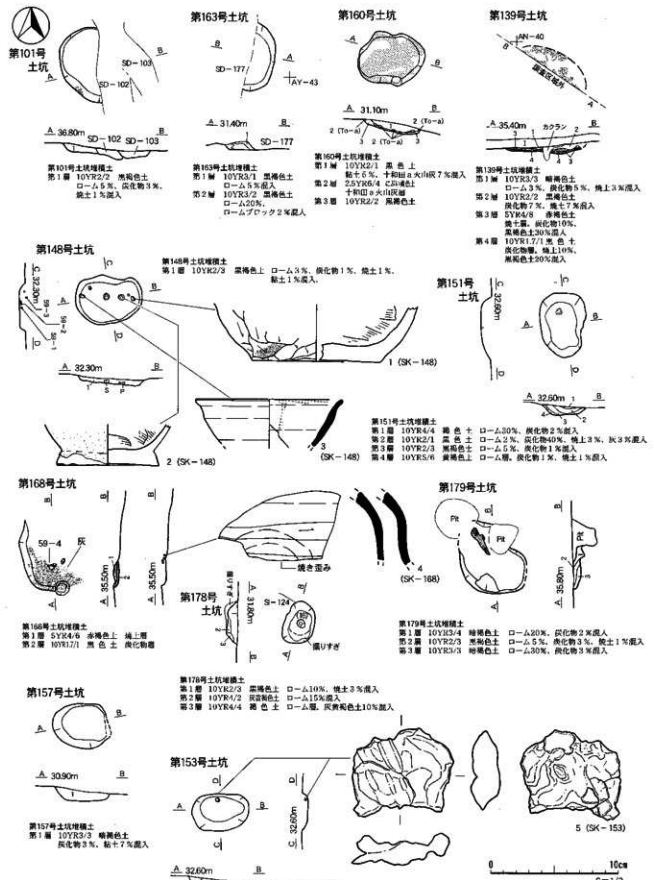

第101号土坑
第101号土坑堆積土
第1層 10YR2/2 黒褐色土
ローム5％、炭化物3％、焼土1％混入
第163号土坑
第163号土坑堆積土
第1層 10YR3/1 黒褐色土
ローム5％混入
第2層 10YR3/2 黒褐色土
ローム20％、ロームブロック2％混入
第160号土坑
第160号土坑堆積土
第1層 10YR2/1 黒 色 土
粘土5％、十和田a火山灰7％混入
第2層 2.5YR6/6 にぶい橙色土
十和田a火山灰層
第3層 10YR2/2 黒褐色土
第139号土坑
第139号土坑堆積土
第1層 10YR3/3 暗褐色土
ローム3％、炭化物5％、焼土3％混入
第2層 10YR2/2 黒褐色土
炭化物7％、焼土7％混入
第3層 5YR4/8 赤褐色土
焼土層、炭化物10％、黒褐色土30％混入
第4層 10YR1.7/1 黒 色 土
炭化物層、焼土10％、黒褐色土20％混入
第148号土坑
第148号土坑堆積土
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム3％、炭化物1％、焼土1％、粘土1％混入
第151号土坑
第151号土坑堆積土
第1層 10YR4/4 褐 色 土 ローム30％、炭化物2％混入
第2層 10YR2/1 黒 色 土 ローム2％、炭化物40％、焼土3％、灰3％混入
第3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5％、炭化物1％混入
第4層 10YR5/6 黄褐色土 ローム層、炭化物1％、焼土1％混入
第168号土坑
第168号土坑堆積土
第1層 5YR4/6 赤褐色土 焼土層
第2層 10YR1/1 黒 色 土 炭化物層
焼き歪み
第178号土坑
第178号土坑堆積土
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム10％、焼土3％混入
第2層 10YR4/2 灰黄褐色土 ローム15％混入
第3層 10YR4/4 褐 色 土 ローム層、炭黄褐色土10％混入
掘りすぎ
第179号土坑
第179号土坑堆積土
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム20％、炭化物2％混入
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5％、炭化物3％、焼土1％混入
第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム30％、炭化物3％混入
第157号土坑
第157号土坑堆積土
第1層 10YR3/3 暗褐色土
炭化物3％、粘土7％混入
第153号土坑
第153号土坑堆積土
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10％、炭化物7％、焼土30％混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム7％、炭化物20％、焼土1％、粘土25％混入
S=1/60
S=1/3

図59　土坑b類（3）

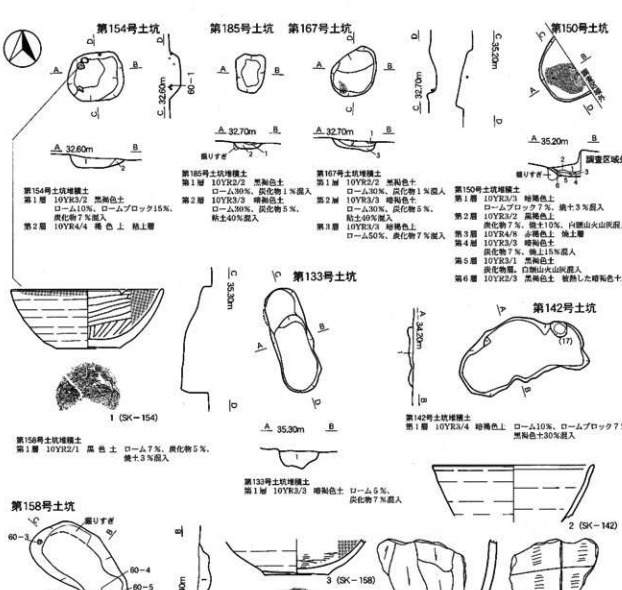


図60 土坑b類（4）

2）。外面にはケズリがみられ、胎土には繊維が混入し、脆い。

ii. 規模は1.5m以上で、壁がほぼ垂直に立ち上がるもの(図57)

第107号土坑が本類に含まれる。長軸184cmの不整な楕円形を呈する。堆積土は9層に分層され、黒褐色土を主体とし、第2層以下は自然堆積の様相を呈する。第1層にはローム・粘土・焼土が多く混入することから、廃棄土の可能性があり、埋没途中の窪みに廃棄したものと考えられる。この焼土上から土鈴の紐部分が出土している(図57－6)。ケズリにより成形され、1枚の板状の粘土を巻いて製作されたと考えられ、粘土の合わせ目が残る。土鈴は窯業や製鉄に関連する遺跡や遺構から出土す

ることが多いが、一般集落でも出土することがある。竪穴住居跡のカマドから出土する例もあり、火に関する祭祀に関わる遺物と考えられる。本土坑で祭祀が行われていたのではなく、廃棄土とともに持ち込まれたものと推測される。このほかにミニチュア土器が1点出土している。

iii. 規模は1.5m以上で、壁が開きながら立ち上がるもの(図57・58)

第109・111・118・124・127号土坑が本類に含まれる。第109号土坑堆積土からロクロ使用の土師器甕(図57－11)が出土している。口縁内面に帯状に煤状炭化物が付着している。

iv. 規模は1m以上で壁がほぼ垂直に立ち上がるもの(図58)

第128・132・149・170号土坑が本類に含まれる。第128号土坑堆積土は3層に分層される。ロームや粘土が多く含まれ、堆積状況から人為堆積と考えられる。

v. 規模は1m以上で壁が開きながら立ち上がるもの(図58・59)

第101・119・139・146・148・151・155・160・162・163・168・182号土坑が本類に含まれる。第139・168号土坑底面には焼土・炭化物が堆積している。第168号土坑は第101号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係及び関連性は不明である。第139号土坑は第Ⅲ層で焼土と炭化物の範囲として確認されたが、掘り込みが浅く、プランを捉えることはできなかった。第168号土坑も第Ⅶ層上面で焼土と炭化物の集積として確認できたが、掘り込みはごく浅く、南西壁の一部を検出したのみである。第160号土坑の底面から1～5cm上に十和田a火山灰がブロック状に堆積している。第148号土坑底面からは土師器甕・須恵器坏・礫が一直線に並ぶようにして出土している。図59－2以外は破片で、意図的に配置されたものかは不明である。

vi. 規模が1m以下の小型のもの(図59・60)

第150・153・154・157・167・178・179・185号土坑が本類に含まれる。第153号土坑底面から塊状の鉄製品が出土している。板状の鉄製品に棒状のものが3本付着している状態と考えられる。

vii. 規模は1.5m以上で、幅が狭く溝状を呈するもの(図60)

第133・142・158号土坑が本類に含まれる。第158号土坑から内面黒色処理の土師器坏と甕が出土している。

c類　方形

本類に分類される土坑は第106・110・121・125・126・135・136・156・165・166・171・176・181・187号土坑の14基である。本類の土坑は調査区北側での検出数は少なく、分布はやや南側に偏っている。規模は一辺204cmの第166号土坑が最大、一辺81cmの第171号土坑が最小である。規模と断面形により次のように7つに細分される。昨年度の5分類に、新たに2つの分類を加えた。

ⅰ．規模は2mを超える大型で、壁がほぼ垂直に立ち上がるもの
ⅱ．規模は2mを超える大型で、壁が開きながら立ち上がるもの
ⅲ．規模は1.5m以上で、壁がほぼ垂直に立ち上がるもの
ⅳ．規模は1.5m以下で、壁が開きながら立ち上がるもの
ⅴ．規模は1m以下の小型のもの
ⅵ．規模は1.5m以上で、壁が開きながら立ち上がるもの
ⅶ．規模は1.5m以下で、壁が垂直に立ち上がるもの

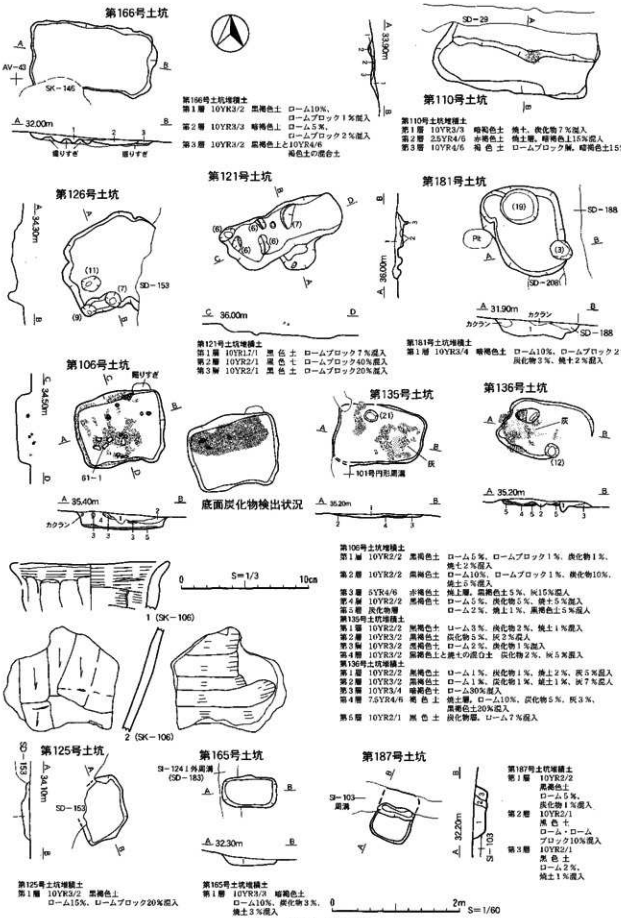

第166号土坑
第166号土坑堆積土
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム10%、ロームブロック1%混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5%、ロームブロック2%混入
第3層 10YR3/2 黒褐色土と10YR4/6 褐色土の混合土
第110号土坑
第110号土坑堆積土
第1層 10YR3/3 暗褐色土 焼土、炭化物7%混入
第2層 2.5YR4/6 赤褐色土 焼土層、暗褐色土15%混入
第3層 10YR4/6 褐色土 ロームブロック層、暗褐色土15%混入
第126号土坑
第121号土坑
第121号土坑堆積土
第1層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック7%混入
第2層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック40%混入
第3層 10YR2/1 黒色土 ロームブロック20%混入
第181号土坑
第181号土坑堆積土
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム10%、ロームブロック2%、炭化物3%、焼土2%混入
第106号土坑
第135号土坑
第136号土坑
底面炭化物検出状況
第106号土坑堆積土
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%、ロームブロック1%、炭化物1%、焼土2%混入
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム10%、ロームブロック1%、炭化物10%、焼土5%混入
第3層 5YR4/6 赤褐色土 焼土層、黒褐色土5%、灰1%混入
第4層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%、炭化物5%、焼土5%混入
第5層 炭化物層 ローム2%、焼土1%、黒褐色土5%混入
第135号土坑堆積土
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3%、炭化物2%、焼土1%混入
第2層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物3%、灰2%混入
第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム2%、炭化物1%混入
第4層 10YR3/2 黒褐色土と焼土の混合土 炭化物2%、灰5%混入
第136号土坑堆積土
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム1%、炭化物1%、焼土2%、灰5%混入
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ローム1%、炭化物1%、焼土1%、灰7%混入
第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム90%混入
第4層 7.5YR4/6 褐色土 焼土層、ローム10%、炭化物5%、灰3%、黒褐色土20%混入
第5層 10YR2/1 黒色土 炭化物層、ローム7%混入
1 (SK－106)
2 (SK－106)
S=1/3
10cm
第125号土坑
第125号土坑堆積土
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム15%、ロームブロック20%混入
第165号土坑
第165号土坑堆積土
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム10%、炭化物3%、焼土3%混入
第187号土坑
第187号土坑堆積土
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5%、炭化物1%混入
第2層 10YR2/1 黒色土 ローム・ロームブロック10%混入
第3層 10YR2/1 黒色土 ローム2%、焼土1%混入
0
2m
S=1/60

図61　土坑c類（1）

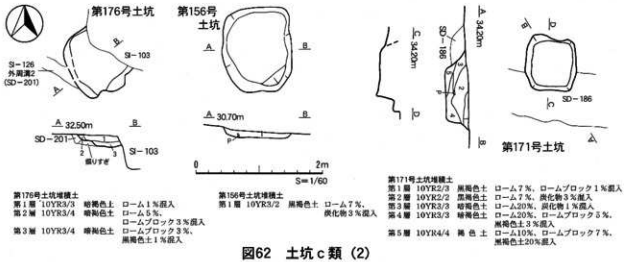


図62　土坑ｃ類（2）

i. 規模は２ｍを超える大型で、壁がほぼ垂直に立ち上がるもの(図61)

第166号土坑が本類に含まれる。長辺204cm・短辺112cmの長方形を呈する。深さは13cmで、底面には起伏がみられる。

ii. 規模は２ｍを超える大型で、壁が開きながら立ち上がるもの(図61)

第110号土坑が本類に含まれる。重複により規模は不明であるが、検出された長軸は225cmで、長方形を呈する。底面には１～６cmの段差を有し、中央部には焼土が堆積している。

iii. 規模は1.5m以上で、壁がほぼ垂直に立ち上がるもの(図61)

第136号土坑が本類に含まれる。底面で焼土・炭化物・灰が検出された。削平により残存状況は悪く、確認面からの深さは６cmで、当時の生活面からの掘り込みも浅かったと考えられる。本土坑の周辺には第135号土坑など、同様の掘り込みが浅く、焼土や炭化物が底面に堆積する土坑がみられる。

iv. 規模は1.5m以下で、壁が開きながら立ち上がるもの(図61・62)

第135・176・181号土坑が本類に含まれる。第135号土坑は底面で焼土・炭化物・灰が検出された。本土坑は第101号円形周溝と重複し、本土坑が新しい。

v. 規模は１m以下の小型のもの(図61・62)

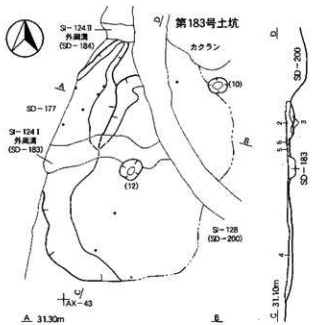
第125・165・171・187号土坑が本類に含まれる。第171号土坑は長辺88cm、短辺80cmの南北がやや長い長方形を呈する。断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦であるが、南壁直下では４cm落ち込む。

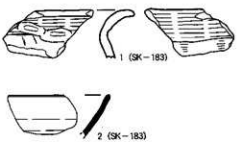
vi. 規模は1.5m以上で、壁が開きながら立ち上がるもの(図61)

第121・126号土坑が本類に含まれる。いずれも掘り込みは浅く、底面には起伏がみられる。第121号土坑底面には耕具痕がみられる。

vii. 規模は1.5m以下で、壁が垂直に立ち上がるもの(図61・62)

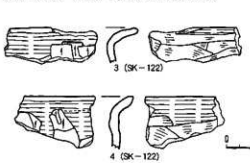
第106・156号土坑が本類に含まれる。第106号土坑は四隅が明瞭な長方形を呈し、長辺146cm、短辺124cmを測る。四方の壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がる。底面北側からは炭化物が検出され、堆積土には焼土が混入する。壁面は東壁を除く三壁が焼けて赤変している。堆積土からは土師器片・羽口が出土している。





第140号土坑堆積土
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック25％，炭化物，焼土粒入
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック5％，焼土1％混入
第3層 10YR4/6 褐 色 土 ロームブロック50％，炭化物，焼土粒入

第183号土坑堆積土
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム7％，炭化物3％，焼土1％，暗褐色土混入
第2層 10YR2/3 黒褐色土とロームの混合土 炭化物3％，焼土2％，暗褐色土7％混入
第3層 10YR4/6 褐 色 土 炭化物2％，黒褐色土20％混入
第4層 10YR2/2 黒褐色土 ローム5％，炭化物5％，焼土2％混入
第5層 10YR2/3 黒褐色土 ローム40％，炭化物3％，焼土1％混入
第6層 10YR4/6 褐 色 土 炭化物2％，黒褐色土20％混入

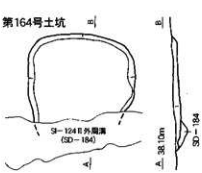


第122号土坑

第122号土坑堆積土
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム7％，炭化物2％混入
第2層 10YR3/1 黒褐色土 ローム3％，炭化物2％混入

第131号土坑

第164号土坑



第184号土坑

第131号土坑堆積土
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム5％，炭化物2％，焼土1％混入
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ローム5％，炭化物1％，粘土ブロック10％混入

第164号土坑堆積土
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム10％，ロームブロック2％混入

第184号土坑堆積土
第1層 10YR3/1 黒 色 土 ローム3％，炭化物5％，焼土2％混入
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム30％，ロームブロック20％，焼土1％，粘土1％混入
第3層 10YR2/1 黒 色 土 ローム15％，ロームブロック10％，焼土1％混入
第4層 10YR2/1 黒 色 土 ローム7％，ロームブロック20％，炭化物2％，焼土1％混入
第5層 10YR3/2 黒褐色土 ローム40％混入
第6層 10YR2/1 黒 色 土 ローム5％混入
第7層 10YR2/1 黒 色 土 ローム3％混入

図63　土坑d類

d類　重複などにより、不明のもの（図63）

本類に分類される土坑は第122・131・140・164・183・184号土坑の6基で、楕円形または方形を呈すると推定される。第140号土坑は南半が調査区外にのびるため、平面形は不明であるが、楕円形あるいは長方形を呈すると考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土にはローム・ロームブロック・焼土・炭化物が混入し、埋め戻されたと考えられる。第183号土坑は検出された長さ403cmで、今年度検出された土坑のなかで最大の規模をもつが、重複により全体形は不明である。壁の立ち上がりは明瞭ではなく、底面には起伏がある。底面には褐色土が貼られ、堅く締まっている。

焼土が堆積する土坑について

第135・136・139・168号土坑は底面で焼土・炭化物・灰が検出されている。第168号土坑はやや離れているが、これらの土坑は近接して立地し、約10mの範囲に集中している。掘り込みが浅く、規模が不明のものが多いが、長軸150cm前後と推測される。平面形は長楕円形～隅丸長方形を呈する。断面形については壁がほぼ垂直に立ち上がるものと開きながら立ち上がるものに分類されるが、掘り込みが浅いため不確定である。底面にはごく緩やかな起伏がみられる。底面には焼けはみとめられないが、焼土・炭化物・灰は底面上で重なるように検出され、廃棄されたものではないと考えられる。出土遺物は多くなく、小片がほとんどである。このような土坑の用途としては土師器焼成や製炭などが考えられるが、残存状況が良好ではなく、遺物も少なく、特定は難しい。これらの土坑の時期は平安時代と考えられるが、出土遺物も少ないため、明確ではない。第135号土坑が第101号円形周溝より新しいことや、第139号土坑の調査区際の土層断面の観察から、重複する溝跡の掘り込み面より土坑の掘り込み面が高いことなどから、周囲の遺構より新しい時期が考えられる。個々の土坑の時期差については、集中して立地すること、土坑どうしの重複がみとめられないことから、断言はできないが、同時存在の可能性が高い。

第106号土坑でも焼土と炭化物が検出されている。しかし、先述の土坑群とは異なり、焼土は堆積土中から検出されたが、炭化物は底面で検出されている。平面形も四隅の明確な長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面及び壁面が焼け、赤変している。このように先述の土坑群とは相違点が多く、異なる用途が想定される。近接する朝日山(3)遺跡でも同様の土坑がまとまって検出されており、同じ用途をもつものと思われる。　（田中）

土坑計測表

番号	図	グリッド	規模(cm)			分類	重複	掲載外遺物			備考
			開口部	底面	深さ			土師器	須恵器	その他	
101	59	AG−34	(113)×(92)	(109)×(81)	15	bv	→SD−102	堆4	堆2	0	
102	56	AC−31	84×77	67×65	33	av	SI−13→	堆2　底1	堆1	0	
105	55	AD−27・28	211×204	150×136	57	avi	SD−118→	0	0	0	
106	61	AG−26	146×124	135×108	33	cvii		堆2	0	0	
107	57	AO・AP−30・31	184×146	157×126	29	bii	SD−135→	堆7　底3	0	堆：鉄滓1	
108	55	AO・AP−31	96×85	91×77	11	av		0	0	0	
109	57	AK・AL−26・27	179×132	147×115	36	biii	→SD−29	堆3	0	0	
110	61	AL・AM−27	(255)×(112)	(251)×(99)	13	cii	SD−29→	0	0	0	
111	57	AL−26・27	184×144	162×120	22	biii		堆4	堆1	0	
117	55	AL・AM−28	118×(112)	81×60	28	aiv	SI−110不明	0	0	0	
118	58	AC−18	(154)×135	141×121	8	biii		0	0	0	
119	58	AU−36	123×97	70×64	31	bv	SI−103→	堆1	0	堆：楕形鉄滓1	
120	56	AB・AC−20	92×86	73×70	22	av	101溝跡→	0	0	0	
121	61	AB−28	193×114	189×64	13	cvi		堆6	堆3	0	

番号	図	グリッド	規模(cm) 開口部	底面	深さ	分類	重複	掲載外遺物 土師器	須恵器	その他	備考
122	63	AS−34	248×(131)	(170)×(104)	28	d	→SD−123・SI−107	0	0	0	SK-122・SD-156で土師器8、須恵器1
123	55	AB・AC−19	138×117	100×96	37	aiv		堆4	堆1 底1	0	
124	57	AC−21	152×94	45×42	35	biii	101墓跡→	0	堆1	0	
125	61	AP−35	(99)×(82)	(89)×(69)	12	cv	SD−153→	0	0	0	
126	61	AO・AP−35・36	(167)×(156)	(158)×(138)	14	cvi	SD−153不明	堆2	堆1	0	
127	58	AC−22	151×106	95×42	37	biii	101号墓跡→	0	0	0	
128	58	AS−35	108×60	85×50	25	biv	→SI−107	0	0	0	
129	56	AS−35	93×86	73×63	18	av	→SI−107	0	0	0	
130	56	AS−35	95×78	80×59	10	av	→SI−107	0	0	0	
131	63	AS−34	(172)×(164)	(169)×(159)	16	d	→SI−107・SD−164	0	0	0	
132	58	AS−35	117×92	107×83	21	biv		0	0	0	
133	60	AC−19	170×65	107×59	43	bvii		堆5	0	0	
134	55	AD−19	128×122	109×95	37	aiv		0	堆1	0	
135	61	AM・AN−39	146×98	140×91	7	civ	101号円形周溝→	堆1	0	0	
136	61	AH・AN−38	(150)×94	(145)×84	6	ciii		堆8	堆3	0	
137	55	AN−38・39	110×108	104×103	13	aiv		0	0	0	
138	57	AR−39・40	216×192	160×131	35	bi	SD−171・181・194・224→	堆11	堆3	0	
139	59	AN−40	(122)×−	不明	15	bv	SD−168→	0	0	0	
140	63	AK−38	(244)×(67)	(168)×(31)	41	d	SI−3不明	0	0	0	
141	56	AP−40	89×83	74×68	26	av		堆1	0	0	
142	60	AQ−40・41	201×111	192×100	13	bvii		堆3	0	0	
143	56	AD−19	81×74	74×66	21	av		堆3	0	0	
144	56	AO−39	75×66	52×47	15	av		0	0	0	
145	56	AU−43	80×78	72×70	12	av	SI−118不明	0	0	0	
146	58	AV−43	126×111	116×102	24	bv	SK−166不明	0	0	0	
147	55	AV・AW−43	142×128	82×70	49	aiv		0	0	0	
148	59	AT・AU−42・43	105×78	93×64	9	bv	SI−118・119不明	底1	0	0	
149	58	AT−42・43	100×63	58×45	29	biv	SI−118・119不明	0	0	0	
150	60	AD−19	(56)×(56)	(52)×(50)	12	bvi		堆1	0	0	
151	59	AT−43	102×74	75×48	19	bv	SI−119不明	0	0	0	
153	59	AT−41	91×58	79×38	14	bvi	SI−121・122不明	0	0	0	
154	60	AT−41	98×75	50×46	18	bvi	SI−121・122不明	堆1	0	0	
155	58	AT−41	118×110	74×67	27	bv	SI−121・122不明	0	0	0	
156	62	AY・BA−46・47	134×110	113×96	17	cvii		0	0	0	
157	59	AY−46	(89)×72	(67)×55	22	bvi		0	0	0	
158	60	AW・AX−43・44	184×96	163×60	21	bvii		堆3	0	0	
160	59	AX−44	106×86	96×65	22	bv		0	0	0	To-a堆積
162	58	AW−42・43	(139)×(68)	(136)×(67)	21	bv	→SD−177	0	0	0	
163	59	AW−42・43	(107)×(40)	(81)×(33)	8	bv	→SD−177	0	0	0	
164	63	AV・AW−41・42	170×(139)	151×(131)	16	d	SD−184→	0	0	0	
165	61	AU−41	85×51	74×40	14	cv	SD−183→	0	0	0	
166	61	AV−42・43	204×112	189×104	13	ci	SK−146不明	0	0	0	
167	60	AS・AT−41	84×69	61×33	20	bvi	SI−121・122不明	堆1	0	0	
168	59	AL−37	不明	不明	22	bv	SR−101不明	堆3	0	0	
170	58	AL−38	132×96	120×86	19	biv		0	0	0	
171	62	AQ−38	88×80	72×64	33	cv	SD−186→	0	0	0	
172	54	BA−47・48	186×176	153×150	30	aii	SI−202→	堆61	堆6	堆:鉄滓2・自然礫多	
173	56	AU−38	94×88	45×44	22	av		0	0	0	
175	55	AT−44	(105)×(35)	(72)×(29)	11	aiv	SI−117→	0	0	0	
176	62	AV−37	111×(76)	97×(67)	18	civ	SD−201→, SI−103不明	0	0	0	
178	59	AW−39・40	68×49	38×23	16	bvi	SI−124不明	0	0	0	
179	59	AK・AL−37・38	92×−	74×−	26	bvi		0	0	0	
181	61	AV−38	148×126	135×95	17	civ	SD−208→, →SD−188	堆1	堆1	0	
182	58	AW−38	132×73	91×52	43	bv	→SD−208	0	0	0	
183	63	AW・AX−42	(403)×(276)	(386)×(231)	18	d	→SD−200, SD−183・184不明	堆2	0	0	
184	63	AX−38	(104)×(49)	(77)×(40)	42	d	SD−209→	堆7	0	0	
185	60	AT−41	63×49	43×30	9	bvi	SI−121・122不明	0	0	0	
186	56	AE−30	81×80	70×66	18	av	SD−160→	0	0	0	
187	61	AU−36	−×62	−×56	10	cv	SI−103→	0	0	0	

第４節　井戸跡

今年度検出された井戸跡は10基である。12年度の調査区をはさんだ、西側の黒褐色土が厚く堆積する谷地形で７基検出されているが、標高の最も低い沢目に沿うように４基が検出され、この北側の谷への落ち際に３基検出された。昨年度報告した６基のうちの５基も沢目をはさんだ南側の谷への落ち際に位置している。調査区の東側からは３基検出されているが、いずれも調査区北寄りに立地し、調査区内の尾根状の高まりを避けて、標高31～32mに構築されている。井戸跡どうしの重複はみとめられないが、住居跡や溝跡と重複しており、同時存在ではなく、時間差があると考えられる。第324集で報告した第１号井戸跡と今回報告する第105号井戸跡の堆積土には白頭山火山灰がみられ、同時存在ではないにしろ、近い時期が想定される。

第101号井戸跡（図64）　AT・AU－36グリッドに位置する。標高は約32mで、周囲に竪穴住居跡や溝跡が構築される遺構密集区域で検出された。第103号竪穴住居跡と重複し、本井戸跡が新しい。開口部114×99cm、底面101×92cmで開口部・底面ともに円形を呈する。深さは250cmで、壁は底面からほぼまっすぐに立ち上がり、開口部付近で大きく開く。底面は中央部が擂り鉢状に凹む。堆積土は12層に分層され、黒褐色土を主体とする。第11・12層は径３～７cmのロームブロックの層で、廃棄時の埋め戻し土と考えられる。底面直上には流入などによる黒褐色土はみとめられない。第９・10層は自然堆積と考えられるが、その上の第８層は堆積状況から埋め戻し土と考えられる。第５～７層は流れ込みなどにより一気に埋没したと考えられるが、各層間には壁の崩落土が存在せず、これらの土は連続した堆積と考えられる。第５層は当時の開口部まで埋めきっていたと考えられるが、土壌の沈下により凹みが生じ、ここに第１～４層が堆積したと考えられる。井戸跡の周囲には143×123cmの方形の掘り込みがあり、井戸跡はこの掘り込みの中央部に位置する。掘り込みの深さは７～17cmで、底面は井戸跡に向かって傾斜する。上屋や井戸を囲む施設などが想定され、これが井戸跡底面に流入土がみとめられない理由と考えられる。遺物は堆積土と底面から土師器片・須恵器片・木製品が出土した。底面から磨滅した土師器片(器種不明)と曲げ物の底板、加工痕のある棒状の木製品と貝が出土している。これらは底面に貼り付いた状態で出土している。貝は水によってカルシウム分が溶けだし皮部分のみが残存していた。残存長は10cmである。この貝はイガイとみられ、片側だけで、表面には殻皮毛が付着している。海水で棲息する貝なので、本遺跡に搬入されたものと考えられる。出土状況から井戸使用開始時の祭祀行為によるものと考えられる。井戸跡から土器や礫・木製品や自然木が出土する事例は多く、本遺跡でも確認されているが、貝が出土したのは県内では初めてとみられる。中世の井戸跡では秋田県の洲崎遺跡で堆積土中にシジミを充填している例がある。このほかに、第12層中から土器と木製品が出土しており、これらは埋め戻し時に埋められたと考えられる。なお、第12層中から出土した木材の放射性炭素年代測定をおこなった(第３章第１節)ので、併せて参照されたい。

(田中)

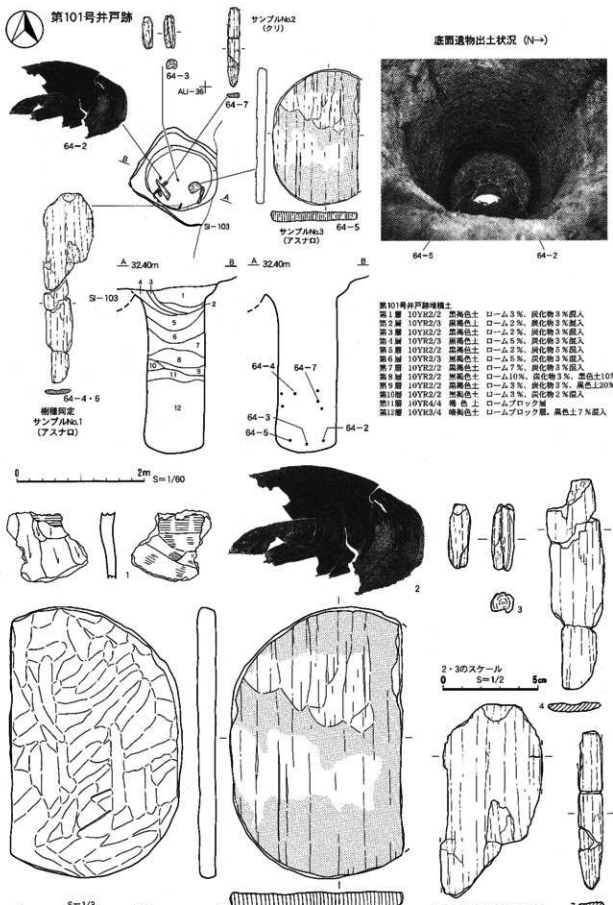


図64　第101号井戸跡

第102号井戸跡（図65）　AG－26グリッドに位置し、第Ⅴ層で確認した。第132号溝跡と重複し、これより古い。開口部径154×82cm、底面径58×46cmで、平面形は開口部は不整楕円形で、底面は楕円形である。深さは87cmで壁は開きながら階段状に立ち上がる。溝跡との重複部分は壊されているものの、A－Bセクションから、開口部は皿状を呈していたものとみられ、第Ⅴ層の黒色土上に58×26cm、厚さ3cmの粘土の薄層が貼り付けられている。底面にはやや丸みがあり、底面付近に湧水地点があって降水が続くとしばらく後まで水が退かない状態である。堆積土は3層に分層された。黒色土と黒褐色土による自然堆積で、第2層には砂粒が多く含まれている。第132号溝跡構築時には本遺構は中腹まで自然堆積した状態であったとみられ、ロームブロックを混入した黒褐色土で埋め戻され、溝跡底面がつくられている。遺物は第1層下位から自然礫が出土したほか、壁に貼りついた状態で土師器甕片1点、堆積土中より土師器甕片6点、須恵器大甕片3点、壷片1点が出土したが、小片のため図示には至らなかった。出土遺物と重複関係から、本井戸跡は平安時代の遺構と考えられる。

第103号井戸跡（図65）　AJ－25グリッドに位置する。緩やかな沢地形のほぼ沢頭にあり、水が集まりやすい環境である。第131号溝跡と重複し、これより新しい。開口部は126×106cm、底面は70×60cmの楕円形を呈し、深さは70cmである。断面形は箱形を呈し、平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は8層に分層され、黒色土と黒褐色土を主体とする。第3～7層は自然堆積の様相を呈するが、第1・2層には粘土や焼土が多く混入するなど、一括して廃棄された可能性がある。出土遺物は、底面及び堆積土下層から礫が3点出土している。図65－1は炭化物の付着した礫で、表面には炭化物の付着前に擦り痕、裏面中央部には敲打痕がみられる。重複関係と出土遺物から、本井戸跡は平安時代の遺構と考えられる。

第104号井戸跡（図66）　AF－27グリッドに位置し、本遺構の60cm西寄りには第105号井戸跡がある。第109・118号溝跡と重複し、これらより古い。開口部は径102×85cm、底面は100×77cmの楕円形を呈し、深さ110cmである。断面形は箱形で、平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は11層に分層された。ロームが多量に混入する層と黒色土または黒褐色土が互層になって堆積している。遺物は自然礫が出土したのみである。隣接する第105号井戸跡と時期的に大きな隔たりはないと考えられることから、本井戸跡が構築されたのは10世紀前後と推定される。

第105号井戸跡（図66）　AE－27グリッドに位置し、第104号井戸跡に隣接する。第118号溝跡と重複し、本遺構が古い。開口部径110cm、底面径86×72cmでほぼ円形を呈し、深さは226cmを測る。底面東側に10cm程度の段が見られる。壁ははじめ垂直に立ち上がり、底面から1/2近くで小さく屈曲して狭まり、底面から3/4の位置で再び屈曲してわずかに開きながら開口部へ至る。堆積土は6層に分層された。第1～4層は黒褐色土が堆積し、白頭山火山灰がブロック状に混入する黒褐色土がレンズ状に堆積し、自然堆積と考えられる。第4層までを除去すると一面に白頭山火山灰の層が現れ、その直上から礫5点が出土した。第5層の白頭山火山灰層は他の土壌を混入しない純粋な火山灰層で、厚さは約1mである。第5層の下位から木製品が出土し始め、第6層はしまりのない泥状の黒褐色土で、堆積土中から加工材8点、土師器甕片2点、須恵器大甕片2点、底面から坏1点が出土した。8

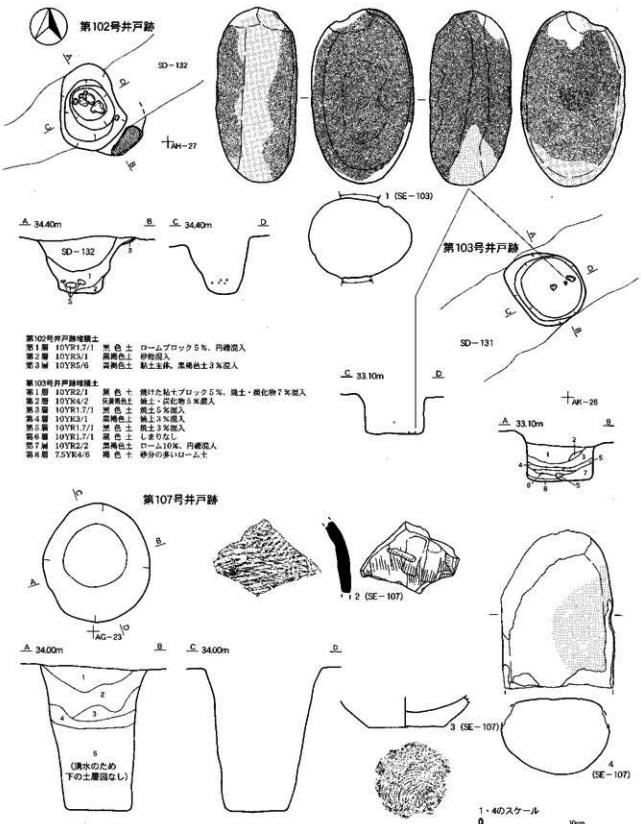


図65　第102・103・107号井戸跡

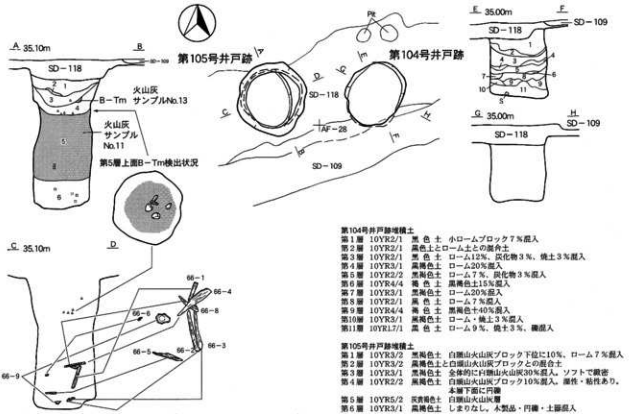


図66　第104・105号井戸跡

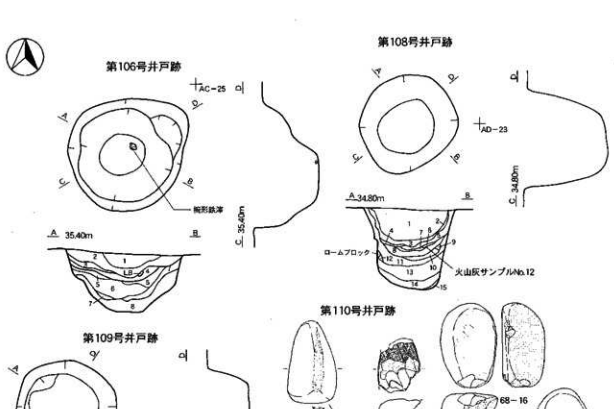
点の加工材については樹種同定をおこなった（第3章第4節参照）。図66－1・4はアスナロの板材で、表裏面が面取りされている。図66－2・3・7・8はクリ、6はモクレン属の割材、5はクリの角材で、2・3・7・8の側縁や先端に加工痕がみられる。白頭山火山灰の堆積状況と出土遺物から、本井戸跡が廃棄されたのは10世紀前半と考えられる。また、純粋な火山灰層が自然の状態で1mも堆積することには若干の疑問が残る。本井戸跡の南側には、畝部分にマーブル状に火山灰を混入する第1号畠跡（第324集 朝日山（2）遺跡Ⅳで報告済）があり、何らかの関連がある可能性がある。

第106号井戸跡（図67）　AC－24グリッドに位置する。開口部が202×180cm、底面が74×64cmで、開口部の北東側が一部突出した円形を呈する。深さは95cmである。壁はほぼ平坦な底面から開きながら上昇し、段を有して突出した部分以外では垂直気味に立ち上がる。北東側の段は平坦で広く、再び開きながら立ち上がる。堆積土は8層に分層され、黒色土と、黒色土や黒褐色土とロームブロックとの混合土が互層になっている。底面から椀形鉄滓が1点出土した。出土遺物から、平安時代の遺構と考えられる。

第107号井戸跡（図65）　AG－22グリッドに位置する。開口部径226cm、底面径100cmの円形を呈し、深さは226cmを測る。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面から約1/3の位置からやや開き気味に開口部に至る。開口部から50cm程度下位をはじめとして数ヶ所に湧水地点があるため、開口部から約1m下までを5層に分層したものの、以下は土層観察をおこなうことができなかった。堆積土は観察できた範囲内では黒褐色土と黒色土を主体とし、第2層以外はロームブロックや自然礫・土器片などを混入し、人為的な堆積状況を示している。出土遺物は、堆積土から土師器甕片3点、坏片1点、須恵器大甕片2点、自然礫19点である。出土遺物から、本井戸跡は平安時代のものと考えられる。

第108号井戸跡（図67）　AC－23グリッドに位置する。開口部は径155×145cmのほぼ円形、底面は94×80cmの楕円形を呈し、深さは131cmを測る。底面には丸みがあり、壁はやや開き気味に立ち上がる。底面近くと開口部から50cm程度下位に湧水地点が点在し、壁がえぐれている。堆積土は15層に分層した。第1層は上位の自然堆積層が落ち込んだものと思われる。第2～13層は黒色土を主体とし、このうち2～10層は焼土と黒色土が互層になっている。第13層は緻密で湿性に富む黒色土である。第14層はローム主体の埋め戻し土である。遺物は出土しなかった。確認面での第1層のプランが他の井戸跡に比べてシャープなことと、第1層が第Ⅰ～Ⅱ層に類似することから、第1層は第2層以下との間に時期差があり、第2層以下の井戸跡堆積土が落ち込んだ後に堆積したものか、後世に掘りなおされた土坑の可能性もあると思われる。第2層以下の堆積土の状況から、平安時代の遺構と考えられる。

第109号井戸跡（図67）　AX－44グリッドに位置する。開口部は径157×150cmのほぼ円形、底面は径110cmの不整円形を呈し、深さは79cmを測る。底面は平坦で、底面から約1/3の位置に段を有してほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は8層に分層され、黒褐色土と、ロームブロックと黒褐色土の混



第106号井戸跡堆積土
第1層　10YR3/2　黒褐色土　ロームブロック12%混入
第2層　10YR2/1　黒　色　土　ローム5%混入
第3層　10YR2/1　黒　色　土　ロームブロック20%混入
第4層　10YR1/1　黒　色　土
第5層　10YR3/1　黒褐色土とロームブロックとの混合土
第6層　10YR2/1　黒　色　土　ローム5%混入
第7層　10YR2/2　黒褐色　土　ロームブロック40%混入
第8層　10YR1.7/1　黒　色　土　ロームブロック15%混入

第108号井戸跡堆積土
第1層　10YR3/2　黒褐色土　ローム2%、炭化物・焼土1%混入
第2層　10YR2/1　黒　色　土　焼土30%混入
第3層　10YR2/1　黒　色　土　焼土5%、炭化物2%混入
第4層　5YR4/6　赤褐色土　焼土主体、黒色土10%、炭化物5%混入
第5層　10YR2/1　黒　色　土　焼土2%混入
第6層　10YR5/2　灰黄褐色土　灰主体、黒色土2%、焼土2%混入
第7層　10YR2/1　黒　色　土と5YR5/6　赤褐色土（焼土）との混合土
第8層　10YR2/1　黒　色　土　炭化物5%、焼土5%混入
第9層　10YR2/1　黒　色　土　炭化物1%、焼土2%混入
第10層　10YR2/1　黒　色　土と2.5YR4/8　赤褐色土（焼土）との混合土　炭化物10%混入
第11層　10YR2/1　黒　色　土　ローム5%、炭化物5%、焼土1%混入
第12層　10YR2/1　黒　色　土　ローム5%、ロームブロック1%混入
第13層　10YR1.7/1　黒　色　土　ローム5%、焼土1%混入
第14層　10YR5/4　にぶい黄色土　ローム土主体
第15層　10YR2/1　黒　色　土　ローム1%混入

第109号井戸跡堆積土
第1層　10YR2/2　黒褐色土　小ロームブロック10%、黒色土7%、炭化物7%、焼土2%混入
第2層　10YR3/2　黒褐色土　黒色土20%、ローム7%混入
第3層　10YR3/2　黒褐色土　ロームブロック12%、炭化物5%混入
第4層　10YR5/6　黄褐色土　黒褐色土40%混入
第5層　10YR3/2　黒褐色土　ローム7%、小ロームブロック3%混入
第6層　10YR2/1　黒　色　土　小粒土ブロック30%混入
第7層　10YR4/4　褐　色　土　黒褐色土20%（層下位に多い）混入
第8層　10YR2/2　黒褐色土　ローム7%混入、粗性あり

第110号井戸跡堆積土
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム3%、ロームブロック1%、炭化物3%、焼土2%混入
第2層　10YR2/3　黒褐色土　ローム5%、炭化物2%、焼土1%混入
10YR2/3　黒褐色土とロームとの混合土　炭化物1%混入
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム3%、炭化物3%、焼土2%、粘土1%混入
第4層　10YR3/1　黒褐色土　ローム7%、炭化物5%混入
第5層　10YR5/8　黄褐色土　黒褐色土40%混入
第6層　10YR4/2　灰黄褐色土　粘土質
第7層　10YR4/6　褐　色　土　黒褐色土30%混入、崩れやすい
第8層　10YR3/3　暗褐色土　ローム10%、焼土5%混入、粉分有、しまりなし

図67　第106・108～110号井戸跡

合土とが互層になる人為堆積の様相を呈する。遺物は出土しなかった。堆積土の状況から、平安時代の遺構と考えられる。

第110号井戸跡（図67・68）　AY－42グリッドに位置する。第128号竪穴住居跡と重複し、これより古い。開口部は112×98cm、底面は90×76cmの楕円形を呈する。住居跡確認面からの深さは197cmである。底面は平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は８層に分層した。暗褐色土・黄褐色土・黒褐色土の順に土が投げ込まれた人為堆積である。完全に埋め戻した後、住居跡の床構築土を貼り付けて住居跡床面として利用している。井戸内の堆積土が沈下したため住居跡の床面構築土層も沈み、セクション図のような窪みになってしまったものである。出土遺物は、堆積土中から土師器甕片21点、坏片４点、須恵器大甕片２点、壷片２点、坏片２点、砥石１点、敲磨器２点、自然礫27点、底面から土師器甕片１点、鉢片１点、須恵器大甕片１点、羽口１点、炭化物の付着した礫１点、自然礫10点で、遺物は第３層以下～底面からまんべんなく出土した。このうち図68－１は井戸底面から出土した耳皿で、欠損して明瞭ではないものの口縁部両側を軽くすぼめている。図68－３・４はヘラ記号のみられる土師器坏で、色調や器壁の厚さから同一個体と思われる。３の内面は火ハジケで剥落しており、３・４ともに磨滅している。図68－８は土師器甕の底部で、底面から５cmの高さで切断されている。底部は半分程度剥落しているが、残存する部分には厚さ１mm程度の煤状炭化物が付着している。内面にも一部付着がみられることから、カマドの支脚などに使われたものを廃棄した可能性がある。重複関係、出土遺物から、本井戸跡が廃棄されたのは10世紀前半と考えられる。　（水谷）

井戸の廃棄について　12・13年度の調査で検出された井戸跡は17基である。堆積状況は埋め戻し、または埋め戻し土沈下後の自然堆積がほとんどである。遺物が出土しない井戸跡は２基(108・109)で、他からは土師器・須恵器・木製品・礫などが出土する。遺物は底面・埋め戻し土・自然堆積層から出土するが、底面・埋め戻し土出土遺物は開井時・埋井時の祭祀行為によるものと考えられる。遺物は埋め戻し土からの出土が多く、土師器・須恵器・木製品・礫(礫石器・焼けた礫・自然礫)が出土し、底面からはこの他に羽口・椀形滓・貝が出土する。土師器・須恵器は破片が多く、復元できるものは少ない。完形の土器は第４号井戸跡から出土したミニチュア土器だけである。部位では、土師器は底部が多く、須恵器は胴部が多い。木製品は曲げ物が２点出土しているが、他は板材・割材などの一部に加工痕をもつ木材が圧倒的多数を占め、なかには自然木もみられる。井戸跡出土の遺物には被熱したり、炭化物が付着するものが多く、礫だけでなく、土師器や須恵器にも炭化物が付着したり、火ハジケがみられるものがある。遺物の種類は個々の井戸跡で異なり、数種類が組み合わさされている。底面または埋め戻し土からのみ遺物が出土する井戸跡と両方から出土する井戸跡がある。出土遺物や出土状況の違いは時期差による可能性も考えられるが、祭祀行為は長期間にわたり継承されるもので、短い時間内(概ね10世紀代の100年間)での変化は祭祀行為そのものの変化とは捉え難く、このようにみてみると、本遺跡における井戸に関する祭祀は厳密ではなく、大まかな原則に従いおこなわれていたと推測される。　（田中）

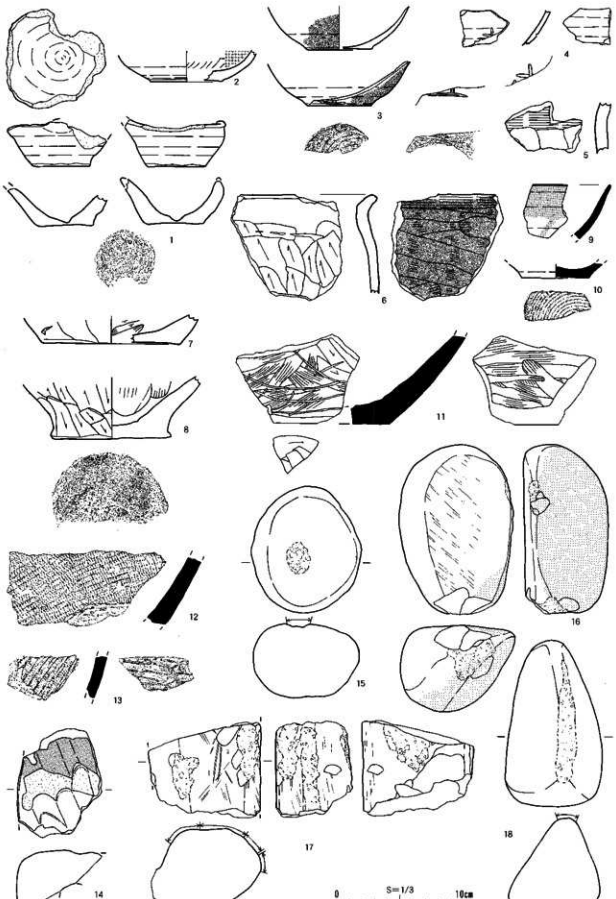


図68　第110号井戸跡出土遺物

第5節　溝跡

検出された溝跡は102条で、堆積土や出土遺物から、大半が平安時代のものと考えられる。調査区北側では谷地形となるため、谷筋に沿うように等高線に直交する溝跡が多く、調査区南東部では緩やかな東斜面となるため、等高線に平行する溝跡が多い。特に標高33.5～34.0mの等高線の間隔がやや狭くなる部分には何条もの溝が繰り返し構築されている。このようにみてみると、多くの溝跡は水をよけたり、効率よく排水するために構築されたものと考えられる。また、調査区を横断する長い溝跡が検出されているが、区画溝の役割をもつ可能性もあると考えられる。溝跡により囲まれた複数の住居跡は、何らかの関連性をもつと考えられ、溝は水よけ・排水をおこなうだけでなく、これらを他から区画していたと推測される。

次の溝跡は最終的に竪穴住居跡や掘立柱建物跡の付属施設と判断されたため、ここでは取り上げず、各項で記載している。

第158～162号溝跡→第13号竪穴住居跡、第113号溝跡→第103号竪穴住居跡、第124a・145号溝跡→第107号竪穴住居跡、第124b・136号溝跡→第111号竪穴住居跡、第157号溝跡→第104号竪穴住居跡、第170号溝跡→第119号竪穴住居跡、第171号溝跡→第122号竪穴住居跡、第176号溝跡→第122号竪穴住居跡、第183～185・190・191・216号溝跡→第124号竪穴住居跡、第194・201号溝跡→第126号竪穴住居跡、第200号溝跡→第128号竪穴住居跡、第126・127号溝跡→第104号掘立柱建物跡

また、平成12年度調査の第8号溝跡は第3号竪穴住居跡の項に記載している。

調査の結果、近現代のものと判明したものや同一の溝跡と判断したものなどは欠番にした。欠番とした遺構番号は106・108・110～112・121・122・133・134・138・140・143・144・146・148・149・151・155・156・163・166・173・178・179・182・193・196・202・210・214・216である。

昨年度調査の第9・29号溝跡は本報告書に掲載した。今年度調査の第217～220号溝跡は平成14年度調査の遺構と合わせて報告予定である。

紙数の都合上、個別の記述を避け、特徴のあるものについてのみ記述した。個々の溝跡の位置・規模等については計測表を参照されたい。なお、表中の記載については「第3節　土坑」に準じている。

第29号溝跡（図70）ほぼ東西にのびる長さ10.3mの直線状の溝跡で、等高線に斜交する。幅は40～50cmとほぼ一定で、深さは4～23cmで、底面は東に傾斜する。土坑数基と重複するが、本溝跡の北側には住居跡がみられないことから、居住域を区画するための溝の可能性が考えられる。

第105・119号溝跡（図70）これらの溝跡はそれぞれに番号を付したが、第105号溝跡の北西の延長線上に第119号溝跡、さらにその北西の延長線上に平成14年度に調査を行った第291号溝跡が位置し、3条とも溝幅が類似することから、同一の溝跡の可能性がある。このうち、第119号溝跡末端までの総延長は15.6mである。

第109号溝跡（図71）第Ⅲ層上面で確認した。重複する全ての遺構より新しい。堆積土は単層でソフ

トな黒色土～黒褐色土で、他の遺構堆積土よりブランがはっきり確認できる。隣接する第118号溝跡とは溝の形態、堆積土中及び底面に土師器・須恵器のほか自然礫が多数出土する点で類似することから、同様の用途をもってつくられたと考えられる。

第114・197～198号溝跡（図73）第114号溝跡は第Ⅳ層上面で溝状にのびる白頭山火山灰の範囲として確認した。南側では火山灰の下で掘り込みを確認できたが、北側では確認できなかった。本溝跡は等高線にほぼ平行で、南端から約３mで緩やかに屈曲し、平面形はくの字状を呈する。掘り込みを確認できた部分の長さは6.8mであるが、火山灰によって確認できた全長は16.0mである。断面形はV字状を呈し、堆積した火山灰の厚さは８cmにも及ぶ。火山灰層には黒褐色土の筋状の混入がみとめられ、二次堆積によるものと考えられる。火山灰検出面から環状鉄製品と筒状鉄製品が出土している。第197～199号溝跡はほぼ南北に平行してのびる溝跡で、第114号溝跡とも平行で、最も西側に位置する第198号溝跡と第114号溝跡との間隔は1.2mである。３条とも幅約20～30cmで、AQ－37グリッドの南側では深さ10～20cm、断面形は半円状または浅いU字状を呈する。ただし、第198号溝跡は中央部分では幅40cm、北側部分では深さ30～40cmで、部分的に幅が広く、深くなっている。第198号溝跡は検出できた長さは9.3mであるが、Ⅰ－Jセクションでも断面が確認されており、全長は10m以上と推測される。第197～199号溝跡のそれぞれの間隔は第197・198号溝跡間が約1.6m、第198・199号溝跡間が約2.6mである。第198号溝跡の検出面にも部分的に白頭山火山灰がみとめられ、これらの溝跡は白頭山火山灰降下以前のものと考えられる。

第120・139号溝跡（図74）２条とも等高線に平行な、ほぼ南北にのびる直線状の溝跡で、対になる可能性がある。第120号溝跡は検出された長さは15.7mである。底面に深さ12～26cmのピットが検出された。本溝跡の北側の延長線上にもピットが連続しており、ピットを含めた長さは22.4mとなる。第139号溝跡は長さ10.6m、幅10～30cm、深さ３～16cmである。また、第120号溝跡にやや斜交する方向にのびる柱穴列が検出されている。柱列は４間で、総長10.6m、柱間距離はピット１・２間が1.4mである以外は2.6～2.7mでほぼ一定である。柱穴の掘り方は径22～28cmの円形あるいは隅丸方形で、深さはピット１が17cmと浅い以外は約40cmでほぼ一定である。２条の溝跡の東側には第104・107・108・111号竪穴住居跡と外周溝・これ以外の溝跡が密集しているが、西側は遺構が疎らで、居住域を区画する溝(柵列)と考えられる。２条の溝跡は同時存在の可能性が考えられるが、柱穴列はやや異なる方向にのび、時期が異なり、柵列の建て替えが行われたと考えられる。第120号溝跡は第114号溝跡の白頭山火山灰を掘り込んで構築されており、白頭山火山灰降下以後の構築と考えられる。

第115号溝跡（図72）　今年度の調査区内に入っているのは溝跡の末端部のみで、土層図で第291号溝跡と重複する地点が辛うじてとらえられているものの、その重複関係は判然としない。堆積土は３層に分層され、黒色土が堆積する。平成14年度の調査によって、白頭山火山灰を切る遺構より新しいことがわかっており、本遺構の年代は10世紀前葉以降と考えられる。

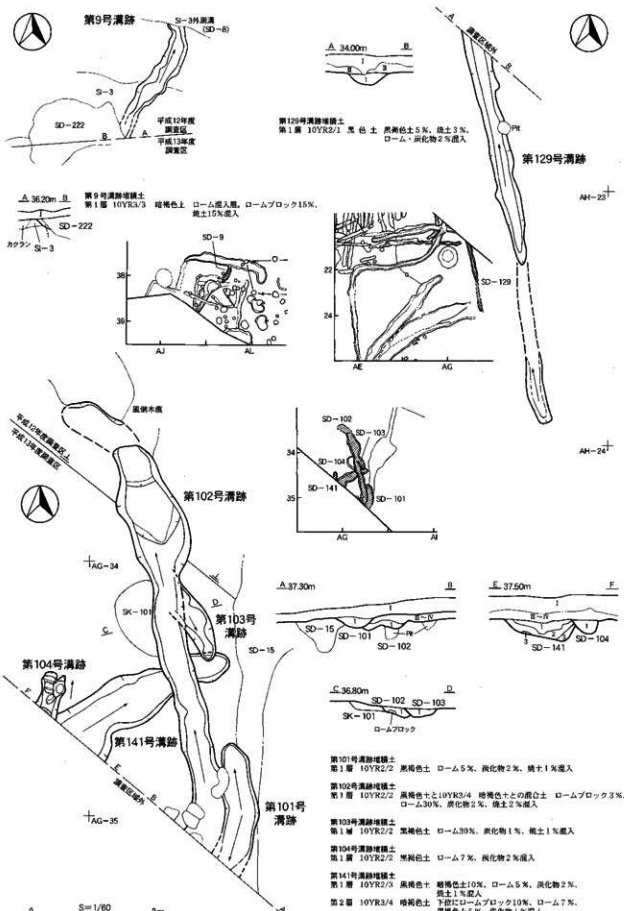


図69　第9・101～104・129・141号溝跡

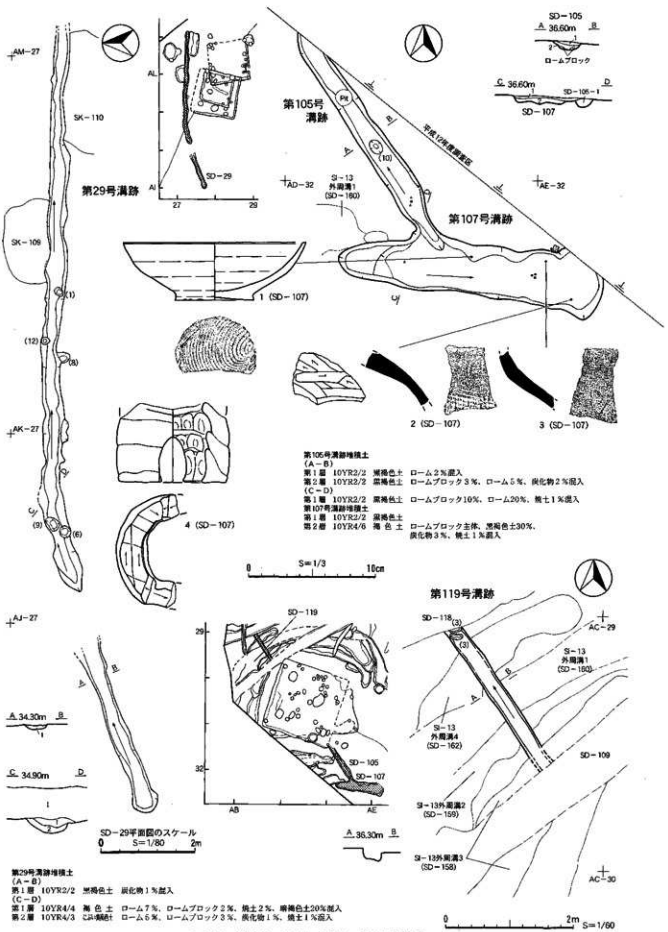


図70　第29・105・107・119号溝跡

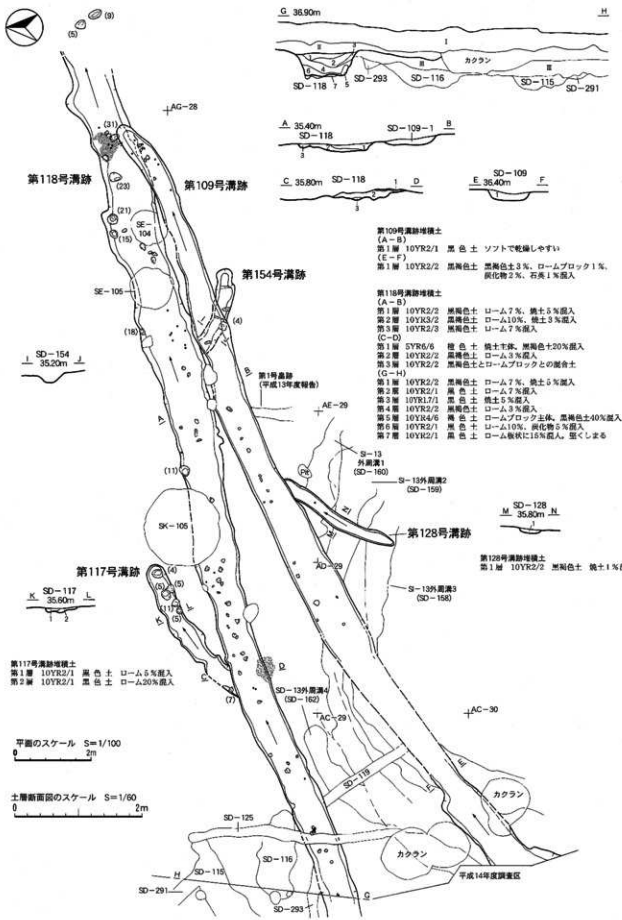


図71 第109・117・118・128・154号溝跡

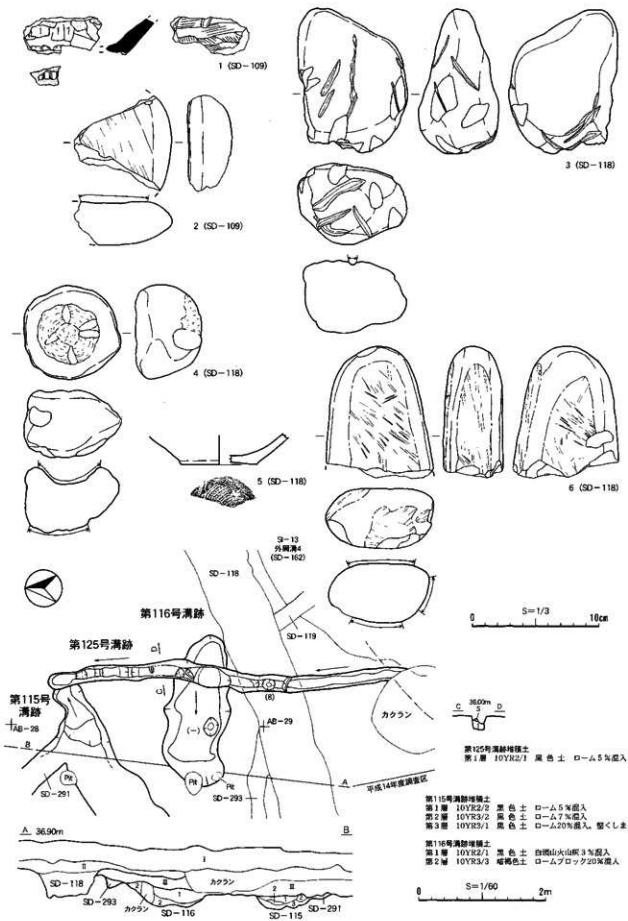


図72　第115・116・125号溝跡、第109・118号溝跡出土遺物

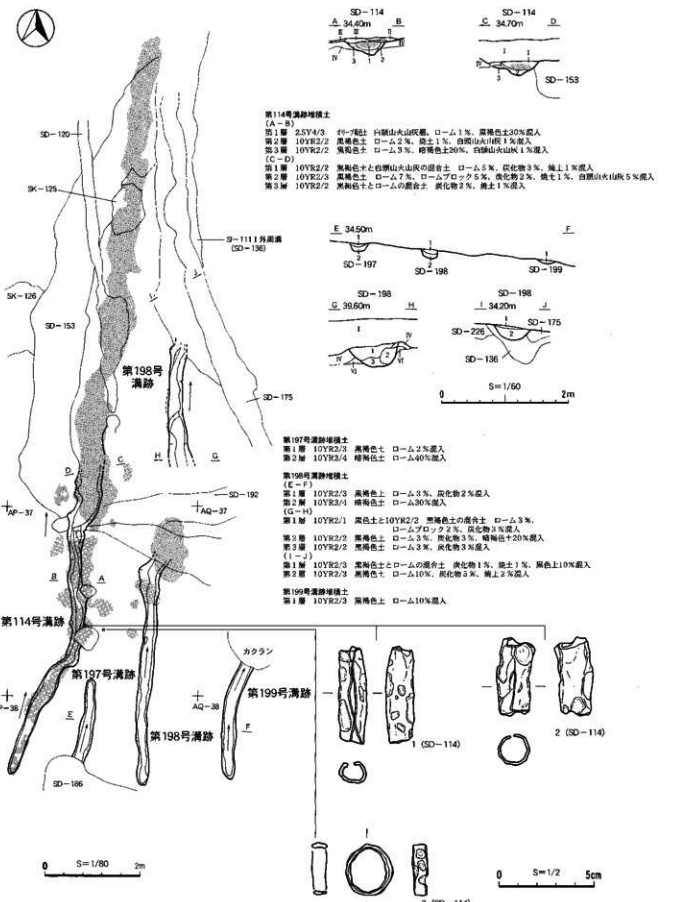


図73　第114・197～199号溝跡

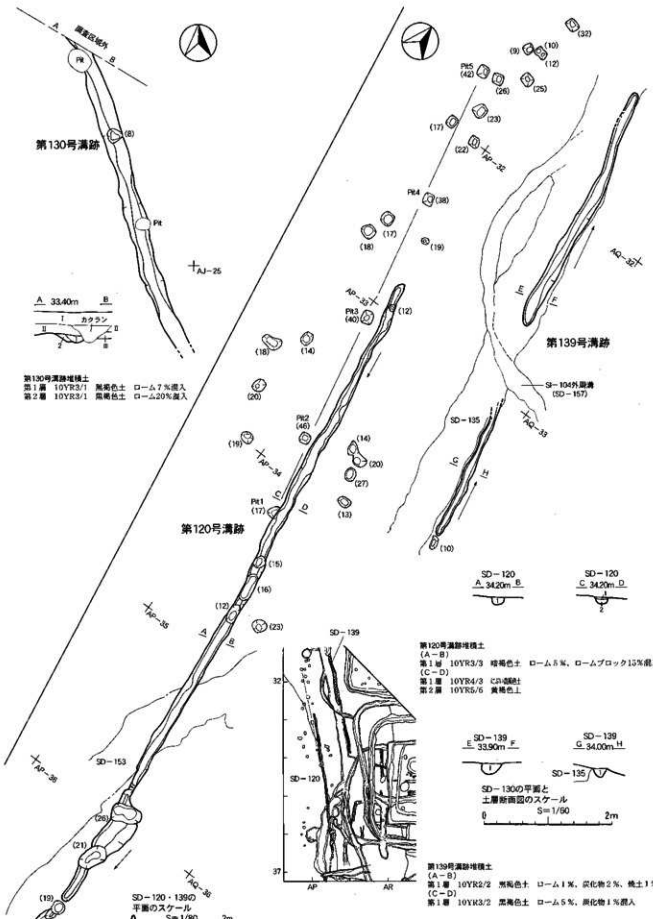
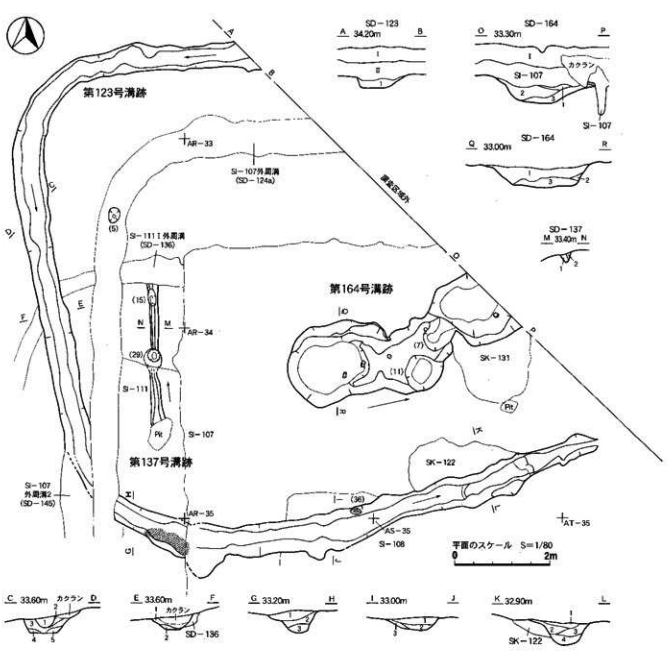


図74　第120・130・139号溝跡



第123号溝跡堆積土
(A－B)
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム5％、炭化物1％混入
(C－D)
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック10％、ローム5％混入
第2層 10YR5/6 黄褐色土 炭化物1％、黒褐色土5％混入
第3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム5％、炭化物1％、黒色土混入
第4層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3％、炭化物1％混入
第5層 10YR5/6 黄褐色土 褐色土20％、炭化物1％混入
(E－F)
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム3％、炭化物5％混入
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム15％、炭化物2％混入
(G－H)
第1層 10YR4/3 暗褐色土 ロームブロック25％、粘土ブロック30％、炭化物2％、焼土1％混入
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ローム15％、炭化物3％混入
第3層 10YR3/3 暗褐色土 ローム20％、炭化物5％混入
(I－J)
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム10％、粘土5％混入
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム7％、炭化物2％、粘土2％混入
第3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム7％、炭化物2％混入
(K－L)
第1層 10YR3/2 黒褐色土 ローム7％、炭化物3％混入
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ローム5％混入
第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム10％、粘土ブロック5％、炭化物2％混入
第4層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック10％、粘土ブロック10％混入

第137号溝跡堆積土
第1層 10YR4/4 褐色土 ローム15％、炭化物1％混入
第2層 10YR4/6 褐色土 ローム質土塁、炭化物1％混入

第164号溝跡堆積土
(O－P)
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム7％、炭化物2％、焼土1％混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土 ローム15％、炭化物3％、焼土1％混入
第3層 10YR4/3 にぶい褐色土 ローム3％、炭化物1％混入
(Q－R)
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック25％、炭化物2％混入
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ローム15％混入
第3層 10YR4/3 にぶい褐色土 ローム3％、炭1％混入

図75　第123・137・164号溝跡

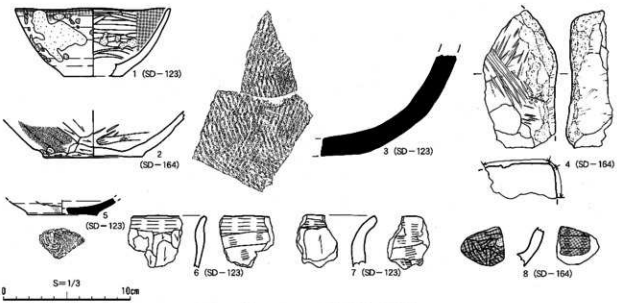


図76　第123・164号溝跡出土遺物

第118号溝跡（図71）西側の調査区際付近で最も残存状態がよく、セクションG－Hでは溝跡の断面形は逆台形状を呈し、底面は厚さ5cm程度の貼り土で平坦に整えられている。堆積土は黒褐色土と黒色土を主体とし、堆積土中・下位及び底面から土師器・須恵器と多数の自然礫が出土した。図72－3は軽石製の粗砥とみられる。図72－4は安山岩製で、中央を削って凹ませ、裏面も平坦になるよう打ち欠いており、形状は容器状を呈する。付着物は見られず、用途は不明である。

第123号溝跡（図75）第123号溝跡は平面形は東側が開口するコの字状を呈し、北側の端部は調査区外にのびる。住居跡に付属する外周溝に類似する。南北は10.8mを測る。底面は北から南に向かって傾斜している。断面形は逆台形状～U字状で、堆積土は黒褐色土を主体とするが、ロームの混入が多い。本溝跡の内側には第131号土坑、第137・164号溝跡のほかピット数基が検出されている。本溝跡は南西隅で第107号竪穴住居跡外周溝2(第145号溝跡)と重複し、本溝跡が古い。溝の廃棄後、第107号住居跡構築時に本溝跡の南側を付け替え、外周溝を構築したと考えられる。

第131号溝跡（図77）北側の調査区際に位置し、確認面の標高は33.3mで今年度の西側の調査区のうち最も低い。南西から北東方向へ向かう緩やかな沢地形の沢頭にあたり、雨が続くと周囲の住居跡の外周溝や溝跡に流れ込んだ雨水が集積する。第Ⅴ層が厚く堆積し、調査区際のセクションから溝跡の断面形は深さ38cm程度の逆台形状を呈する。堆積土は9層に分層され、中位まで自然堆積したところで厚さ20cm程度でのローム主体土・焼土・灰が大量に廃棄され、その廃棄土を切るかたちで第103号井戸跡が構築されている。

第135号溝跡（図78）AP－30～34グリッドに位置し、本溝跡の東側には第107・108・111号竪穴住居跡のほか溝跡などが密集している。南側は第111Ⅰ号住居跡外周溝と重複し、北側は調査区外にの

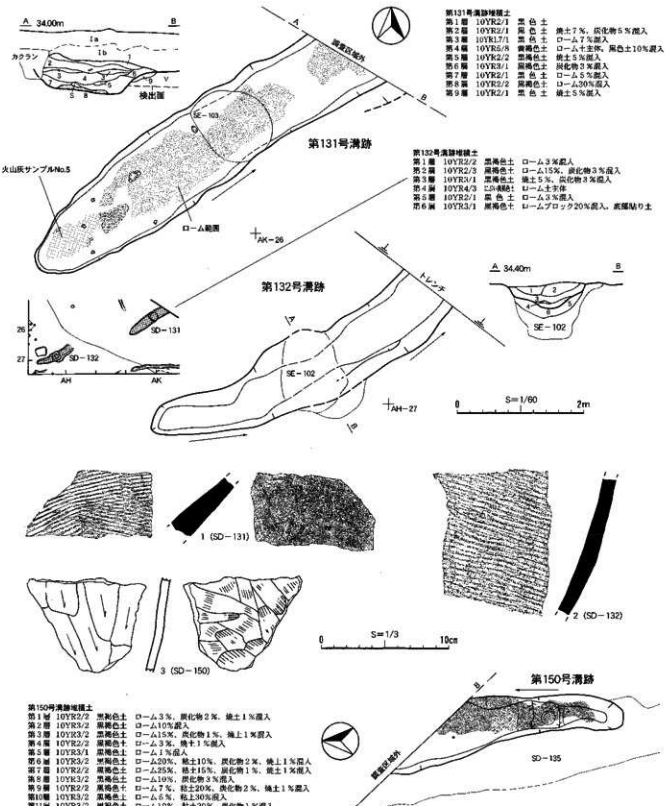
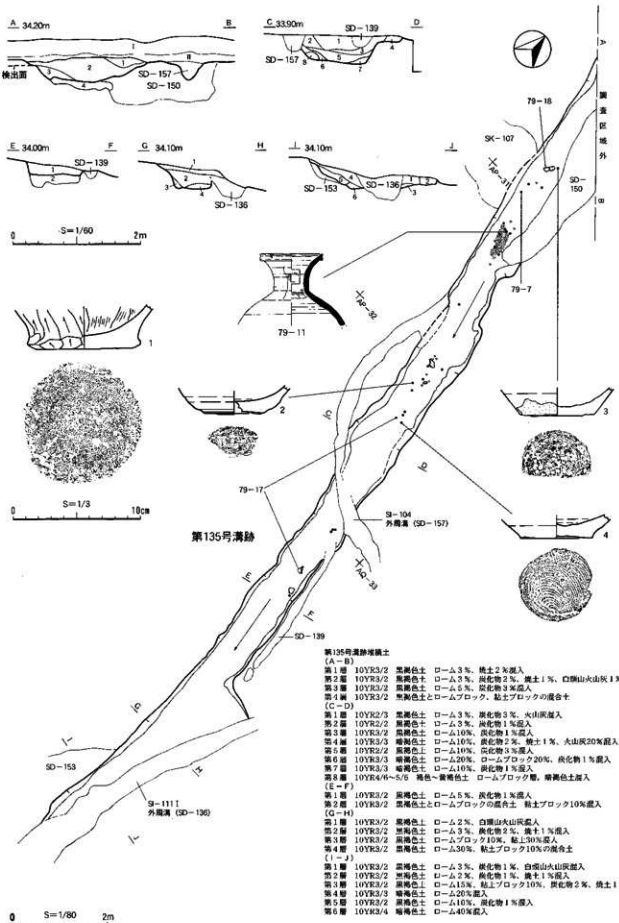


図77　第131・132・150号溝跡



第135号溝跡堆積土
（A－B）
第1層　10YR3/2　黒褐色土　ローム3％、焼土2％混入
第2層　10YR3/2　黒褐色土　ローム3％、炭化物2％、焼土1％、白頭山火山灰1％混入
第3層　10YR3/2　黒褐色土　ローム5％、炭化物3％混入
第4層　10YR3/2　黒褐色土とローム ブロック、粘土ブロックの混合土
（C－D）
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム3％、炭化物3％、火山灰混入
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ローム3％、炭化物1％混入
第3層　10YR3/2　黒褐色土　ローム10％、炭化物1％混入
第4層　10YR3/3　暗褐色土　ローム10％、炭化物2％、焼土1％、火山灰20％混入
第5層　10YR2/2　黒褐色土　ローム10％、炭化物3％混入
第6層　10YR3/3　暗褐色土　ローム20％、ロームブロック20％、炭化物1％混入
第7層　10YR3/3　暗褐色土　ローム10％、炭化物1％混入
第8層　10YR4/6～5/6　褐色～黄褐色土　ロームブロック層、暗褐色土混入
（E－F）
第1層　10YR3/2　黒褐色土　ローム5％、炭化物1％混入
第2層　10YR3/2　黒褐色土とローム ブロックの混合土　粘土ブロック10％混入
（G－H）
第1層　10YR3/2　黒褐色土　ローム2％、白頭山火山灰混入
第2層　10YR3/2　黒褐色土　ローム3％、炭化物2％、焼土1％混入
第3層　10YR3/2　黒褐色土　ローム ブロック10％、粘土30％混入
第4層　10YR3/2　黒褐色土　ローム30％、粘土ブロック10％の混合土
（I－J）
第1層　10YR3/2　黒褐色土　ローム3％、炭化物1％、白頭山火山灰混入
第2層　10YR3/2　黒褐色土　ローム2％、炭化物1％、焼土1％混入
第3層　10YR3/2　黒褐色土　ローム15％、粘土ブロック10％、炭化物2％、焼土1％混入
第4層　10YR3/3　暗褐色土　ローム20％混入
第5層　10YR3/2　黒褐色土　ローム10％、炭化物1％混入
第6層　10YR3/4　暗褐色土　ローム40％混入

図78　第135号溝跡

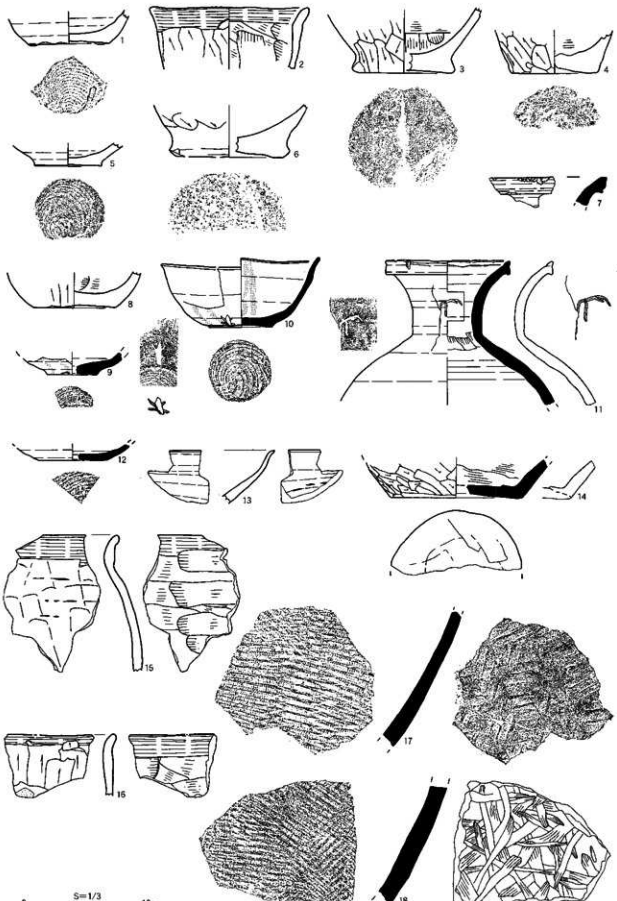


図79　第135号溝跡出土遺物（1）

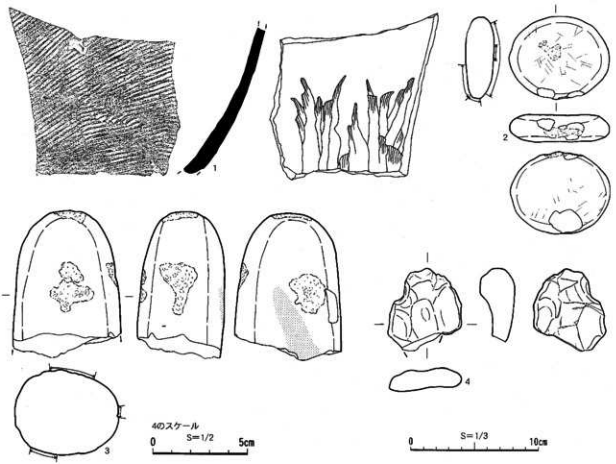


図80　第135号溝跡出土遺物（2）

び、検出された長さは19.2mを測る。南北にのびる直線状の溝跡で、溝跡の南側では等高線に対して平行であるが、北側では斜交する。幅は80cmでほぼ一定であるが、南端では東壁がほぼ直角に屈曲し、幅が広がるようである。深さは20～60cmで、断面形は逆台形状を呈する。底面には部分的にロームブロックや黒褐色土とロームブロックの混合土が貼られている。堆積土はローム・焼土・炭化物が混入する黒褐色土を主体とし、堆積状況からは土砂の流れ込みによる埋没と考えられる。遺物は底面から土師器甕5点、堆積土から土師器坏7点・甕138点、須恵器坏3点・壺10点・大甕13点が出土している。須恵器坏は第101号井戸跡上層から出土したものと接合した。

第142号溝跡（図81）第104号竪穴住居跡土層断面で確認されたが、重複により平面的に捉えることはできなかった。土層断面での幅は60cm、深さは34cmである。

第147号溝跡（図81）本溝跡は第107号竪穴住居跡西側に位置する。ほぼ南北に直線状にのびるが、北端は西にそれ、平面形はＪ字状を呈する。重複により北側は不明であるが、幅は52～78cmでほぼ一定である。本溝跡が構築されている場所は住居跡の密集区域で、本溝跡の方向と軸方向が同じ住居跡があり、住居の一部だった可能性も考えられる。

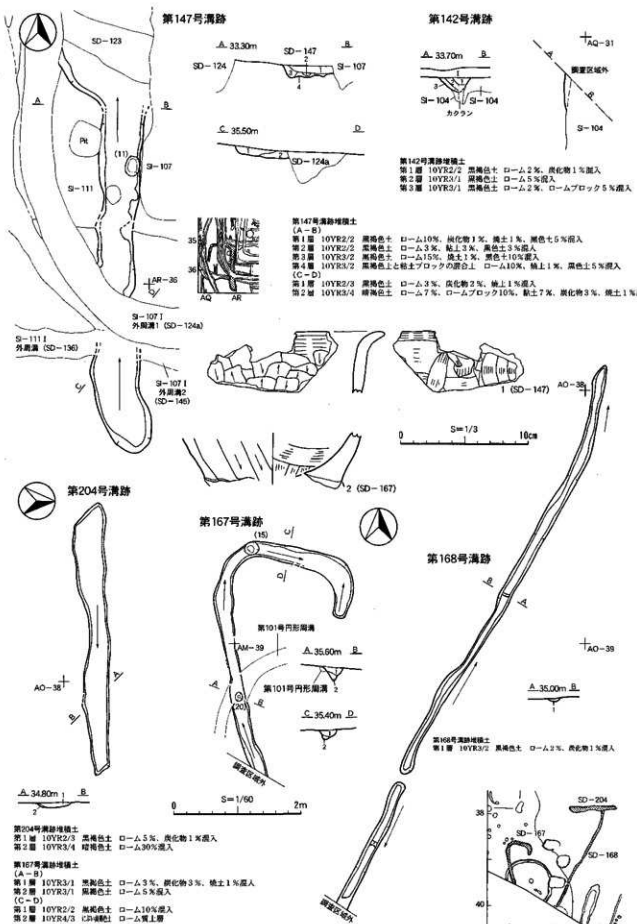
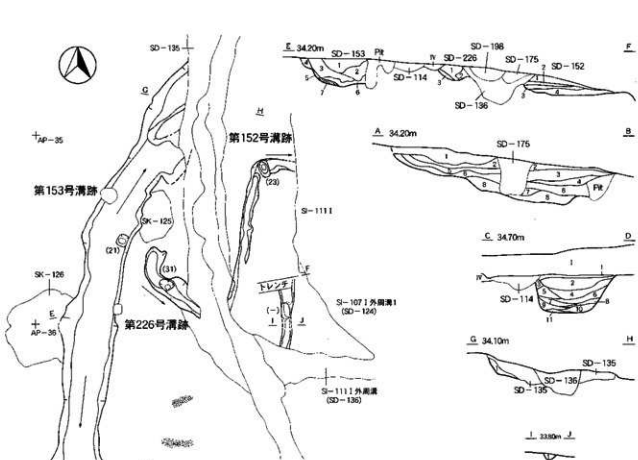


図81　第142・147・167・168・204号溝跡



第152号溝跡堆積土

(E－F)

第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム10%、炭化物2%混入
第2層　10YR2/3　黒褐色土と10YR3/4　暗褐色土の混合土　ローム15%、炭化物2%、焼土1%混入
第3層　10YR2/3　黒褐色土と10YR3/4　暗褐色土の混合土　ローム30%、炭化物3%、焼土5%混入
第4層　10YR2/3　黒褐色土と10YR3/4　暗褐色土の混合土　ローム40%、炭化物5%、焼土10%混入

(I－J)

第1層　10YR4/6　褐 色 土　ローム10%、炭化物2%、焼土5%、黒褐色土5%混入

第153号溝跡堆積土

(A－B)

第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム1%、ローブブロック3%、炭化物1%、暗褐色土5%混入
第2層　10YR3/3　暗褐色土　ローブブロック3%、黒褐色土5%混入
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローブブロック15%、十和田a火山灰混入
第4層　10YR2/2　黒褐色土　ローブブロック2%、黒色土5%混入
第5層　10YR2/2　黒褐色土
第6層　10YR2/2　黒褐色土　ローム1%、ローブブロック5%混入
第7層　10YR3/4　暗褐色土　ローム1%、黒褐色土30%混入
第8層　10YR2/2　黒褐色土　ローブブロック20%、十和田a火山灰混入

(C－D)

第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム5%、炭化物3%、焼土1%、白頭山火山灰3%、黒色土5%混入
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ローム15%、炭化物2%、黒色土5%混入
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム2%、ローブブロック5%、炭化物2%、白頭山火山灰5%混入
第4層　10YR2/2　黒褐色土　ローム5%、炭化物3%混入
第5層　10YR2/2　黒褐色土　ローム3%、炭化物5%、黒色土20%混入
第6層　10YR2/2　黒褐色土　ローム7%、炭化物2%、焼土1%、黒色土7%混入
第7層　10YR2/1　黒 色 土　ローム5%、炭化物3%、黄褐色土10%混入
第8層　ローム層　炭化物2%、黒色土5%、暗褐色土混入
第9層　10YR2/1　黒色土とロームの混合土　炭化物3%、黒褐色土混入
第10層　10YR2/1　黒色土とロームの混合土　炭化物2%、焼土1%混入
第11層　ロームブロック層　炭化物3%、火山灰1%、黒色土10%、暗褐色土10%混入

(E－F)

第1層　10YR2/3　黒褐色土と10YR3/4　暗褐色土の混合土　ローム15%、炭化物3%、焼土1%混入
第2層　10YR2/3　黒褐色土　ローム5%、炭化物2%混入
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム2%、炭化物2%、焼土1%、暗褐色土混入
第4層　10YR3/4　暗褐色土　ローム3%、褐色土混入
第5層　10YR3/4　暗褐色土と10YR4/6　褐色土の混合土　ローム2%、黒褐色土混入
第6層　10YR2/2　黒褐色土と　暗褐色土　焼土の混合土　ローム3%、炭化物2%、焼土1%、黒色土混入
第7層　粘 土 層　焼土3%、暗褐色土混入
(G－H)
第1層　10YR3/2　黒褐色土　ローム5%、炭化物1%混入

第226号溝跡堆積土

第1層　10YR3/4　暗褐色土と10YR2/2～2/3　黒褐色土の混合土　ローム2%、炭化物1%混入
第2層　10YR3/4　暗褐色土と10YR4/6　褐色土の混合土　炭化物2%、黒褐色土10%混入
第3層　10YR3/4　暗褐色土と10YR4/6　褐色土の混合土　炭化物1%、黒褐色土混入

図82　第152・153・226号溝跡

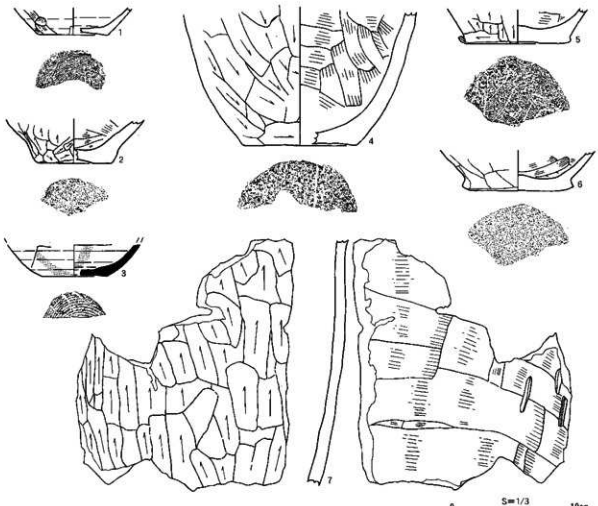


図83　第153号溝跡出土遺物

第152・153号溝跡（図82）第153号溝跡は平面形L字状を呈する溝跡で、西側8.8m、南側8.3m、総長は17.1mである。幅は西側では80～100cmでほぼ一定であるが、南側では50～140cmと振幅が大きい。底面は南側では西から東に、西側では中央部がやや高く、それぞれ北と南に傾斜している。断面形は箱形～逆台形状を呈する。堆積土は黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。A－Bセクション第3層上面で硬化面が検出され、溝がある程度埋没した時点で踏み固めるなどして底面を作り直していると考えられる。堆積土に十和田ａ火山灰とみられる火山灰が混入し、白頭山火山灰が堆積する第114号溝跡より古いことから、十和田ａ火山灰降下前後の溝跡と考えられる。本溝跡の内側には第152・226号溝跡が検出された。第152号溝跡は第111号竪穴住居跡と第175号溝跡に挟まれた部分で検出された。東壁は削平と重複により検出されなかった。北西隅はほぼ直角に曲がり、西壁と北壁直下に幅20～30cm、深さ3～19cmの溝状の落ち込みが検出されている。また、西壁から1.3m東側に幅20～28cmの溝状の落ち込みが検出されているが、これが東壁直下を巡るものかは不明である。堆積土は4層に分層され、第3層以下は黒褐色土とロームの混合土で、人為堆積か掘り方を有していた可能性が考えられる。北西隅が直角に曲がることや壁直下に溝状の落ち込みを有するところから住居跡の一部の可能性も考えられるが、全体を検出できなかったため、不明としておく。また、第153号溝跡内側ではこのほかにも焼土と粘土の集積が検出されており、何らかの建物に付属する外周溝の可能性もある。

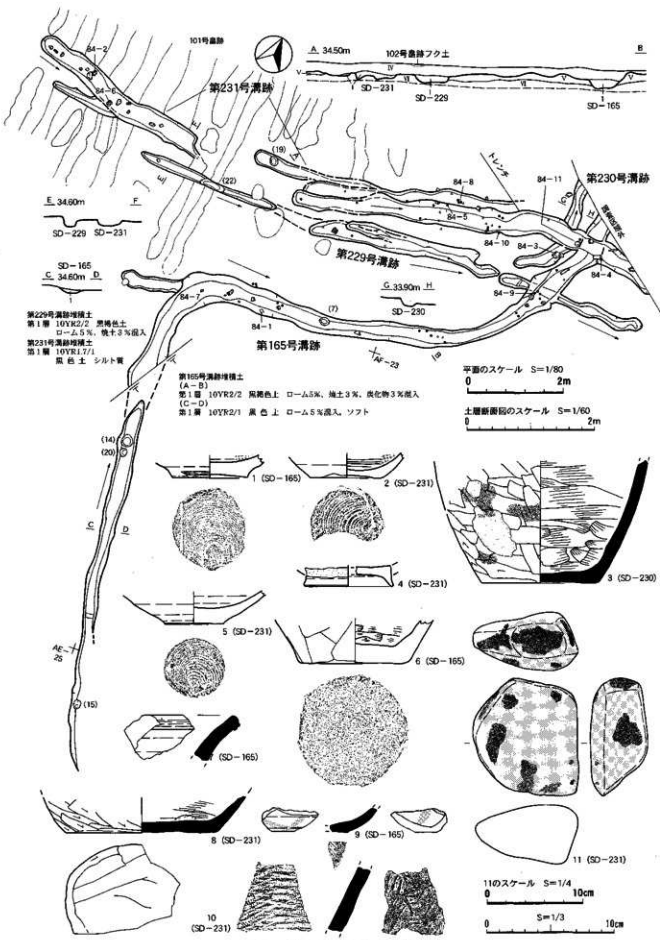
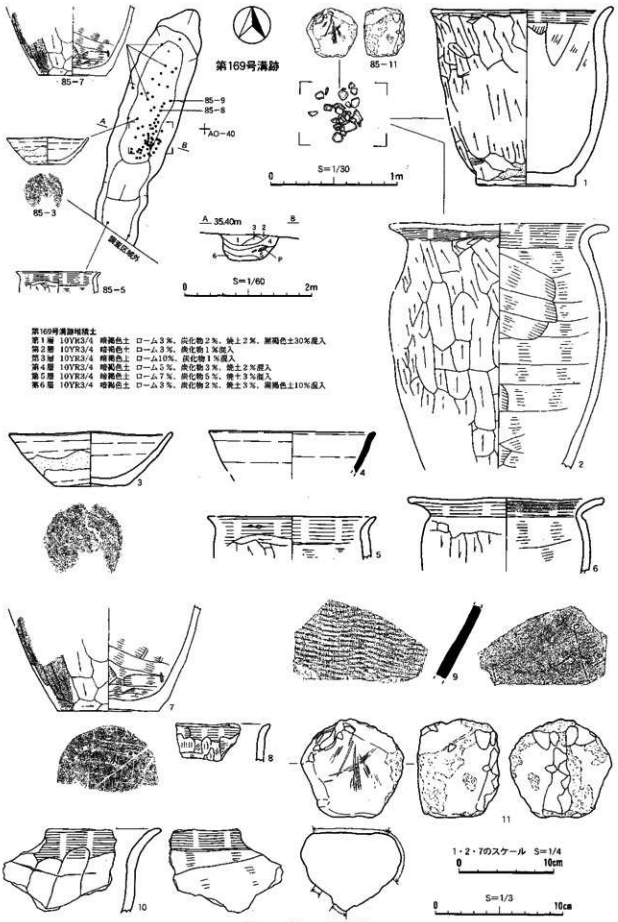


図84　第165・229～231号溝跡



第169号溝跡堆積土
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム3％、炭化物2％、焼土2％、黒褐色土30％混入
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム3％、炭化物1％混入
第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム10％、炭化物1％混入
第4層 10YR3/4 暗褐色土 ローム5％、炭化物3％、焼土2％混入
第5層 10YR3/4 暗褐色土 ローム7％、炭化物5％、焼土3％混入
第6層 10YR3/4 暗褐色土 ローム3％、炭化物2％、焼土3％、黒褐色土10％混入

図85 第169号溝跡

第165号溝跡（図84）南から北方向へ向かったのち、第101号畠跡を囲うように大きく東側へ迂回し、調査区際付近で再び北方向へ進路を変える。第101号畠跡と共に残したセクションベルトから、白頭山火山灰の混入する第Ⅳ層中から掘り込まれていると考えられるが、ほぼ第Ⅳ層土と同質の土が自然堆積するために土層図は第Ⅴ層上面から掘り込まれているようにしか作成することができなかった。これらのことから、本溝跡と第101号畠跡とは同時存在していた可能性が高い。堆積土中及び底面からは土師器・須恵器のほか自然礫が多く出土したが、ほとんどは東に屈曲して以北から出土した。

第169号溝跡（図85）等高線に斜交する溝跡である。南半は調査区外にのび、検出された長さは3.7mである。幅は68～96cmで、大きな変化はみられない。断面形は逆台形状を呈し、底面には段差を有し、北側が20cm深く掘り込まれている。堆積土は暗褐色土で、堆積土下位には炭化物と焼土が混入する。検出された部分のほぼ中央部から炭化物や焼土とともに土師器片などが出土した。破片は細かいものが多く、炭化物や焼土とともに廃棄されたものと考えられる。出土遺物は土師器坏２点・皿１点・甕28点、須恵器坏２点・大甕３点、礫石器１点である。図85－１は小型の土師器甕で、頸部は短く、口縁の外反は弱い。口縁ヨコナデ後に胴部にケズリを施し、口縁付近までケズリがみられる。図85－２は第165号溝跡出土の破片と接合している。

第172号溝跡（図86）東西方向から北東～南西方向に屈曲するＬ字状の溝跡で、南端は調査区外にのびる。検出された長さは14.4mである。幅は30～50cmでほぼ一定であるが、AR－40グリッド以東では部分的に広がり、１m以上の部分もある。底面にはやや起伏があり、深さは10～25cmである。本溝跡の内側には第114号竪穴住居跡が検出され、区画溝などの可能性が考えられる。

第174・180・181・223号溝跡（図87）第174号溝跡は斜面下方の東側が開口するコの字状を呈し、南北は9.4mを測る。幅は24～120cmで、北西隅では24～36cmと狭く、南側では100～120cmと広い。深さは15～54cmであるが、西側では本溝跡の後に第180号溝跡が構築されており、本来の深さは不明である。断面形は半円状で、堆積土はロームが混入する暗褐色土の単層である。ただし、南西隅のＫ－Ｌセクションでは６層に分層され、暗褐色土と褐色土が混在している。本溝跡の内側には第181・223・224号溝跡が検出されている。第181・223号溝跡は等高線に直交する溝跡で、３mの間隔をあけて平行に構築されており、第181号溝跡はＬ字状に屈曲し、２条の溝跡の外形は方形を呈する。第174号溝跡がコの字状を呈することやこれらの溝跡が第174号溝跡のほぼ中央に位置することから、第174号溝跡を外周溝とする住居跡の可能性も考えられた。しかし、これらの溝跡が構築されている斜面は等高線の間隔が調査区内で最も狭く、傾斜がきつい箇所であり、竪穴住居跡はこの傾斜を避けて構築されており、この傾斜に住居を構築する場合、斜面上部を削るか、斜面下位に盛土をするか、なんらかの造成作業が必要と思われるが、そのような痕跡はみられなかった。また、斜面下位の盛土が畑地造成時の削平により消失したとすれば、第181号溝跡のコーナーも削平されることになる。現地形のままで住居が構築されたと考えるならば、第223号溝跡西側からの比高差は20cmになり、床面の削平も考え合わせると、第181号溝跡の東側部分では深さ40cm以上の周溝が想定されなければならない。住居跡と断定できる決定的要因がなく、２条の溝跡として報告した。第180号溝跡は等高線

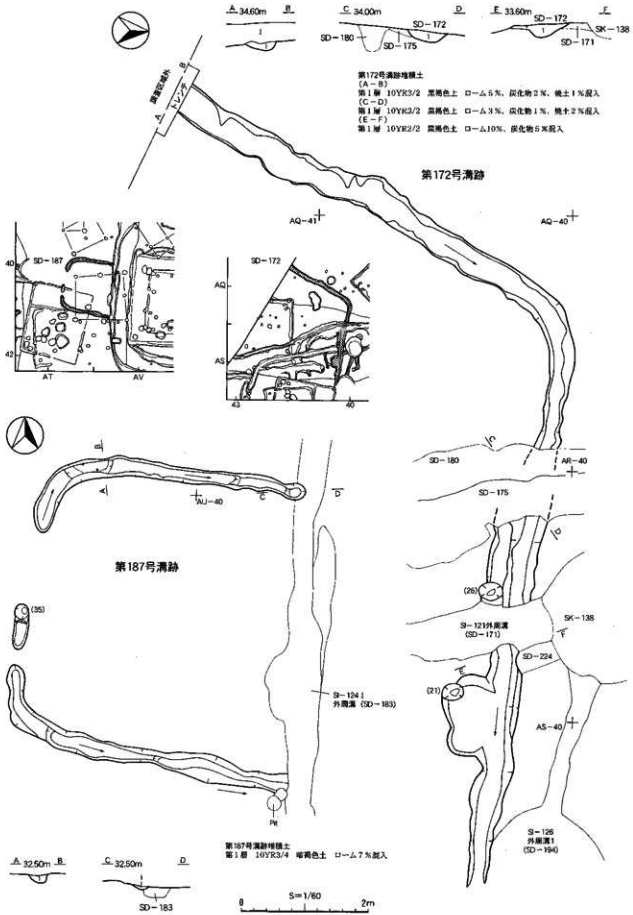
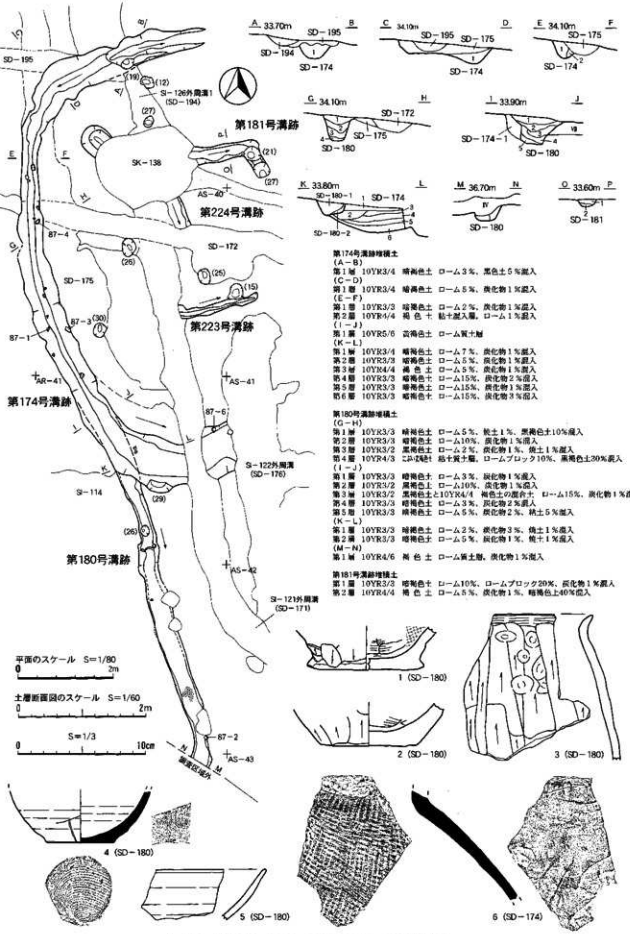


図86 第172・187号溝跡



第174号溝跡堆積土
(A－B)
第1層　10YR3/4　暗褐色土　ローム3％、黒色土5％混入
(C－D)
第1層　10YR3/4　暗褐色土　ローム5％、炭化物1％混入
(E－F)
第1層　10YR3/3　暗褐色土　ローム2％、炭化物1％混入
第2層　10YR4/4　褐色土　粘土混入層、ローム1％混入
(I－J)
第1層　10YR5/6　黄褐色土　ローム質土層
(K－L)
第1層　10YR3/4　暗褐色土　ローム7％、炭化物1％混入
第2層　10YR3/3　暗褐色土　ローム5％、炭化物1％混入
第3層　10YR4/4　褐色土　ローム5％、炭化物1％混入
第4層　10YR3/3　暗褐色土　ローム15％、炭化物2％混入
第5層　10YR3/3　暗褐色土　ローム15％、炭化物1％混入
第6層　10YR3/3　暗褐色土　ローム15％、炭化物3％混入

第180号溝跡堆積土
(G－H)
第1層　10YR3/3　暗褐色土　ローム5％、粘土1％、黒褐色土10％混入
第2層　10YR3/3　暗褐色土　ローム10％、炭化物1％混入
第3層　10YR3/2　黒褐色土　ローム2％、炭化物1％、焼土1％混入
第4層　10YR4/3　ニホ状粘土　粘土質土層、ロームブロック10％、黒褐色土20％混入
(I－J)
第1層　10YR3/3　暗褐色土　ローム3％、炭化物1％混入
第2層　10YR3/2　黒褐色土　ローム10％、炭化物1％混入
第3層　10YR3/2　黒褐色土と10YR4/4　褐色土の混合土　ローム15％、炭化物1％混入
第4層　10YR3/3　暗褐色土　ローム3％、炭化物2％混入
第5層　10YR3/3　暗褐色土　ローム5％、炭化物2％、焼土5％混入
(K－L)
第1層　10YR3/3　暗褐色土　ローム2％、炭化物3％、焼土1％混入
第2層　10YR3/3　暗褐色土　ローム5％、炭化物1％、焼土1％混入
(M－N)
第1層　10YR4/6　褐色土　ローム質土層、炭化物1％混入

第181号溝跡堆積土
第1層　10YR3/3　暗褐色土　ローム10％、ロームブロック20％、炭化物1％混入
第2層　10YR4/4　褐色土　ローム5％、炭化物1％、暗褐色土40％混入

図87　第174・180・181・223・224号溝跡

に斜行する、ほぼ直線状の溝跡である。第174号溝跡の西側を掘り直して構築されており、検出できた長さは14.0mである。幅は部分的に狭まる箇所もあるが、約50cmでほぼ一定である。深さは9～50cmで、北側が深い。断面形は上部が開く箱形を呈する。堆積土はロームやロームブロックがやや多く混入する暗褐色土が主体で、斜面からの流れ込みによる埋没と考えられる。

第175号溝跡（図88）調査区を縦断する溝跡で、等高線にほぼ平行である。南端は東に湾曲し、平面形はJ字状を呈する。南端は第121号竪穴住居跡外周溝と重複し、検出できた長さは28.2mである。底面は中央部がやや高く、北と南に向かって傾斜している。幅は約40～50cmとほぼ一定であるが、南側ではやや狭まる。本溝跡の斜面下位には竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが構築されており、雨水よけや区画溝の用途が想定される。

第177号溝跡（図89）調査区をほぼ横断する溝跡である。同時に掘り下げをおこなった第228号溝跡以外の全ての遺構より新しい。断面形は逆台形状で、堆積土は6層に分層され、黒褐色土を主体とする自然堆積である。底面は黒褐色土とロームの混合土による貼り土で平坦に整えられている。C－Dセクション付近で溝跡の東脇から径70cm、厚さ10cm程度の焼土範囲を検出した。堆積土中から土師器・須恵器片と砥石1点、敲磨器1点のほか自然礫が出土し、第109・118号溝跡と同様の様相を呈する。

第187号溝跡（図86）溝跡の平面形態はU字状を呈するが、中央で幅1.2mにわたって途切れている。付近は耕作のために削平されており、非常に浅い溝跡として確認したため、底面の特に浅い場所だった可能性もある。

第207号溝跡（図92）第128号竪穴住居跡の外周溝である第200号溝跡と第128号竪穴住居跡と重複する。調査時には第128号竪穴住居跡より古い竪穴住居跡の外周溝の一部と捉えていたが、第128号竪穴住居跡の掘り方の埋土を除去したところ、第207号溝跡の続きは検出されなかった。これは第128号竪穴住居跡の掘り方が部分的に非常に厚かったことと、第128号竪穴住居跡と重複する付近の溝跡の深さが6～8cmと浅いことから、住居構築時に壊されて残らなかった可能性もある。

第208号溝跡（図91）L字状を呈する溝跡で、屈曲する地点で第182号土坑と重複する。確認面では本溝跡と第182号土坑とを区別することはできなかった。土層観察から土坑が古いと判断したが、本来溝跡と土坑が連結した形で同時存在し、機能中に第182号土坑の下半部が埋まってしまった可能性もある。

第211・212号溝跡（図92）並走する2条の浅い溝跡として確認した。重複するすべての遺構より新しい。黒褐色土を主体とする自然堆積である。

第221号溝跡（図91）西側は削平のため途切れている。中央に136×80cm、溝底面からの深さ5～10cmの不整楕円形の土坑状の落ち込みがみられる。堆積土は7層に分層され、黒色土と黒褐色土を主体とする人為堆積と考えられる。

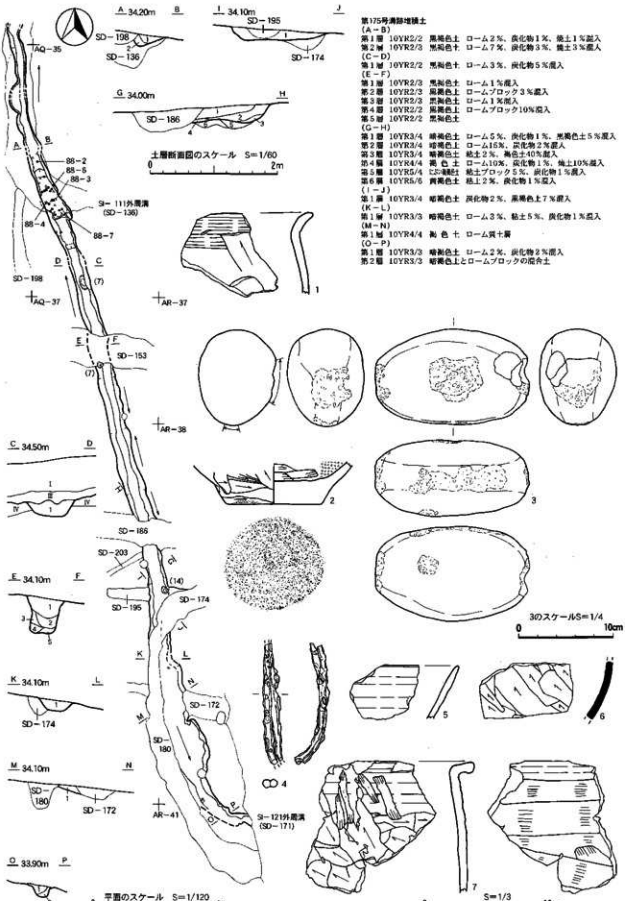

第175号溝跡堆積土
(A－B)
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム2％、炭化物1％、焼土1％混入
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ローム7％、炭化物3％、焼土3％混入
(C－D)
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム3％、炭化物5％混入
(E－F)
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム1％混入
第2層 10YR2/3 黒褐色土 ロームブロック3％混入
第3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム1％混入
第4層 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック10％混入
第5層 10YR2/2 黒褐色土
(G－H)
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム5％、炭化物1％、黒褐色土5％混入
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム16％、炭化物2％混入
第3層 10YR3/4 暗褐色土 焼土2％、角焼土40％混入
第4層 10YR4/4 褐 色 土 ローム10％、炭化物1％、焼土10％混入
第5層 10YR5/4 にぶい褐土 焼土ブロック5％、炭化物1％混入
第6層 10YR5/6 黄褐色土 焼土2％、炭化物1％混入
(I－J)
第1層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物2％、黒褐色土7％混入
(K－L)
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム3％、粘土5％、炭化物1％混入
(M－N)
第1層 10YR4/4 褐 色 土 ローム質土層
(O－P)
第1層 10YR3/3 暗褐色土 ローム2％、炭化物2％混入
第2層 10YR3/3 暗褐色土とロームブロックの混合土
土層断面図のスケール S=1/60
0 2m
平面のスケール S=1/120
0 4m
3のスケール S=1/4
0 10cm
S=1/3
0 10cm

図88　第175号溝跡

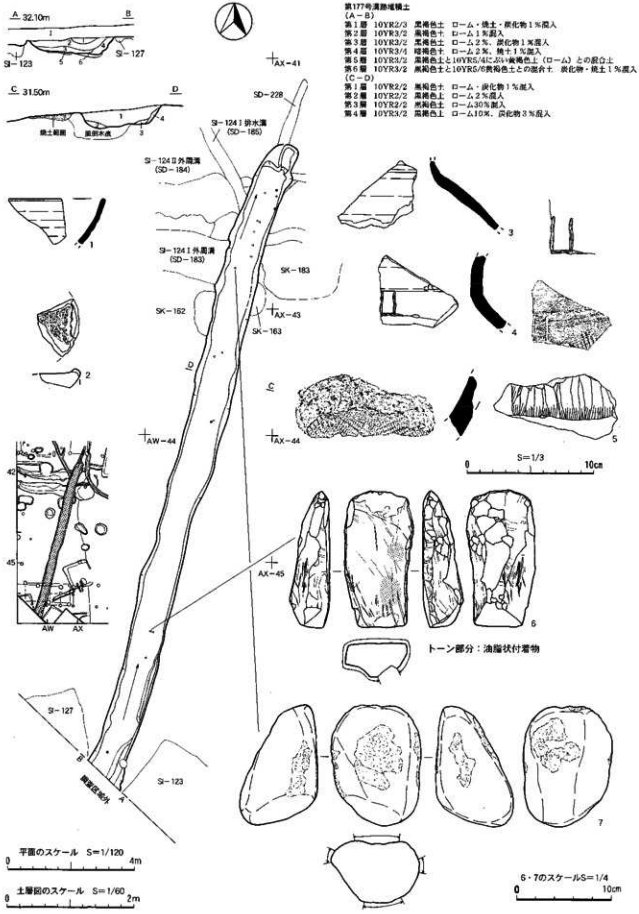

第177号溝跡堆積土
（A－B）
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム・焼土・炭化物1％混入
第2層 10YR3/2 黒褐色土 ローム1％混入
第3層 10YR3/2 黒褐色土 ローム2％、炭化物1％混入
第4層 10YR3/4 暗褐色土 ローム2％、焼土1％混入
第5層 10YR3/2 黒褐色土と10YR5/4にぶい黄褐色土（ローム）との混合土
第6層 10YR3/2 黒褐色土と10YR5/6黄褐色土との混合土 炭化物・焼土1％混入
（C－D）
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム・炭化物1％混入
第2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム2％混入
第3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム30％混入
第4層 10YR3/2 黒褐色土 ローム10％、炭化物3％混入
A 32.10m
B
SI－123
SI－127
C 31.50m
D
焼土範囲
黒褐水成
AX－41
SD－228
SI－124Ⅰ排水溝
（SD－185）
SI－124Ⅱ外周溝
（SD－184）
SI－124Ⅰ外周溝
（SD－183）
SK－183
SK－162
SK－163
AX－43
AW－44
AX－44
AX－45
AW
AX
SI－127
SI－123
B
A
黒褐色地外
S=1/3
0
10cm
トーン部分：油脂状付着物
平面のスケール S=1/120
0
4m
土層図のスケール S=1/60
0
2m
6・7のスケールS=1/4
0
10cm

図89 第177号溝跡

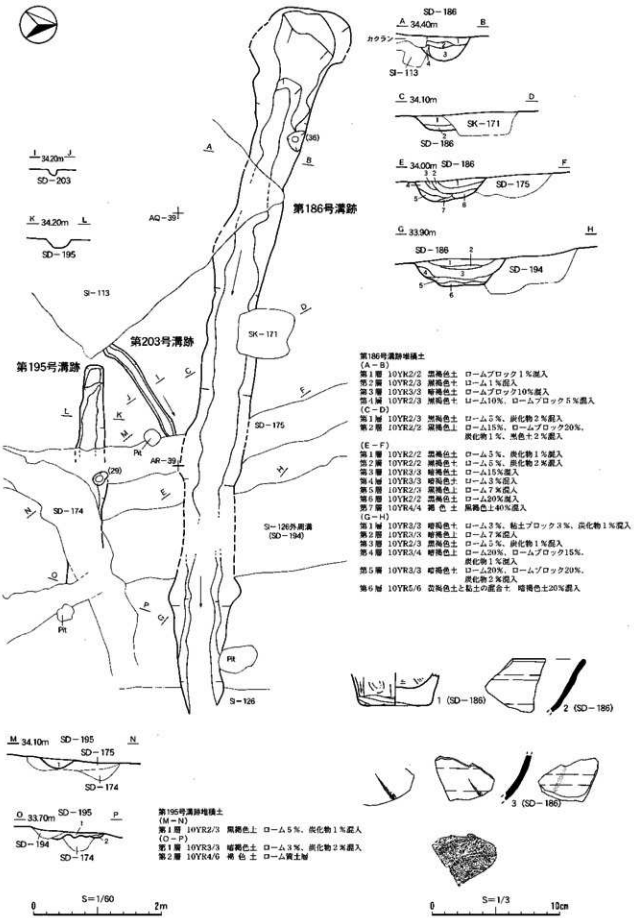
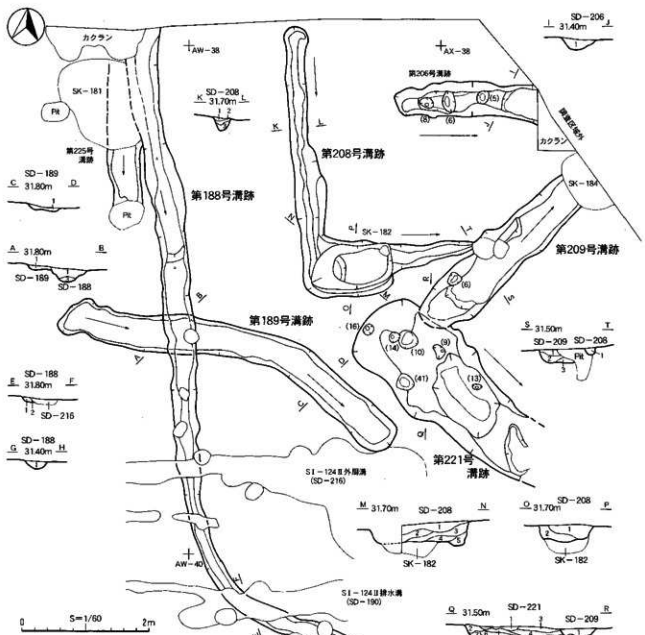


図90　第186・195・203号溝跡



第188号溝跡堆積土
（A－B・E－F・G－H）
第1層　10YR2/3　黒褐色土　小ロームブロック7％、焼土3％、炭化物3％混入
第2層　10YR3/2　黒褐色土　黄褐色土30％混入
第3層　10YR5/6　黄褐色土　暗褐色土30％混入

第189号溝跡堆積土
（A－B・C－D）
第1層　10YR3/3　暗褐色土　ローム5％、炭化物3％混入

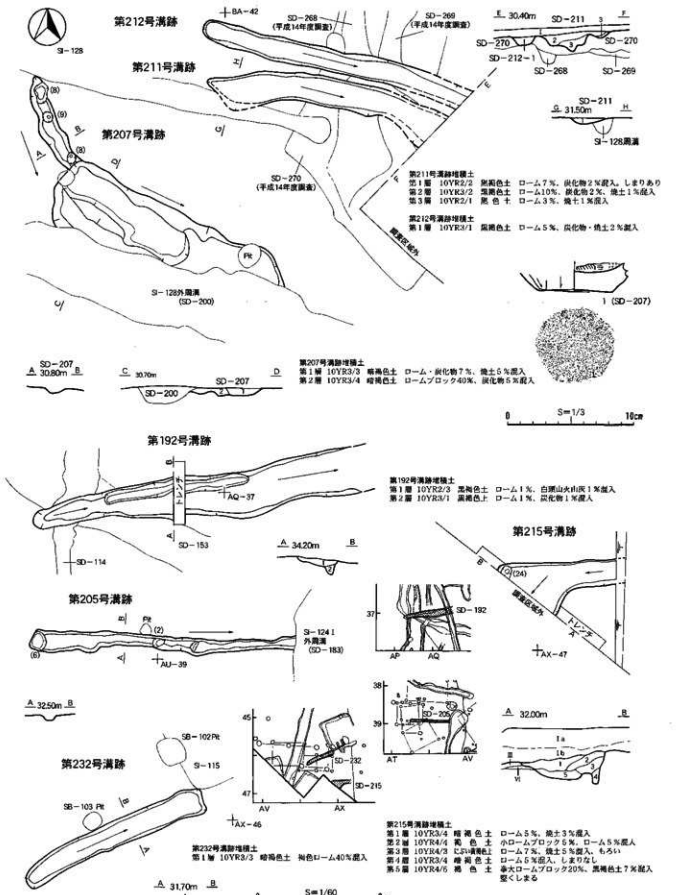
第206号溝跡堆積土
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム10％混入

第208号溝跡堆積土
（K－L・S－T）
第1層　10YR2/3　黒褐色土とロームとの混合土　炭化物1％、にぶい黄橙色砂土3％混入
第2層　10YR2/3　黒褐色土　ローム10％、暗褐色土10％、炭化物1％混入
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム3％、炭化物1％、焼土1％混入
（M－N・O－P）
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム7％、炭化物2％、焼土1％、暗褐色土5％混入
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ローム5％、炭化物2％、焼土1％、黒褐色土3％混入
第3層　10YR2/2　黒褐色土　ローム10％、焼土・炭化物3％混入、ややしまりあり
第4層　10YR2/2　黒褐色土　ローム5％混入、ややしまりあり
第5層　10YR2/3　黒褐色土　ローム9％混入、しまりなくもろい

第209号溝跡堆積土
（Q－R）
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム5％、炭化物2％、焼土1％混入
第2層　10YR4/6　褐色土　黒褐色土20％、黒色土3％混入
第3層　10YR4/6　褐色土とローム土10YR2/3　黒褐色土との混合土
（S－T）
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム5％、焼土2％、炭化物1％、黒色土5％混入
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ローム15％、炭化物2％、暗褐色土3％混入
第3層　10YR4/6　褐色土　黒褐色土30％、黒色土3％、炭化物・焼土1％混入

第221号溝跡堆積土
第1層　10YR2/1　黒色土　黒褐色土10％、ローム・炭化物2％、焼土1％混入
第2層　10YR2/3　黒褐色土　ローム5％、炭化物2％、暗褐色土3％混入
第3層　10YR2/3　黒褐色土　ローム・炭化物・黒褐色土3％、焼土1％混入
第4層　10YR2/2　黒褐色土　ローム・炭化物・黒褐色土3％、焼土1％混入
第5層　10YR3/4　暗褐色土　ローム30％、黒褐色土5％、炭化物3％、焼土1％混入
第6層　10YR2/2　黒褐色土　ローム10％、暗褐色土・炭化物2％、焼土1％混入
第7層　10YR4/6　褐色土　黒褐色土20％、暗褐色土20％、炭化物1％混入

図91　第188・189・206・208・209・221・225号溝跡



第211号溝跡堆積土
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ローム7％、炭化物2％混入。しまりあり
第2層　10YR3/2　黒褐色土　ローム10％、炭化物2％、焼土1％混入
第3層　10YR2/1　黒　色　土　ローム3％、焼土1％混入

第212号溝跡堆積土
第1層　10YR3/1　黒褐色土　ローム5％、炭化物・焼土2％混入

第207号溝跡堆積土
第1層　10YR3/3　暗褐色土　ローム・炭化物7％、焼土5％混入
第2層　10YR3/4　暗褐色土　ロームブロック40％、炭化物5％混入

第192号溝跡堆積土
第1層　10YR2/3　黒褐色土　ローム1％、白頭山火山灰1％混入
第2層　10YR3/1　黒褐色土　ローム1％、炭化物1％混入

第215号溝跡堆積土
第1層　10YR3/4　暗褐色土　ローム5％、焼土3％混入
第2層　10YR4/4　褐　色　土　小ロームブロック5％、ローム5％混入
第3層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　ローム7％、焼土5％混入、もろい
第4層　10YR3/4　暗褐色土　ローム5％混入、しまりなし
第5層　10YR4/6　褐　色　土　多大ロームブロック20％、黒褐色土7％混入
堅くしまる

第232号溝跡堆積土
第1層　10YR3/3　暗褐色土　灰色ローム40％混入

図92　第192・205・207・211・212・215・232号溝跡

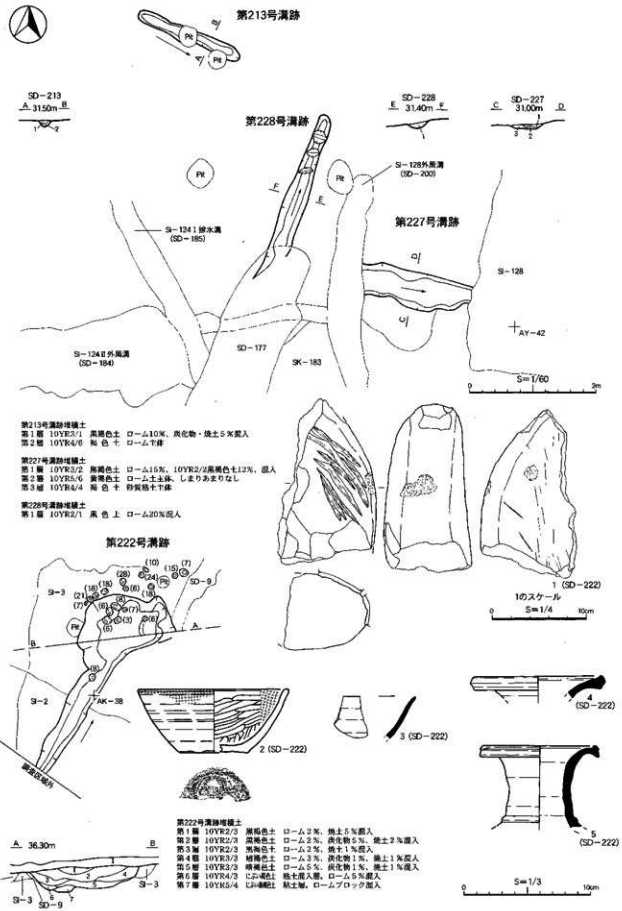


図93　第213・222・227・228号溝跡

第229号溝跡（図84）第101号畠跡、第165号溝跡と重複し、第101号畠跡より新しい。第231号溝跡と並走する。溝跡は黒色土中に構築されているため検出が困難で、そのためか所々途切れている。また、途中で一部重複する個所がみられる。本溝跡を部分的に掘り直したためと考えられる。

第231号溝跡（図84）第101号畠跡、第165・230号溝跡と重複し、第101号畠跡・第230号溝跡より新しい。第229号溝跡と並走する。溝跡は部分的に重複し、中央付近では3条になっている。本溝跡は第101号畠跡と同時に掘り下げたためこの部分的な重複の新旧は捉えることができなかった。少しずつずれる状態で重複するため、第229号溝跡と同じく部分的な掘り直しと考え、それぞれに番号を付さなかった。図84－3は酸化焔焼成の須恵器壷で、外面には火ハジケがみられる。

溝跡計測表

遺構番号	図	位　置	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	断面	重　複	掲載外遺物			備　考
								土師器	須恵器	その他	
9	69	AK-37	(2.0)	18~36	2~10	直線状	SI-3→,→SD-222	0	0	0	
29	70	AI~AM-27	10.3	22~64	4~23	直線状	SK-109・・→SK-110	0	0	0	
101	69	AG-34~35	(2.0)	48~52	5~15	弧状	SD-15・102→	0	0	0	
102	69	AG-33~35	(7.9)	40~88	7~19	弧状	SK-101→,→SD-101・103, SD-141不明	0	0	0	
103	69	AG-34	(1.5)	36~44	5~12	弧状	SK-101・SD-102→	0	0	0	
104	69	AF-34	(0.7)	32~44	14~25	直線状	SD-141・	0	0	0	底面に耕具痕
105	70	AD-31~32	(4.1)	36~44	5~17	直線状	→SD-107	3	0	0	SD-119と同一の可能性
107	70	AD・AE-32	4.2	64~88	3~25	直線状	SD-105→	2	1	0	
109	71	AB-30~AG-27	(22.6)	52~116	2~26	直線状	SE-104・SD-118・119・128・154・158~160・162・1畠→	39	11	自然礫多、鉄滓1	全てを切る。B-Tm以後。
114	73	AF-34~38	(16.1)	18~60	2~14	直線状	SK-125・SD-153→,→SD-120・136・192	3	0	0	B-Tm以前
116	72	AA・AB-28	(1.2)	44~68	12~19	直線状	→SD-125, SD-291不明	0	0	0	B-Tm以後
118	72	AA・AB-28	(2.3)	64~84	18~36	直線状	→SD-125	0	0	0	
117	71	AC-28	(4.1)	30~60	1~8	弧状	SD-118不明	0	0	0	
118	71	AB-29~AG-27	(23.7)	80~136	5~31	直線状	SE-104・105・SD-119→,→SK-105・SD-109・125, SD-117・154不明	20	6	自然礫多	
119	70	AB-29	(2.7)	26~30	10~18	直線状	SD-158→180→,→SD109・118	0	0	0	SD-166と同一の可能性。B-Tm以後
120	74	AF-32~36	15.7	10~58	1~22	直線状	SD-114・163→	0	0	0	機械の可能性あり。B-Tm以後
123	75	AQ-32~AT-34	(12.5)	36~126	7~39	コの字状	SI-104・111・SK-122→,→SI-107, SI-108・SD-147不明	28	4	0	S D-123・124で土師器7、須恵器1、製塩1
125	72	AB-28・29	(5.7)	20~30	4~26	直線状	SD-115・116・160・162→,→SD-118	0	0	0	底面に耕具痕。B-Tm以後。
128	71	AD-28・29	(3.3)	28~44	4~15	直線状	SD-158→,→SD-180	0	0	0	
129	69	AG-22・23	(6.3)	20~38	1~19	直線状		0	0	0	
130	74	AI・24・25	(5.3)	24~34	1~10	直線状		0	0	0	
131	77	AJ・AK-25	(6.1)	98~136	7~15	直線状	→SE-103	2	0	自然礫多	
132	77	AG・AH-26	(5.0)	60~102	10~42	弧状	SE-102→	6	2	0	
135	78	AF-30~35	(19.2)	72~160	10~60	直線状	SD-153→,→SK-107・SD-136・139・157不明	139	17	自然礫多、鉄滓2	S D-135・136で土師器4、須恵器3、S D-135・150で土師器55、須恵器3、S D-135・157で土師器22、須恵器6、製塩1、鉄滓1、B-Tm以後。
137	75	AQ-33・34	(2.9)	12~21	5~24	直線状	SI-111不明	2	1	0	
139	74	AF-31~33	(10.6)	10~30	3~16	直線状	SD-135→	8	0	0	
141	69	AG-34	(2.8)	44~84	6~25	直線状	→SD-102・104不明	0	0	0	
142	81	AP-31	不明	60	34	不明	SI-104→	0	0	0	
147	81	AQ-35・36	(6.4)	52~78	5~31	J字状？	SI-111→,→SI-107, SD-123・124a不明	1	0	0	
150	77	AP-30・31	(3.3)	50~90	31~52	直線状	→SD-135・157	1	0	0	
152	82	AQ-35	(4.0)	98~138	2~35	L字状？	→SI-111・SD-136・175	5	0	0	

遺構番号	図	位置	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	形態	重複	掲載外遺物			備考
								土師器	須恵器	その他	
153	82	AP-34～AR～37	(17.1)	54～140	14～62	L字状	→SD-114・129・135・136・175・192・198, SK-125・126不明	29	3	0	B-Tm以前
154	71	AD-28・29	(2.3)	38～50	2～15	弧状	→SD-109, SD 118不明	0	0	0	
164	75	AR・AS-33・34	(4.7)	72～160	19～46	弧状	SK-131→, →SI-107	19	4	0	
165	84	AF-22～AE-25	(20.6)	24～74	3～16	クランク状	SD-229→, SD-231不明	33	4	自然礫多	カーブで分岐
167	81	AL・AM-38・39	(5.9)	18～40	9～29	J字状	101号円形周溝→	0	0	0	
168	81	AN・AO-37～39	(9.5)	8～20	5～21	直線状	→SK-139, SD-204不明	0	0	0	
169	85	AN-39・40	(3.7)	68～96	17～45	直線状		24	1	0	
172	86	AP-41～AS-40	(14.4)	26～124	5～25	L字状	SD-171・175→, SD-174・180・194・224不明	0	0	0	
174	87	AR-39～41	(14.3)	38～120	7～55	コの字状	→SD-175・180・194・195, SD-171・172不明	3	3	0	SD-174・175・195で土師器8、須恵器2
175	88	AP-34～AR～41	(28.2)	20～110	7～40	直線状	SD-136・153・174→, →SD-172・180・186・195・198, SD-171・192・203不明	48	11	自然礫多 製塩5	B-Tm以前
177	89	AW-41～AV-46	(21.0)	96～122	12～36	直線状	SD-183～185・SK-162・163・183→, SI-127・SD-228不明	91	17	自然礫多	B-Tm以後
180	87	AR-39～43	(14.0)	26～88	7～55	J字状	SD-174・175→, SI-114・SD-172不明	2	0	0	
181	87	AR・AS-39	(1.9)	28～38	11～21	L字状	→SK-138	0	0	0	
186	90	AP～AR-38	11.3	13～110	14～40	直線状	SI-113・126, SD-175・194→, SK-171, SD-197不明	6	5	0	
187	86	AT・AU-40	(12.3)	16～46	1～13	コの字状	SI-124→, SB 107不明	2	0	0	
188	91	AV-38～AX-40	(14.5)	20～54	6～20	J字状	SK-181・SD-189・225→, →SI-124	0	0	0	
189	91	AV・AW－39	5.8	48～60	7～13	J字状	→SD-188	0	0	0	
192	92	AP・AQ-36・37	(5.2)	36～74	1～17	直線状	SD-114・153・198→, SD-175不明	0	0	0	B-Tm以後
195	90	AQ・AR-39	(3.5)	28～40	8～19	直線状	SD-174・175→, →SD-194	0	1	製塩1	
197	73	AP-37・38	(1.7)	20～28	11～16	直線状	SD-186不明	0	0	0	
198	73	AP-36～38	(9.3)	16～44	11～40	直線状	SD-136・153→, →SD-192	0	0	0	B-Tm以前
199	73	AQ-37・38	(2.4)	24～28	4～11	弧状		0	0	0	
203	90	AQ-39	(1.8)	12～20	4～10	直線状	SI 113・SD-175不明	0	0	0	
204	81	AN・AO-37	4.1	13～48	1～10	直線状	SD-168不明	1	1	0	
205	92	AT・AU-38	(4.2)	12～32	3～7	直線状	SD-183不明	0	0	0	
206	91	AW・AX-38	(2.2)	40～56	9～39	直線状		0	0	0	
207	92	AY-42	(5.4)	24～120	6～20	弧状	→SI-128	7	0	0	
208	91	AW・AX-38	(6.5)	26～86	7～37	L字状	SK-182・SD-209→	0	0	0	
209	91	AX-38	(3.1)	60～78	13～37	直線状	SD-221→, →SD 208	0	0	0	
211	92	AY-BA-42	(3.6)	38～56	3～10	弧状	SI-128・SD-268～270→	0	0	0	
212	92	AY・BA-42	(4.3)	30～40	4～13	直線状	SI-128・SD-268～270→	0	0	0	
213	93	AW-40	1.8	16～20	5～11	直線状	SB-113・115不明	0	0	0	
215	92	AW・AX-46	(1.5)	40～100	6～11	直線状		0	0	0	
221	91	AW・AX-39	(3.4)	102～146	4～32	直線状	→SD-209	0	0	0	
222	93	AJ・AK-37・38	(3.2)	20～122	3～17	直線状	SI-3・SD-9→, →SI-2	0	0	0	
223	87	AR・AS-40	(1.7)	12～20	2～13	直線状	SD-171不明	0	0	0	
224	87	AR-39・40	(3.0)	36～58	10～17	直線状?	→SK-138, SD-171・172不明	0	0	0	
225	91	AV-38	(1.4)	44～52	6～15	直線状	→SK-181	0	0	0	
226	82	AP-35	(1.9)	20～48	13～27	J字状	→SD-136	0	0	0	
227	93	AX-41	(1.7)	30～58	4～16	直線状	→SI-128, SK 183不明	0	0	0	
228	93	AX-41	(2.8)	22～36	2～12	直線状	SD-177不明	0	0	0	
229	84	AD～AG-22	11.4	16～44	2～20	直線状	101畠→, →SD-165	3	0	0	一部つくりなおし
230	84	AF-21・22	(2.6)	20～34	5～11	J字状	→SD-231	2	0	鉄滓1	
231	84	AC～AG-22	(14.4)	14～56	2～24	直線状	101畠・SD-230→, SD-165不明	16	3	自然礫多 鉄滓1	つくりなおし（2回）
232	92	AW-45・46	3.1	36～42	1～8	直線状		0	0	0	

第6節　円形周溝

円形周溝の形態を有する遺構は1基検出された。調査時には第166号溝跡として調査したが、第101号円形周溝として報告する。

第101号円形周溝（図94）

AM－39グリッドに位置し、南側は調査区外にのび、北半のみが検出された。標高約33.5mの緩やかな東斜面に位置する。第Ⅶ層上面で検出された。第135号土坑・第167号溝跡と重複し、本遺構が古い。平面形は円形あるいは馬蹄形状を呈すると考えられ、馬蹄形状を呈する場合、開口部は南東から西と推定される。規模は溝の内径4.0m、外径4.3m、溝の幅は13～31cm、深さは6～21cmで、溝底面は東側が低い。断面形はU字状～箱形を呈する。堆積土はロームが混入する黒褐色土の単層である。溝の内側にピットが3基検出された。

昨年度調査した2基の円形周溝との位置関係は、本遺構の北北東10mに第1号円形周溝、25m北北西に第2号円形周溝が位置し、3基はほぼ直線上に並ぶ。しかし、規模や開口部方向がそれぞれ異なり(第1号：外径3.1m、東北東・斜面下方に開口　第2号：外径4.7m、北北西・斜面に斜行して開口)、個々の遺構をみた場合の共通性は少ない。しかし、同一直線上に位置するということはそれぞれが意識されていた可能性が高く、構築時期には時間差があるかもしれないが、同時存在していた可能性も考えられる。これら3基の円形周溝が位置するAK・AMラインは遺構が疎らで、住居跡・土坑・溝跡などが検出されてはいるが、どれも単独の遺構で、調査区の他の区域にくらべると遺構密度はかなり低い。住居跡や溝跡が繰り返し構築される区域があるなかで、このように遺構が疎らな区域があることは、当時の土地利用を考える際には注目すべき点である。　（田中）

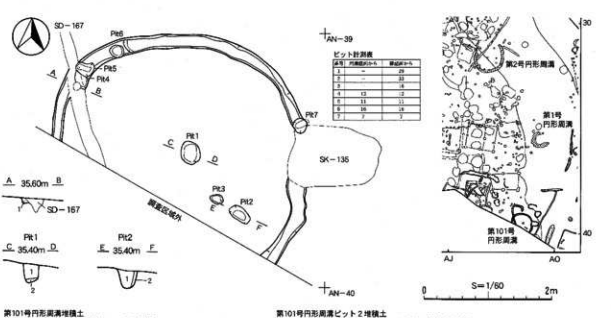


図94　第101号円形周溝

第7節　畠跡

畠跡は縄文時代の堆積土である第Ⅴ層が厚く堆積する緩やかな沢地形上につくられており、同じ場所から3区画が重複して検出された。まず、調査区際に設定された先行トレンチによって第Ⅶ層上面で並列する溝跡を検出し、土層観察から、白頭山火山灰を混入する平安時代の第Ⅳ層中位から掘り込まれていることを確認したため、これを第101号畠跡とした。付近を第Ⅲ層上面から丁寧に下げていったところ、第101号畠跡を平面的に検出するより上位の第Ⅳ層上面から、第102・103号畠跡を確認し、第101号畠跡から第102・103号畠跡までの間にはいくらかの時期差があると考えた。平成12年度に調査をおこなった第1号畠跡は今年度検出された3区画の南側約20mの地点に位置し、第Ⅳ層上面から掘り込んで、耕作によって白頭山火山灰が攪拌されている状況であったことから、第101号畠跡は第1号畠跡より古いと考えられ、第102・103号畠跡と第1号畠跡との新旧関係は不明である。

第101号畠跡（図95）

AC・AD－19～22、AE－20・21グリッドで検出された。標高は34.5mである。第210号竪穴住居跡(平成14年度調査)、第120・124・127号土坑、第229・231号溝跡、第102・103号畠跡と重複し、本遺構が最も古いと考えられる。調査区のコーナー部分に位置するため、畠跡は東西方向の調査区外へ広がっている。このうち西側は平成14年度の調査によってほぼ畠跡の範囲をとらえることができた。本稿では主に平成13年度の調査成果について述べる。

平成13年度に検出した畝間は51本を数え、これらは北からａ～ｅの5つのブロックに分けることができ、これらのブロックに加えられなかった畝間を便宜的にｆとしてそれぞれに1から番号を付した。畝間は第Ⅲ～Ⅳ層中位から掘り込まれ、畝間を掘りあげた土を両脇に盛り上げて畝としている。畝間の底面はほとんどが第Ⅴ層中でとまっているが、北側では第Ⅴ層の厚さが薄いためか第Ⅵ・Ⅶ層に達しているところもみられる。畠跡のそれぞれのブロックの土層が観察できるよう3箇所で長いセクションベルトを設定したが、畝として盛り上げた（載せた）土と生活面の境、畝と畝の上位に自然堆積した第Ⅳ層の境が確認できず、Ａ－Ｂ・Ｅ－Ｆセクションの畝間ｂ6～7間・畝間ｄ4～5間で部分的に第Ⅳ層を掘り込んでいることを確認したのみである。このため、土層図では第Ⅴ層を掘り込んでいる表現になっているほか、平面的な確認も全て第Ⅴ層でおこなったため、文中の畝間の深さも全て第Ⅴ層からの深さとなっていることを了承されたい。遺物は土師器甕・坏、須恵器大甕・壷、敲石2点が出土した。図95－8の敲石は、畠跡確認面の第Ⅴ層上面で検出された。やや摩滅しており、縄文時代の遺物の可能性もある。

以下にそれぞれのブロックについて詳細を述べる。

［ａブロック］ａブロックは最も北側に位置し、ａ1～7の7本の畝間から構成される。畝間の長さ1.3～3.6m、溝幅24～46cm、深さ4～28cmを測り、断面形はＶ字状またはＵ字状を呈する。畝間の軸方向はＮ－3～9°－Ｅを示し、北側は傾斜に沿ってやや東に向いて頭をもたげるように傾く。畝間の中軸線間の距離は80～90cmである。ａブロック付近は斜面上方にあたるため第Ⅳ・Ⅴ層が希薄であるか欠層しており、ほとんど第Ⅲ層を掘り込んでつくられ畝間の底面は第Ⅶ層まで達している。

［ｂブロック］ｂブロックはａブロックの南側に位置し、ｂ1～9の9本の畝間から構成される。畝間

の長さ1.7～6.5m、溝幅22～48cm、深さ6～21cmを測り、断面形は浅めのU字状を呈する。畝間の軸方向はN－3～6°－Wを示し、畝間の中軸線間の距離68～80cmとaブロックより狭く、全体としてもまとまりが感じられる。畝間b1は第120号土坑と重複する。bブロックの畝間は平成14年度調査区への広がりが確認されている。

[cブロック]　cブロックはbブロックの南側に位置し、c1～3の3本の畝間から構成される。畝間の長さ4.1～6.8m、溝幅26～58cm、深さ4～31cmを測り、他のブロックに比べてそれぞれの畝間の規模・中軸線間の距離が大きい。畝間の軸方向はN－10～15°－Eを示し、他のブロックとの軸方向の差が大きいためbブロックやdブロックの畝間の末端と重複している。畝間の中軸線間の距離は74～90cmとバラツキがある。

[dブロック]　dブロックはbブロックの南側、cブロックの東側に位置し、d1～17の17本の畝間から構成され、本畠跡の主体をなすブロックである。畝間d4～7の南側の末端はちょうど第231号溝跡と重複し、これに切られている。このほか、畝間d1も第124号土坑と重複する。畝間の長さ3.6～6.2m、溝幅16～64cm、深さ4～20cmを測り、断面形はU字状またはV字状である。畝間の軸方向は畝間d2～d8はN－0～8°－Eとまとまりがあるが、畝間d9～17は蛇行しているためN－4°－W～N－17°－Eと幅広い。畝間の中軸線間の距離は畝間d1～d8は58～86cm、畝間d9～d12は49～55cm、畝間d13～d18は20～110cm（蛇行のため）を測る。

[eブロック]　eブロックはe1～8の8本の畝間から構成され、第229・231号溝跡と重複し、これらに切られている。畝間の長さは0.94～4.6m、溝幅22～68cm、深さ1～16cmを測る。畝間の軸方向はN－5～16°－Eを示し、畝間の中軸線間の距離は40～84cmとバラツキがある。また、畝間の堆積土より上位から、白頭山火山灰の範囲が確認された。

[プラント・オパール及び花粉分析]　畝間a4とその両脇の畝付近をA地点として7点、畝間e8とその両脇の畝付近をB地点として5点、畝間d4とその両脇の畝付近をC地点として6点の土壌サンプルを採取し、プラント・オパール及び花粉分析をおこなった（第3章第5節）。サンプルの採取地点は平面図と土層図に示してある。

花粉分析の結果からは、畝間a4の堆積土と畝の堆積土（A－4・5地点）からソバ属の花粉、畝間a4上の現代の耕作土（A－1地点）からはソバ属とアブラナ科の花粉が検出された。これにより、ソバ属の畑作がおこなわれていたことが示唆された。現代の耕作土については、調査直前までトウモロコシ・枝豆等、前年度にはキャベツが生育する畑地であったため、それらの現代の作物の花粉と考えられる。また、植生と環境を考察して、畠跡の形成された時代には人為地が広がり、調査地の周囲にはほとんど森林のない状態が示唆されている。それに対し現代の耕作土からは、畑作がおこなわれ、周辺地域に杉林ないしマツ林が拡大・分布すると指摘されており、現在の土地利用と一致している。プラント・オパール分析の結果からは、畝間a4付近ではA－1～4地点で密度が4,000/g以上、A－6地点で密度700～3,000/g、畝間e8付近ではすべての地点から、畝間d4付近ではC－1・2地点から密度4,000/g以上のプラント・オパールが検出され、それらの地点で稲作がおこなわれていた可能性が高いと指摘されている。しかし、前述した通りキャベツ等が栽培されている現耕作土のA－1地点からも大量のプラント・オパールが検出されたことで、依然として畠の堆肥として耕作土に混ぜ込んでいた可能性・敷き藁として置いていた可能性を否定できない。

［小結］ａ～ｅの各ブロックは末端部が重複しながらもそれぞれを意識して整然と配置されており、ほぼ同時に存在していたと考えられるものの、軸方向や中軸線間の距離に差がみられることから、作付けの時期や、作物の違いが現れている可能性がある。特に、花粉分析においてＡ地点でのみソバ属の花粉が検出されたことから、ａブロックではソバ属の作物が栽培されていた可能性がある。

本遺構がつくられたのは、白頭山火山灰降下前の10世紀前葉と考えられる。

第102号畠跡（図95）

ＡＤ－21・22、ＡＥ－22グリッドで検出した。標高は34.5mである。白頭山火山灰のブロックが検出される第Ⅳ層上面で確認した。検出できたのはａ～ｅの５本の畝間である。それぞれ耕具痕が明瞭に残り、溝底面には凹凸がある。それぞれの畝間の規模は、畝間ａが長さ3.4m、幅８～26cm、深さ１～７cm、畝間ｂが長さ2.5m、幅20～30cm、深さ５～14cm、畝間ｃが長さ3.1m、幅10～26cm、深さ６～11cm、畝間ｄが長さ1.4m、幅12～26cm、深さ２～７cm、畝間ｅが長さ1.4m、幅10～20cm、深さ３～９cmである。畝間は全体的に浅いが、確認段階で広がりを追うために丁寧に下げていったところ、逆に畝間が消え初めてしまったためで、北東側は確認することが出来なかった。断面形は皿状で耕具痕により掘り込まれた部分はＵ字状を呈する。堆積土は黒色土の単層で、Ⅳ層土が混入する。溝幅は残存状態の良いところで26～30cmあり、畝間ｄ・ｅは他に比べて幅が狭い。畝間の中軸線間の距離はａｂ間140cm、ｂｃ間114cm、ｃｄ間170cm、ｄｅ間80cmで、畝間ａ～ｃ、畝間ｄ・ｅという２つのまとまりに分けることができる。それぞれの畝間の軸方向はＮ－67～72°－Ｅの間に収まるため、別区画の畠ではなさそうであり、広い畝間と広い畝を持つａ～ｃと、狭い畝間と狭い畝のｄ・ｅで別の作物を栽培していた可能性がある。遺物は出土しなかった。第Ⅳ層上面で検出したことから、10世紀前半以降の平安時代の遺構と考えられる

第103号畠跡（図95）

ＡＤ・ＡＦ－20グリッドで検出した。調査区際に位置し、一部分を調査し得たのみである。標高は34.5mで、第Ⅲ～Ⅳ層で確認した。畝間の規模は、畝間ａが長さ２m、幅20～34cm、深さ９～17cm、畝間ｂが長さ0.6m、幅14～16cm、深さ１cm、畝間ｃが長さ0.4m、幅12cm、深さ１cm、畝間ｄが長さ0.9m、幅24～28cm、深さ３～７cmである。断面形は皿状またはＵ字状である。畝間の軸方向はＮ－66～98°－Ｅでバラツキがあり、中軸線間の距離はａｂ間38cm、ｂｃ間50cm、ｃｄ間34cmで非常に狭い。遺物は出土しなかった。確認面から、平安時代の遺構と考えられるが、畝間ｂ・ｃは狭く浅いということに加えて畝幅が近すぎ、調査区際でもあることから、撹乱の類の可能性もある。

（水谷）